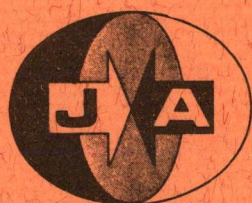


第35回

日米学生会議

報告・エッセイ集



1983

相互理解 — 平和な社会に向けて

日米学生会議実行委員会編

目 次

| | | |
|-------------------|--------|----|
| まえがき | 渡邊 香弥子 | I |
| 目 次 | | II |
| 第35回日米学生会議の代表者諸君へ | 板橋 並治 | IV |

第1部：会議の概略

| | |
|-----------|---|
| 第35回会議の構成 | 3 |
| 日 程 | 4 |
| 第35回会議参加者 | 6 |

第2部：会議報告

分科会

| | | |
|---------------|--------|----|
| 文化と芸術 | 渡邊 香弥子 | 8 |
| 教育と社会 | 三井 石根 | 11 |
| 少数派問題 | 岸本 浩 | 16 |
| 社会における男女の役割 | 萩原 浩幸 | 20 |
| 資源・エネルギーと人間環境 | 大佐賀 広幸 | 23 |
| ライフサイエンス | 木村 真美 | 27 |
| 科学技術と社会 | 戸田 繁 | 31 |
| 情報化社会 | 高橋 泰 | 34 |
| 国際関係 | 藤川 大策 | 38 |
| 国際経済 | 一倉 秀子 | 42 |
| 企業問題 | 物部 敦志 | 49 |

シンポジウム・その他

| | | |
|---------------|--------|----|
| 平和シンポジウム | 三宅 隆史 | 51 |
| ISAとの合同シンポジウム | 森井 哲也 | 54 |
| 男女フォーラム | 藤川 大策 | 55 |
| 宗教フォーラム | 長浜 麻里 | 58 |
| 広島でのホームスティ | 吉田 典子 | 60 |
| スモールトリップ | 石本 みや子 | 62 |

第3部：エッセイ集

| | | |
|---|------------|----|
| Japanese Language Circle | 嶋田晶子 | 65 |
| 「思い込んだら……」 | 津村好英 | 66 |
| あるお話 | 船橋里美 | 68 |
| Vice Report on JASC | 土川元 | 69 |
| おじちゃん物語 | 杉本耕一 | 71 |
| America Night と Japan Night | 最上裕子 | 73 |
| 日米学生会議を考えようとする人のために 西田尚弘 | | 75 |
| 主催・後援・賛助団体 | | 83 |
| 第36回日米学生会議のお知らせ | | 85 |

第 35 回 日米学生会議の代表者諸君へ

国際教育振興会理事長 板橋 並治
日米学生会議創立委員

去る7月24日の第35回日米学生会議の開会式で、91名の日米両国代表および、米側の会議主催団体である「JASC Inc.」のシュミット会長等を迎え、国際教育振興会を代表し、また第1回会議創立委員のひとりとして、歓迎の辞を述べ得たことは、大きな喜びであった。

今回の会議で、特にわが意を得たことは、学生実行委員が「相互理解—平和な社会に向けて」という主題を選んだことである。なぜなら、「相互理解」こそ第1回会議の主題であったからだ。

1933年の春、各大学ESSの有志が集まって国際情勢を論じた際、1931年の満州事変いらい悪化しつつあった米国の対日感情を和らげるため、政府はなんら有効な手を打っていないと感じたわれわれは、学生として何をなすべきか、何ができるかを論じ合った。

当時、われわれは「世界の平和は太平洋の平和に、太平洋の平和は日米両国の友好関係にあり」と信じ、友好関係を確立するには米国の学生と率直に意見を交換する機会、すなわち学生会議を開いて相互理解を計るべきであるという結論に達した。

その後、約一年間、会議費用調達のための募金活動や50名の米国学生を招く目的を持った学生親善使節団の米国派遣など、いろいろ困難な活動を続けた結果、米国から99名の参加者（うち22名は大学教授および夫人

から成るオブザーバー）を得、第1回会議は1934年夏東京で開かれ、大きな成功をおさめた。

東京での会議終了後、米側代表およびオブザーバーを関西、朝鮮を経て満州まで研修旅行に案内した。その帰途、釜山と下関間の連絡船上で、米側代表が会合を開き、会議を創立した日本側学生の創意と不屈の努力に報いるため、第2回会議を米国で開くことを議決し、学生実行委員を選んで帰国した。

第2回会議は米国側学生委員の努力で、翌1935年夏、ポートランドのリード・カレッジで開かれた。こうして会議は毎年、日米両国で交互に開かれるという方式が確立した。

ここで強調したいことは、この会議が学生の頭から生まれ、彼らの熱意と弛まぬ努力によって実現された真の「学生会議」すなわち「学生の、学生による、学生のための会議」ともいえるということである。

日米両国の学生実行委員が、これを会議の伝統として、今日まで受けつぎ、守り続けてきたことに、私は大きな誇りを持っている。会議の主題、プログラムの作成および実施はすべて学生委員によって行われ、いわゆる主催団体は会議の資金計画、1年ごとに交代する実行委員間の連絡や記録保存などにあたり時には学生委員の要請に応じ忠言を与えることもある。しかし、会議の主体はあくまでも学生諸君である。

会議創立のいきさつ、とくに創立に参画した学生諸君の当時の考え方については、このくらいにして、次にストックホルム平和研究所の世界の軍備状況に関する1983年度報告の要点を紹介することにする。

「兵器抑制および軍縮問題に関する世界情勢は頗る暗い。1982年までの10年間に軍備縮少の話し合いは全く進展せず、軍拡競争が加速している。」

「もしジュネーブにおける国連軍縮委員会での交渉が決裂すれば、現在すでに50000個に達している世界の核兵器は、1990年代初期には60000個に増える。この意味で1983年は決定的に重大な年といえる。」

「核兵器は一旦配備されると、削減される可能性は殆んどない。ジュネーブ交渉で、米国のMX、ソ連のSS-20、NATOのパーシングⅡや巡航ミサイル等の配備計画中止の交渉が失敗すれば、NATOとワルシャワ条約機構間に新しい対決の場が生れるだろう。しかし交渉が成立すれば、核兵器の配備数は大幅に削減されるだろう。」

「過去4年間に世界の軍事費は年4%も上昇しており、それ以前の4年間の2%の増加となっている。これは主として米国の軍事費増大による。ベトナム戦終結後、米国の軍事費は減少したが、1979年以降、年平均7%の増大を示している。しかもレーガン政権はこの率を今後5年間続けるといっている。」

「他の地域で軍事費の増大が世界の平均を上回っているのは、中東、極東（中国を除く）大洋州および中南米である。ソ連の軍事費を推定するのは難しいが、米国中央情報局の推定によると、過去6年間の増加率は年2%で、1970年代の3ないし4%を下回っている。」

「西欧諸国中、NATOが設定した年3%の軍事費増大を行っているのは英国のほか2、3の国であるが、フランスは核兵器に重点を置いて、1982年度予算の14%を当てている。1983年には戦略核兵器の生産費を急増させる意図とのことである。」

「最も憂慮すべきことは、先進国から第三世界の諸国への武器輸出の急増である。1982年中の武器輸出額は、それ以後の5年間に比べ80%もの急増を示している。米ソの2カ国の輸出総額の1/3を占めているが、ソ連は少数の国に大量輸出している。」

「1982年会計年度中の米国の武器輸出契約高は210億ドルに達したが、これはカーターの政策からの大転換を示している。この問題には輸出拡大をねらう経済的圧力がからんでいるので、武器輸出の削減は頗る難しい。例えばソ連にとって武器輸出は外貨獲得の重要な手段であるという。」

長くなったが、この報告にあげられた事実や数字が、代表諸君のディスカッションの材料として、少しでも役立つようお願いしている。

際限なく加速している軍拡競争を止めるには、各国の軍備を現状で凍結する以外に手はない、と私は考えている。平和は「力の均衡」によると考えている人々は、凍結によって均衡が破れるのではと心配しているようだが、現在の軍備で均衡が保たれているなら、その心配はない。

しかし、東西の超大国の指導者が、古い「力の均衡」観念を脱し、根強い相互不信感を除去して軍縮への道を真剣に求めぬ限り、軍備凍結案の実現は望めない。だが、世界の人々（超大国の国民を含めて？）は、「誰か」が軍縮運動を積極的に進めるよう願っている。」

日本こそ、その「誰か」としての資格を備えていると私は考えている。なぜなら、日本は平和憲法を守り続けており、また原爆の洗礼を受けた唯一の国であり、さらに自由世界第二の経済大国でありながら、その経済力を軍事大国になるために使わなかったという実績を持っているからだ。

このような実績を背景に、まず自国の軍備を凍結して世界に呼びかければ、日本を信頼して同調する国が必ず現われると私は信じている。だが残念ながら、米国の圧力に屈し、毎年軍事予算を突出させている「タカ派」の現政権にそれを望むことは、全く無理といわざるを得ぬだろう。

東西の超大国が軍備凍結案に合意すれば、始めて軍縮への道が大きく開かれる。凍結状態を起点として、毎年各国同率で軍備を削減する可能性が出てくるからだ。仮に毎年5%の割で削減すれば、20年で軍備はゼロになる。

現在世界の軍事費は6,000億ドルにのぼるという。この全く非生産的で人命と環境の破壊にしか役に立たぬ金を非軍事的な目的に向ければ、何千万といわれる世界の飢餓人口を救い、また膨大な外債に苦しむ中南米その他の途上国を経済的破綻から救えるはずだ。

人類が求めるこのように素晴らしい世界、平和な世界は「力の均衡による平和」という概念から脱却し、軍縮を実現することによ

て可能となる。この可能性を現実のものとし得るか否かは、東西両陣営の指導者が軍備凍結案に合意できるような環境、すなわち両者が率直な話し合いによって、真の相互理解をもたらし得るか否かにかかっている。この意味で実行委員が「相互理解」を会議の主題に選んだことは、誠に時宜を得たものといわねばならぬ。

両国の代表諸君は、貿易摩擦などの難問を抱えている日米間の相互理解と信頼を促進するという大役を担っている。この会議が「学生の会議」であり、その成功が諸君の双肩にかかっていることを忘れず、会議のプログラムに積極的に参加するよう願っている。

また、米国の代表諸君は、在日中に日本および日本人について「何でも」学んでやろうという意気込みで、目と耳を活用してもらいたい。そして帰国後は、日本での体験について自分の考えを率直に伝えてもらいたい。そうすることによって諸君は日米両国の青年の間に、相互理解の輪を拡げること大きく貢献することができるだろう。

ここで、会議の開催に多大のご支援を与えて下さった諸団体—外務省、文部省、日本万国博覧会記念協会、国際教育交換協議会、日米文化センター、三菱銀行国際財団、国際教育振興会賛助会—ならびに多くの銀行、会社等に対し、国際教育振興会および学生実行委員会に代り、厚く御礼申し上げます。

第 35 回
日 米 学 生 会 議

報告・エッセイ集



第 1 部

会 議 の 概 略

第 3 5 回 会 議 の 構 成

第 3 5 回日米学生会議は「相互理解—平和な社会に向けて」という総合テーマのもとに行われた。相互依存関係がますます緊密化し、とかく様々な面において摩擦問題の見られる日米関係には、相互理解から始めて、平和な社会の実現をめざすべく努力すべきであると考えたわけである。

本会議に向けて、日本側は三カ月間余りの準備期間を持った。

本会議の討議の中心として、11の分科会が設けられた。すなわち、「文化と芸術」、「教育と社会」、「少数派問題」、「男と女」、「資源・エネルギーと人間環境」、「ライフサイエンス」、「科学技術と社会」、「情報化社会」、「国際関係」、「国際経済」、そして、「企業問題」である。

各分科会は、討論に現実的な視野を盛りこむために、「野外研修」(Field Trip)を行った。これは、分科会単位で、議題に関連する人物、団体、施設、機関などを実際に

訪れるものである。

全体の活動及び討議として、「講演」、「シンポジウム」、「家庭滞在」が設けられた。講演は、衆議院議員・加藤紘一氏、米国大使館・ウィリアム・クラーク 公使、外務省情報文化局・苅田吉夫参事官、シャープ労働組合中央執行委員長・岸本康哉氏、大阪商工会議所国際部部长・杉本道夫氏、松下電器産業取締役・高畑敬一氏らによって行われた。シンポジウムは、「平和と安全保障」、フォーラムは、「男女」、「宗教」の二つが設けられた。家庭滞在は、米国側は、東京と京都で、そして広島で日米合同で行った。合同で行った。

会議中は、分科会を中心とする討論はもちろんだが、両国学生間の精神的・文化的交流も盛んで、多くの友情が生まれた。JAPAN NIGHT・AMERICA NIGHTでは、両国学生が、各々の文化を紹介し合い、楽しいひとときを過ごした。

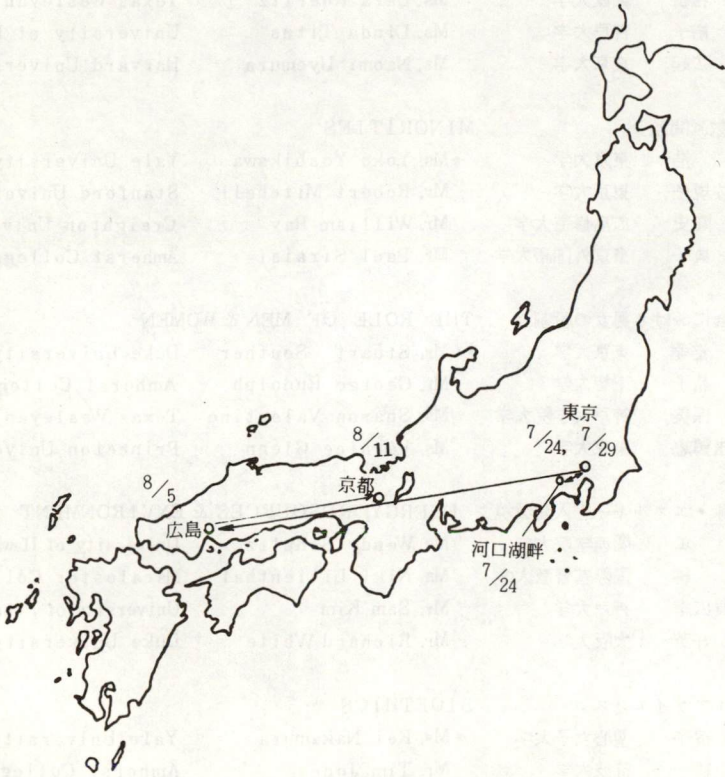
日 程

会議期間 1983年7月24日から8月18日まで

日 程 7月22日(金)・23日(土) 直前合宿

- 7月22日(金) 米国側代表成田に到着/家庭滞在
24日(日) 本会議開始, 国際教育振興会にて開会式, 河口湖へ移動
25日(月) 分科会討論/平和と安全保障シンポジウムⅠ,
Japanese Language Circle
26日(火) 分科会討論/ジャパナイト
27日(水) Sports Day
28日(木) 分科会討論/アメリカナイト
29日(金) 東京に移動/男女フォーラム
30日(土) 分科会討論/野外研修
米国大使館主催パーティー
31日(日) 自由行動
8月1日(月) 衆議院第一議員会館訪問,
米国大使館訪問, 外務省訪問
2日(火) 平和と安全保障シンポジウムⅡ・Ⅲ(ISAと合同)
3日(水) 分科会討論/野外研修
4日(木) 中間反省会/トーキーナイト
5日(金) 広島へ移動
6日(土) 平和式典参列/平和と安全保障シンポジウムⅣ
/分科会討論, 野外研修
7日(日) 分科会討論/平和と安全保障シンポジウムⅤ
8日(月) 平和と安全保障シンポジウムⅥ/東洋工業訪問
9日(火) 広島家庭滞在
10日(水) 小旅行
11日(木) 京都到着, 天竜寺滞在
12日(金) 宿舎へ移動, 宗教フォーラム
13日(土) 分科会討論/野外研修
14日(日) 自由行動
15日(月) 分科会討論/野外研修, 実行委員選挙
16日(火) 大阪商工会議所訪問

- 17日(水) 分科会討論(総括), テーブルフォーラム, 反省会/サヨナラパーティー
- 18日(木) 閉会式/日本側代表解散
米国側代表家庭滞在
- 20日(土) 米国側代表東京へ移動
- 21日(日) 米国側代表帰国



第 3 5 回 会 議 参 加 者

〈文化と芸術〉

ARTS AND CULTURE

| | | | |
|---------|----------|-----------------------|----------------------|
| **渡邊香弥子 | 国際基督教大学 | *Mr. Andrew Inforsino | Amherst College |
| 石本みや子 | 関西学院大学 | Ms. Mariko Golden | Princeton University |
| 森井 哲也 | 広島大学 | Mr. Todd Leonard | Purdue University |
| 福井 明子 | お茶の水女子大学 | Mr. Charles Nimick | Princeton University |

〈教育と社会〉

EDUCATION & SOCIETY

| | | | |
|--------|------|--------------------|----------------------------|
| *西岡 浩美 | 大阪大学 | *Mr. Scott Scharer | Princeton University |
| 三井 石根 | 筑波大学 | Ms. Cara Koeritz | Texas Wesleyan |
| 最上 裕子 | 神戸大学 | Ms. Linda Titus | University of Pennsylvania |
| 山地 弘起 | 東京大学 | Ms. Naomi Uyemura | Harvard University |

〈少数派問題〉

MINORITIES

| | | | |
|-------|---------|---------------------|----------------------|
| *岸本 浩 | 東京大学 | *Ms. Yoko Yoshikawa | Yale University |
| 藤井佐規子 | 東京大学 | Mr. Robert Mitchell | Stanford University |
| 三宅 隆史 | 広島修道大学 | Mr. William Ray | Creighton University |
| 吉田 典子 | 東京外国語大学 | Mr. Paul Siraisi | Amherst College |

〈社会における男女の役割〉

THE ROLE OF MEN & WOMEN

| | | | |
|--------|---------|----------------------|----------------------|
| *萩原 浩幸 | 東京大学 | **Mr. Stuart Souther | Duke University |
| 島田 晶子 | 上智大学 | Mr. George Rudolph | Amherst College |
| 中里 保美 | 神戸女学院大学 | Ms. Sharon Valentine | Texas Wesleyan |
| 坂本佳鶴恵 | 東京大学 | Ms. Vernice Glenn | Princeton University |

〈資源・エネルギーと人間環境〉

ENERGY, RESOURCES & ENVIRONMENT

| | | | |
|-------|---------|---------------------|-------------------------------|
| *藤井 薫 | 関西学院大学 | Ms. Wendy Schultz | University of Hawaii at Manoa |
| 津田 純 | 国際基督教大学 | Ms. Niki Lilienthal | Macalester College |
| 大佐賀広幸 | 神戸大学 | Mr. Sam Kim | University of Pennsylvania |
| 津村 好英 | 大阪大学 | Mr. Richard White | Duke University |

〈ライフサイエンス〉

BIOETHICS

| | | | |
|--------|--------|---------------------|---------------------------|
| *赤津 晴子 | 聖心女子大学 | *Ms. Kei Nakamura | Yale University |
| 杉本 耕一 | 筑波大学 | Mr. Tim Jones | Amherst College |
| 下川 優子 | 上智大学 | Ms. Patricia Jordan | Lewis-Clark State College |
| 木村 真美 | 九州大学 | Mr. Allen Miner | Brigham Young University |

<科学技術と社会>

* 田中 智之 東京大学
船橋 里美 関西学院大学
坂本 光弘 東京大学
戸田 繁 東京大学

SCIENCE, TECHNOLOGY & SOCIETY

* Mr. Ken Anderson Brigham Young University
Ms. Erin Kennedy Creighton University
Mr. Jonathan Poritz Harvard University
Mr. Richard Sowalsky Amherst College
Mr. David Gallimore Yale University

<情報化社会>

* 西田 尚弘 慶応大学
西郷 公子 一橋大学
関 知子 聖心女子大学
高橋 泰 金沢大学
西 美佐子 関西大学

COMMUNICATION SYSTEMS

* Ms. Karen Lowry Seattle University
Mr. David Conner University of Oregon
Ms. Carla Johns Smith College
Mr. J. Ross King Yale University

<国際関係>

* 土川 元 一橋大学
藤川 大策 早稲田大学
岡 篤 慶応大学
住野 豪生 慶応大学

INTERNATIONAL RELATIONS

* Mr. Terrence Tehranian University of Hawaii at Manoa
Ms. Renee deNevers Stanford University
Ms. Karen Regan Duke University
Mr. John Rogers Yale University

<国際経済>

* 八木 健 一橋大学
長浜 麻里 聖心女子大学
大林 照史 慶応大学
一倉 秀子 早稲田大学

INTERNATIONAL ECONOMICS

* Ms. Lucille Ito University of California, Berkeley
Ms. Mary Allen Countryman University of Washington
Mr. Karl Fooks University of California, Berkeley
Mr. James Gollin Johns Hopkins University

<企業問題>

* 物部 敦志 同志社大学
松井 義司 慶応大学
岡田 義人 青山学院大学
大嶋 友秀 関西大学

INTERNATIONAL BUSINESS

* Mr. Brian Bray University of Oregon
Mr. Clark Browne Harvard University
Mr. James Massie University of Pittsburgh
Ms. Yoko Tsuchiya University of California, Berkeley
Mr. George Duke Duke University

第 2 部

会 議 報 告

「文化と芸術」

国際基督教大学 4 年 コミュニケーション

渡 邊 香 弥 子

文化と芸術の分科会は、米国側から、Andrew Infosino(コーディネーター、アマースト大学)、Mariko Gordon(プリンストン大学)、Todd Leonard(パーデュー大学)、Charles Locky Nimick(プリンストン大学)、日本側からは、渡邊香弥子(コーディネーター、ICU)、福井明子(お茶の水女子大学)、石本みや子(関西学院大学)、森井哲也(広島大学)が参加した。

折しも世界コミュニケーション年であり、異文化間交流の重要性が文化交流の面ばかりでなく、政治、経済の分野でも認識されつつあるが、この分科会では敢えてそうした「How to Communicate」の方法論を離れて、文化の具象としての芸術に注目することにした。既に発表された文化論をただ借りてくるのではなく、自分達の目で実際に見、耳で実際に聞いて、自分達なりに文化を把えてみようというわけである。今年は会議が日本で開かれることもあり、主に日本の芸術に着目しながら、アメリカ文化と日本文化を考察した。

異文化の認識

今回の会議は日米どちらの学生にとっても異文化を体験する機会であった。米国人学生にとっては、勿論生活の場そのものが日本に移ったこと、日本人学生にとっては、一日のほとんどを英語でコミュニケーションしなくてはならないということである。ところで「異文化」とは何だろうか。何がどのように自分達の文化と違うのだろうか。私達の分科会活動はこの疑問から始まった。

まず、馴染みのない文化に接した時、人がどのような反応を示すかを知るために、マイノリティーの分科会とSimulation Society(SIMSOC)を行なった。これは社会学の実験に用いられるゲームで、極端にモデル化された人為的な2つの文化を、恣意的に分けた2つのグループが演じ、ゲーム後、お互いの文化に対する印象を述べ合い、その文化がどのような社会的規範の上に成り立っているかを解明していくものである。私達は二種類のゲームを行ない、結果、自分達がどんなに相手の文化を自分の文化のものさしで計りやすく、また、それ故誤った認識を持ちやすいものであるかを確認した。

続いて、マイノリティーの分科会の研究発表に参加し、Maro Siraisi から異種の文化が共存するニューヨークについて話を聞くと同時に、スライドでその様子を見た。

Todd Leonard のアメリカ・インディアンについての発表は、米国の文化の多様性に関する理解を深めるのに役立った。米国内に点在する異なる部族のインディアン の文化、生活形態の違いからは、一言でインディアン の文化、さらにはアメリカ文化と言いくってしまうことの難しさを教えられた。この分科会のメンバーではないが、インディアン について多くの資料を提供してくれた(インディアン の血をひく) Patricia Jordan に感謝したい。

渡邊香弥子は、英語と日本語上に現れた文化の違いについて発表した。敬称、代名詞、呼びかけ語としての親族名称の考察を行なう他、違いのもととなる日本文化の特徴(「イエハ、グループ性、年功序列など)にも触れた。スペイン語とポルトガル語を話すTodd とフランス語とスペイン語が堪能なMariko Gordon が、これらの言語に関して例を提供してくれた。

自然

文化の違いを語る時往々にして指摘されるのが、その民族の生産形態と自然感である。曰く、欧米文化はその端を狩猟と征服の対象としての自然に発し、一方日本は農耕と自然との調和を伝統としている。エネルギー・資源・環境の分科会との討論では、日本の公害が自然との調和という定説の反例として提出された。

Mariko Gordon は川端康成の「雪国」と「みづうみ」を研究課題に取り上げ、川端

文学における男女関係と、女性の美しさと自然描写の重ね合わせについて言及したが、ここでは特に、米国人学生と日本人学生の自然の受け取り方の違いが明らかにされた。自然の描写を通して、他の物を表す川端のスタイルが日本人に素直に受け入れられるのに対し、米国人には、これがなかなか難しいようであった。

新幹線の中から唸々と続く田んぼを眺めた私達は、8月6日、広島から電車とバスで40分程の志和町を訪ねた。ここで農業を営む三木氏に戦前から戦後に亘る暮らしぶりを伺った。日本人学生の通訳を介しながらではあったが、そうとは意識できない位皆話に夢中であった。三木氏の原爆体験談も含めて貴重なお話をたくさん伺うことができ、会議全期間を通して最も興味深いフィールド・トリップであったと言えよう。緑鮮やかな稲穂が風に波を繰り返す夏の夕方が美しかった。

自然に関する分科会活動の締めくくりとして、石本みや子が日本の食文化を取り上げた。米作に必要とされた互助組織、主なたん白源を米、味噌、魚に頼る食形態、四季の旬の野菜、魚を使った種類の豊富な料理の説明の後、京都、六盛にて京料理を食した。選ばれた器に美しく盛られた料理に、味覚のみならず視覚をも楽しませる日本料理の素晴らしさを再認識させられた。

能

古典芸能に織り込まれている、日本文化を日本文化たらしめているものを着る意図で能を取り上げた。福井明子を中心として、能の歴史的背景、現代人と能のかかわり等を説明する他、仕舞、謡の実演、面、扇の説明を経て7月30日、東京、観世能楽堂にて井筒を



「文化と芸術」の参加者
筆者は前列左から2人目

観賞した。

昔話・民話

Andrew Infosino はアメリカの民話伝承を、森井哲也は日本のものを課題に選んだ。日本もアメリカも、これらの物語が口承で伝えている点は同じだが、その果たす役割は異なる。日本の昔話（討論では特に「桃太郎」を選んだが）は、いずれは親元を離れなくてはならないことを子供に教える、というような教育としての機能を果たすが、アメリカの民話は、それ自身がアメリカの偉大さ、その国土の広大さ、誇り、不滅の象徴である。登場人物も、日本では男女、大人、子供、老人と実にバラエティーに富んでいるのに対し、アメリカでは、ポール・バンヤンをはじめ、デビー・クロケット、ビリー・ザ・キッド等全て成人男子であり、冒険と労働を主題とするものばかりである。

広島では、現在民話かどのような形で保存、伝承されているのかを調べに、視聴覚ライブラリーと児童図書館を訪ねた。夏休み中とい

うこともあり、図書館は子供であふれていたが、居合わせた母親達と話す機会が得られたのは幸運であった。

美術・建築

口でいちいち言わなくても気持ちが通じることがある。言葉の通じない者同志でも、1つのものを見て美しさを共有することがある。視覚はものの姿をあるがままに伝えるという点で、言葉による説明より歪曲されることが少なく、優れている、とLocky Nimickは言う。彼の論文は画（Visual Art）と語り（Language）が一体となって完成する「絵とき」であったが、これにとどまらず、分科会討論の殊に美術に関するものでは、多くの示唆を与えてくれた。

美術・建築関係のフィールド・トリップとして、東京でサントリー美術館と日本民芸館、京都では平安神宮、清水寺他、大徳寺では分科会のメンバー一同、言葉にすることなしに、石庭の美しさを共に享受したように思う。

文化と芸術の分科会ではそのトピックの性質上、日米で対立して議論が盛り上がることはまずない。米国側参加者の多くが日本の風物に価値を見出そうとし、日本側もまた米国の恩恵を受けて育ってきた者達だけに、議論が平行線をたどり、相手を罵倒したりする場面は起こりにくい。但しこれは、お互い識り合いたいという意志のある者同士だから、こゝも物分かりよく平和的に話が進むのであ

て、果して相手が「一見」未開な、知識としても何も情報を持っていない全く未知の文化であったらどうであろうか？そこに生じうる偏見は相当なものであろう。今夏の私達の分科会活動の真価が問われるのは、こうした「理解不可能」な文化に接した時に、一体私達がどのようにその文化にアプローチしていくかが明らかにされた時であろう。

「教育と社会」

筑波大学3年 医学専門学群

三井石根

I Theme

80年代に入り、日本の教育界を震撼させるような事件が相次いで発生している。登校拒否・塾の繁栄・家庭内暴力などに見られるように、学校教育・家庭教育の破綻が叫ばれてすでに久しく、「日本の教育」は今、混迷を極めている。また、「窓ぎわのトットちゃん」・「積木くずし」のベストセラー、金属バット殺人事件、戸塚ヨットスクール事件、横浜の浮浪者襲撃事件など、教育問題はそのまま大きな社会問題へと発展し、教育を憂える声の高まりと共に、今ようやく社会全体がその解決の糸口を模索し始めた状態である。。そのような中、我々の「教育と社会」Tableは、社会の有りようを反映する教育の現状に、大学生の立場からメスを入れ、教育における日米比較を通して、互いに相手側の長短を指摘し合う中で、「より良い教育の姿」とは何かを探ろうとした。

まず、5月の全体合宿で初めて顔を合わせ

た日本側4人は、緊張気味の自己紹介の後、Table Coordinatorのヒロミを中心に、Table Meetingの有り方と進め方を検討し、それぞれのPaperのthemeを、バランスのとれたものに調整した。「教育と社会」の名に沿うべく、両者の係わり合いを中心に据え、教育制度・教科書問題・日教組と文部省の関係などの制度的な問題、性教育・少年非行（校内暴力・家庭内暴力を含む）・Student Apathy・教育における母と子の関係などの倫理・心理学的な問題、部落民の教育問題（教育格差）・平和教育の実践などの社会的な問題に焦点を当てていくことに決定。これに従い、Field Tripの企画、日程の調整、Table Meetingの割り振りなど、大枠を決めた。

II Field Trip

5月の合宿後、関西と関東に分かれた我々

の Table における準備活動としては、もっぱら Paper の作成と、Field Trip の setup であった。Field Trip は全部で 5ヶ所企画し、関東～関西と移動する各地域で、特色ある施設を訪問した。以下カッコ内は場所と Coordinator。

i) 代々木ゼミナール (東京・イワネ)

5月の合宿で、アメリカ側参加者の中に、日本の予備校・塾に非常に関心があり、是非実際に訪れたいという強い要望がある、と知らされた。第33回のJASCでも Field Trip として代ゼミを訪問しており、今回もそれを踏襲することとなった。夏期講習を控えて事務局が忙しい為なかなか連絡がとれず、実際に訪問できるのか心配だったが当日は副理事長・竹村氏との懇談の場も用意して下さり、我々の訪問を親切に受け入れて下さった。

まず夏期講習中の授業(英語のクラスで大教室)を見学し、次いで最近完成したというコンピュータシステムの説明とセンターの見学、竹村氏との懇談、そしてあらかじめ授業後残ってくれるように頼んでいた、現役高校生と現役予備校生(?)10数名程を交じえての座談会をもった。竹村氏からは予備校経営のノウハウ、日本の大学受験制度に対する考え方など英語交じりの精力的なお話を伺い、そのエネルギーに圧倒された。高校・浪人生との座談会では、最初彼ら側が緊張気味であったが、次第にざっくばらんな雰囲気となり、受験戦争のまただ中にいる彼らの本音が聞かれた。代ゼミで用意された時刻を過ぎても話が尽きず、とうとう場所を喫茶店に移して歓談した。彼らとの交歓を通してアメリカ側参加

者の漏らした興味深い感想があった。「17才のあるたった1日の試験で、彼らの将来が決まったり、また来年のただ1日を目指して勉強する1年が始まったりするのは信じられない。しかし、彼らがそれを結局は自分自身の責任として1年間の苦勞を受け入れようとする態度はより一層信じ難い。アメリカ人なら、高校でクラブ活動など充実した学校生活を送り、それにより大学進学が妨げられるようなら、それ自身一人の問題としてではなく、そのような状況を作り出す社会制度・教育制度そのものに欠陥があると考えらるだろう。」と。

ともあれ、この座談会の参加者達が翌日JASC主催のparty に来てくれ、笑顔で「来年大学に受かったら、JASCに応募します。」と言ってくれたのはうれしかった。

ii) 日教組・文部省 (東京・ヒロキ)

代ゼミ同様、これもアメリカ側の要望があったものだ。Japan Teachers Union と教科書検定を扱った paper もあり、昨夏の教科書論争以来、両者の関係はアメリカでも注目されているようである。また日本側参加者にも教員志望者がいて、是非とも訪問したい企画の一つだった。当然、一つの題目に対してもその立場を対立させるであろうと予想されたので、1)教科書検定、2)校内暴力、3)大学入試制度、の3点を中心に、両者の見解を伺った。

まず午前中に日教組へ赴いた。つい数ヶ月前に日教組本部乱入事件があり、しかも日教組大会を控えているとあって、幾分緊張した雰囲気の中、事務局の方から、「教育というものは国家や政府の為にあるので



「教育と社会」の参加者
筆者は前列中央

はなく、個人の人格形成を尊重しなければならず、その達成の為、文部省にもの申している」との日教組の基本姿勢を伺った。

一方、午後を訪れた文部省では、質問の各項目に対してそれぞれ専門の係官を集めて下さり、質疑応答が続いた。初めのうちはいかにも役所らしい型にはまった受け答えであったが、話が教科書検定に移るや、たちまち白熱した議論となった。米側は4名の為、質疑・応答とも一つ一つ通訳して進めていたのだが、日本側の熱い質問が矢継ぎ早となり、transrate が間に合わない有様。その部分は、後にかいつまんで伝えることとなった。

iii) 登町中学校（広島・ヒロミ）

JASC がその会場を広島に移してから、原爆祈念式典参列、被爆者との対談等、security と反核の一角となったが、教育 table でもそれを受けて、学校教育の一環として平和教育の実践に取り組んでいる登町中学を訪れた。登町中学では、正規

のカリキュラムに平和教育を採り入れて、夏休み前に集中授業を行ない、休暇中のグループ研究の成果を秋の学園祭で発表するとの事。地域から、高学年に進むに従い平和教育が反核運動に結びついていくが、決して政治的な教育を行なうのではなく、あくまで「平和」をいかに捉え追求していけばよいのかを生徒自らが考えられるような知識を増すことに主眼を置いている、とのことであった。

先生からの御説明の後、実際に夏休みの課題として自分達で学習し、偶然登校してきた生徒達数名と話を交わす機会を得たが、彼らがいずれも平和に対する確固たる考え方を持っており、その話し方が非常にしっかりとしていることに驚きの目を見張った。学園祭展示用に彼らの作った資料もまことに見事なものであり、彼らの根底にある郷土愛と地域意識に裏打ちされたものを見てとり、ヒロシマという地の為せる技に改めて胸をうたれた。

IV) 旭ヶ丘中学校 (京都・ユウコ)

京都では同和教育を実践している中学校を訪れた。この中学には部落から数十名の生徒が通学しているが、まず彼らに学力をつけさせて高校に進学させ、しかるべき職に就かせることが第一目標だと話しておられた。ここでは部落民の家庭訪問を重視し親の意識を変え、家庭を教育的な環境にする事に最大の労力をさいているようである。同時に部落外通学者の生徒・親には、部落差別の解消を説いている。部落に非常に頻繁に赴いての家庭訪問や、部落のセンターを利用しての塾さながらの夜間補習と、至れり尽せりの感がしたが、「部落民とそれ以外の生徒を分けて指導すること事体に差別があるのではないか。」「部落の家庭訪問は教師の部落に対する格差意識を一層助長させるのではないか。」などの質問に対し、「まず、部落という特殊な環境の実情を把握できる正確な知識と情報を得ることが、適切な指導への第一歩だと考えている。」と言われた。

III Paper Presentation

教育 table 参加者 8 名が、前もって作成した Paper について発表をし、それに対する質疑応答という形をとった。最初の table meeting では自己紹介と、今後の meeting の進め方を確認し、次のコマでは日本の教育界の現状をアメリカ側におおまかに把握してもらう為に、ビデオを見た。NHK 放送「日本の条件」の中の「教育を考える」シリーズから、偏差値・予備校・塾・業者試験・進路決定の三者面談・入試風景・共通一次など、日本の教育の up-to-date なシーンをピックアップし、それぞれに解説を加えながら流

した。中でも偏差値 (deviation value) の考え方はアメリカ人にはピンとこないとあって、容易には分かってもらえず苦労した。

このビデオで日本側の概要をつかみ、次のコマではアメリカの教育制度や昨今の諸問題にふれ、両国の教育の相異点を浮きぼりにし、その相互関係や対立関係について一応の共通理解に立った上で、次のコマからはいよいよ paper presentation に入っていた。

最初に扱った Paper はユウコの “Sex Education” でこれは “Men&Women” Table との intertable の形をとった。男女問題と幼年期の性教育との関係、特に “男らしさ” “女らしさ” を植え付ける幼年期からの “しつけ教育” が男女の性的な価値観までも規定してしまうことの功罪は計り知れない。日本の性教育はとかく physical な面ばかりが強調され、人格と性が切り離された感がある。否、アメリカに於ても事態は同様だ、などの抽象論から、果ては具体的な避妊にまで話が及び、なかなか過激な質問も多かった。“教育と社会” の性格上、科学技術・minorities 国際関係・communication・bioethics などの table と intertable を持つことはより有意義であつただろうが、互いにコマ数の関係から男女 table のみとなつた。

下に、paper の theme と発表者を掲げるが、その内容については英文報告書に各 paper の summary が載っているので、そちらを参照されたい。(以下、発表順)

“Sex Education”

最上裕子、神戸大学

“Education of Maternal Society Japan”

三井石根、筑波大学

“Early Childhood Education in America”

Cara Koeritz, Texas Wesleyan Univ.

“Student Apathy”

山地弘起, 東京大学大学院

“Text Authorization”

Scot Scharer, Princeton Univ.

“Some Questions Concerning Minority Education in the United States”

Linda Titus, Univ. of Pennsylvania

“The Suzuki Method – Talent Education in Japan and the United States”

Naomi Uyenura, Harvard Univ.

“Schooling System in Japan”

西岡浩美, 大阪大学

IV 雑感

教育における日米比較には次のようなものが挙げられよう。日本では知識偏重の記憶する事を中心とした学習であり、入試制度も、ものごとへの対処の仕方や考え方を試すのではなく、知識そのものを求める。たちまち、知識量を示す点数が万能となり、勝手に一人歩きした末に人間の価値や人間性そのものまでが点数で計られるようになる。知識量（＝点数）のみで可否を決定するのは、一見教育の平等を具現する合理的手段ではあるが、他方人間の尊厳に抵触する危険性もはらんでいる。偏差値信仰に見られる、他人との比較を強調する教育は、受験地獄なる競争社会を作り上げ、相対的比較の中に各個の個性を埋没させる結果となった。常に全体の中での自分の位置を相対的に計量する態度が習慣となる。そこに創造的な思考はない。このような矛盾

を漠然と感じつつも普通に勉強し、クラブ活動など他の対象に自分の個性を投影する学生の内、受験の洗礼を運よく通過した者達は大学という場にそれまでの代償を求め、また運悪く失敗した者は予備校・塾という特殊な教育の場において、制度の不備や社会の矛盾を個人の努力で埋めようと努める。一方、それを完全に自分の責任レベルまで掘り下げることのできなかった若者達は、一たび何らかの trigger（これが重要である）が引かれるや、たちまち暴走族・家庭内校内暴力・登校拒否・自閉・非行など反社会的行動に出る。両者は形の上では両極にいるが、自己と社会に係わる主体的な問いかけの姿勢を欠く点で共通している。

アメリカの教育は個人の人格形成（個性の尊重）という点に集約される。その入試には、知識（勿論必要条件は充たすが）以上に社会性や問題解決能力が求められる。当然予備校というものは存在せず、教師は必要に応じて自由に教科書を選定できる。しかし、人種・少数民族問題と経済事情に由来する教育格差は激しく、教育の機会均等の理念が達成されているとは甚だ言い難い。また教師の養成と採用の仕方に問題があり初等・中等教育における質の低下は否めない。等々、アメリカとて教育を取り巻く環境は、決して楽観できるものではない。

「それではどうすれば良いのか？」――残念ながら我々のレベルではそこまで掘り下げる事はできなかった。

教育 table は Field Trip が他の table よりも少なかったが、訪問した施設はユニークであり効果的であった。ビデオを用いて基礎知識を視覚的に把握したのも画期的だった。

しかし1コマ3時間のmeetingをすべてdiscussionにあてるのは少しdullであったし、他のtableとの合同討議や実際に目で見て現場の雰囲気や肌で感ずる機会がもう少し多くても良かった気がする。私自身は教育に対して全くの門外漢でtableの御荷物だったが、discussionを通して教育に

対する自分の考え方を構築でき、専門バカではなく、広く社会に対し関心と批判の目を養うことを教育され、何よりも一生つき合っていける友人を得たことは大きな収穫であった。

JASCとて教育の場、その中で教育tableの果たすべき役割りを今、再考してみる事も必要だろう。

「少数派問題」

東京大学3年 法律学 岸本 浩

I 前 書

1. 少数派問題分科会のあるわけ

日本で開かれる会議になぜ「少数派問題」があるのかと、多くの人に聞かれた。アメリカと異なり、日本は単一民族の同質社会であるから話題がなかりとうわけだ。確かにアメリカのように、いくつもの民族がせめぎあい、協調している国と比べれば、日本の少数派問題は目にとまりにくい。それでも、少数派ならばこそ少数派なのであり、依然、無視できない問題なのだ。

ある人は、なぜ日本の恥を外国人に示す必要があるのかと言った。そこには、日米学生会議に対する誤解がある。これは、日米交渉ではなくて、国籍と文化の違いを越えて、次の社会を築く土台をつくらうとするものだから、日本はいい国だと自慢する必要などないのだ。

そこで、なぜ少数派問題をやらなくてはならないのか。日米学生会議の変わらぬ課題であり、今年の総合テーマでもあった。「相互

理解—平和な社会に向けて」という精神からすれば、平和な社会に必要な相互理解は国際理解だけでなく、多数派と少数派、そして少数派どうしの相互理解が重要だと言える。多数派の立場にあるとき、少数派を全く無視してしまうことは、心情的に耐え難いだけでなく、物理的にも紛争の原因をつくっている。

それだけでなく、本当にある国を知ろうとすれば、その国の少数派に目をやる必要がある。社会の基礎を形成している人々に少数派が多い。その国が、そういった人々を、どのように取り扱っているかということを考慮に入れずに一国を理解することなどできない。例えば、アメリカ人にとって、日本のイメージの1つに「経済大国」があるが、そういったイメージにとらわれた彼らにとって、「釜ヶ崎」は本当に驚きだったようだ。

2. 少数派とは何か

1年前、少数派問題の分科会を設けるにあたって、そして今、この分科会を終えるにあ



「少数派問題」の参加者 筆者は右から3人目

たって、少数派とは何なのかということを考えて。「少数派とは社会の全体から、民族・人種・政治・その他の社会的理由によって区別された集団」と定義する。

ここで区別というのに2つの意味がある。1つは、差別を受けているという意味で、外界から差別を受けることによって、少数派となるということだ。もう1つは、アイデンティティを持っているということで、生得的な、あるいは社会的な要因が人々の内面に影響して、自らを少数派として意識し、外界に対して自らの誇りを打ち出すときに少数派になると考える。

こうして、今年は「差別」と「アイデンティティ」とを中心に分科会をつくってきたが、この両者は密接に関連している。民族としての誇りを持つことが差別を惹き起こすもととなり、他面で、差別と戦っていくためにアイデンティティが必要とされる。

II 日米比較

少数派に対する態度を考えると、制度となつて目に見える部分と、意識のレベルにとどまって目に見えない部分とを区別して考えなければならない。制度的には随分と進んでいても、社会の意識のレベルでは、まだまだ不十分というような批判が、特に日本についてなされた。

ニューヨークの少数派についての発表があったが、ニューヨークでは皆が少数派であつて支配的な集団がない。従つて差別はあつても、それはお互いさまで、大問題にはならない、ということが述べられた。日本では、多数派が巨大なだけに差別が大問題になるし、またアメリカも国全体として見れば、多かれ少なかれ同様であろう。

難民の定住に関する発表に対するコメントとして、日本と異なりアメリカでは紛争が日常的なことであるために、短期的には住みにくくても、10年なり20年なりたつてみると、社会の一員として暮らしていける、と

というような意見が出された。日本では、10年たってもやはり同じ苦勞をする。

同じく難民の受け入れに関して、アメリカは一つには、ベトナム戦争の後ろめたさがあるから受け入れざるを得なかったという意見が出された。歴史的な原因と言えば、日本では在日朝鮮・韓国人を連想するが、同じような後ろめたさを感じてしかるべきだと思う。

Ⅲ 問題の解決へ向けて

少数派に「差別」と「アイデンティティー」の2つの局面があることは、この問題を解決の方向にも影響する。少数派問題では一般に同化による差別の解消はマイナスイメージを持つ。それは、差別をなくすだけでなく、アイデンティティーをも失わせてしまうからである。従って、多くの少数派は、アイデンティティーを失うことよりも差別されることの方をとる。ところが、被差別部落を考えてみると、そのアイデンティティーは、まず何よりも日本人としてのアイデンティティーであって、そこには同化に対する抵抗はないと言ってよいと思う。従って、同和問題の場合は差別とアイデンティティーの二律背反に悩むことはない。

理想を言えば、差異が差別を生むのではなく、差異を差異として認めつつ、多元的な文化が一つの社会を形づくり、互いに刺激を与えながら全体の活力を高めていくような社会が望ましい。アイデンティティーを保ちつつ差別をなくすことが理想である。

しかし、日本でもアメリカでも、それは、なかなか難しい。1つ上の世代の人々はアメリカという人種差別の国というイメージを持つそうだが、私たちの世代は、むしろ少数

派問題の先進国というイメージを持っている。しかし、そのアメリカでも、分科会の黒人学生は平等の可能性に関して懐疑的であった。

日本について言えば、アメリカ人学生は日本に対して寛大であった。例えば、日本がもし、より多くの難民を受け入れるとすれば、日本自体が変わらなければならない。従って数を増やす必要はないという意見があった。

「日本的なもの」として讃えられるものは、積極的に評価すべき面だけでなく、差別を生みやすいなどの負の側面をも併せ持つ。幕末以来、幾度か「日本的なもの」と「西歐的なもの」とが交替で栄えてきたが、今また「日本的なもの」の栄える時代となった。「日本的なもの」を変えようとしても、すぐには変わらないだろうが、あまり寛大になりすぎるのはどういうものか。

Ⅳ 各論—フィールドトリップから

1. 在日本大韓民国青年会神奈川県本部

鄭真志(チュン・チン・ジー)会長、黄博模(ファン・バク・ム)組織部長他3名と分科会の8名とで、在日韓国人の帰化とアイデンティティーについて話し合った。なぜ帰化しないのかという問に対して、差別と戦うために必要なアイデンティティーを保つためには韓国籍がぜひ必要で、加えて歴史的な原因を考えれば、定住外国人という不自然な形も受け入れられるだろうという話だった。

なお、アメリカ人は、なぜ政治的な運動に力を入れないのかかわからないということだった。

2. 財団法人 アジア福祉教育財団 国際救援センター

品川に新設された難民定住のための施設で橋本直江氏に案内していただいた。僻地で、

しかも厳しい管理が行われているので驚いたが、日本の難民受け入れには大きな前進であったと思う。昼食時に難民の青年達と話をする機会をつくっていただいたが、彼らが非常に明るかっただけに、センターを出てからも幸せに暮らしていける日本にしたいと思った。

3. 広島修道大学助教授 青木秀男氏

青木先生をお招きして、被爆者差別について話していただいた。被爆者は異常な体験を持つ異常な人々として“they”グループに位置づけられた新しい少数派であるという観点から、就職・生命保険・結婚・貧困の差別について話してくださった。また、朝鮮人被爆者や女性など、カテゴリーに分けて問題を説明してくださった。平和運動に関しても、被爆者を不自然に奉る一方で、本当の気持がわかっていないとのことだった。

4. 社団法人 部落問題研究所

60年代の部落の映画を見たあと、石田真一氏に解説をしていただき、その後、山本敏貢氏に、京都の田中養正地区を案内していただいた。同和事業が80%完了した地区で、アパートも新しいものは少しずつ改善されてきているようだ。しかし、山本氏や全解連は部落の者しか施設を利用できないという政策に反対されている。運動の分裂はともかく、身近なところに被差別部落が数多くあることが驚きだった。

5. 旅路の里

大阪・釜ヶ崎で結核療養にあたっていらっしゃる薄田昇司祭他、ケースワーカーの方々にお会いした。釜ヶ崎は小さいのになぜ大きく感じるのか、男の街なのになぜ小学校が2

つもあるのかなど、いろいろ課題をいただきながら、案内していただいた。たまたま盆で仕事のない日だったせいもあるが、かなり衝撃的な体験だった。

6.付 ペーパーピックアップ

アメリカ側

ニューヨークの少数民族

アメリカで平等は可能か(黒人解放史)

黒人の政治参加の拡大

インドシナ難民と日本

日本側

アメリカの多元主義と民主主義

民族と国籍(在日朝鮮・韓国人)

在日朝鮮・韓国人のアイデンティティ

日米の偏見の構造

「文化と芸術」分科会との合同討論

異文化間コミュニケーションのゲーム

V 感想

最後の会合で、来年もぜひ「少数派問題」分科会を続けてほしいと話合った。非常に良い分科会であったと思う。例えば、全体研修に行っても、企業や商工会議所の方に対して、同和問題や在日朝鮮人の問題の質問が必ず出ていた。(もう1つ、必ず出る質問は女性についてだった。)そして、日米学生会議自体が少数派問題の1つの実験の地でもあった。

最後に、ごく個人的にだが、各地でいろいろな人々に会えて、大変有益であった。

このような貴重な機会を与えてくださった方々、なかでも、お忙しい中、私たちのために時間をさいてくださった方々に対して、厚く感謝申し上げて、報告を終える。

「社会における男女の役割」

東京大学3年 農業土木 萩原浩幸

「社会における男女の役割」という名称の分科会に果して日本の男性は興味を持つだろうか。実施要領に掲載した名称は「男と女」そしてこれは4月29日の合宿で女性参加者3名から総スカンを食ってしまった。何故、「女と男」ではなく、「男と女」なのか、とこんな些細なところにも目鯨をたてるのか、というのが第一印象。しかし、そんなことを考えようとしなかった私は、「しまった」と思った。このようなところ、深層心理に男女差別、女男差別いや性差別の根源があるのではないだろうか。

「役割」という言葉は、嫌いである。勿論現在の日本社会には、明確な性役割が存在している。しかし、「男女の役割」を前提としていたら、問題は解決されないのである。そして、これはGeorgeの“An Introduction to the Roofs of Homosexual Oppression in America”というpaperの中で鋭く指摘されている。彼によれば、homosexualityは決してabnormalなものではなく、社会がそのように規定しているだけである、と言う。一夫一婦制、そして、patriarchy—家長制度はそのような社会の産物でしかない、と。彼の意見には同調しかねるところも多かったが、我々が偏見の真理だと思っている多くの事実が、単に歴史的産物に過ぎないという新しい事実認識があったことは否めない。

我々の議論は、お世辞にも系統的と言えるようなものではなかったが、性役割をめぐる多くの問題をとり挙げた。Stuartは、彼のpresentationの中で資本主義と家父長制度について言及している。現在、世界の多くの国は資本主義体制を擁しており、産業革命以後200年近くの歳月が流れた。日米両国を眺める時に、資本主義は大前提であってはならない。他の多くの要素のうちの一つであって、決して絶対的なものではない。又、社会主義諸国、或いは、第三世界諸国の女性と、日米両国の女性を比較することによって、より問題が明確に把握できることと思う。その意味で、我々は自分の所属する社会を相対化して眺めることが必要なのであり、その為に日米学生会議があるのである。しかしながら、これはあくまでも出発点であり、他の多くの文化との接触によって、初めて、自己の文化そして社会を客観視できるのである。文化帝国主義は、経済に於ける搾取りよりも更に目に見えない形で行われている。そして、これは性差別と密接に関わっている。何故なら、多くの場合、抑圧される側の人々(女性、少数民族、第三世界の一般民衆etc.)は分断されており、一つの連帯した力を形成することが難しくなっている。ここには女性と少数民族との偏見、差別を通じての興味深いanalogyが見られる。

性差別という問題は、様々な形態で考えら



「社会における男女の役割」の参加者 筆者は左から2人目

れる。分科会では、特に教育と職場に於る差別をとりあげた。Berniceは彼女のpaper、“Changes in Labor Force Participation Rates of Women: An International Comparison”の中で最近(1960年代以降)の日本の女子労働力の二つの特徴について述べている。一つはM型曲線、即ち20代後半から30代後半に見られる谷と、結婚前と子育て終了後に見られる山によってできる日本独得の年令別女子労働力の変化で、もう一つは、働く主婦の増加である。これらの現代日本に於る傾向は、核家族化、平均余命の増加等、種々の原因によると同時に、旧来の役割分担意識、そして託児所など施設面での不備が、欧米並みの女子の労働参加を妨げている。そして、実際に職場に於る差別(Discrimination in the Workplace—私のpaper)は主に賃金格差、機会の不均等という形をとって表面化する。

賃金格差は様々な要素を含むが、年功序列

制と、終身雇用は女子にとって致命的ですらある。労働省の婦人少年課の堀内光子氏との対談の中でも、しばしば指摘された様に労働基準法の保護条項が差別の大きな根拠となっている。しかし、保護か平等か、という議論は、的はずれなものであり、保護を必要とする様な労働条件から変えて行くべきである。

上智大学の就職相談室では、雇用側、そして女子学生の双方の立場を客観的に比較することができた。有名企業、大企業に対する幻想は今だに強く、企業も4年制女子を積極的に雇用する所は少ないとの印象はぬぐえなかった。「社会に於る男女の役割」フォーラムでも、career womanの問題は討論されているが、それは別項にゆずる。

教育は全ての社会問題に共通する重要な要因の一つであるがSharonのpaperはその機会平等を論じたもので、教育を一つの目的として捉えている。“The Struggle for Equal Education: A History of Women's Higher Education in the

United States from the 1800's”と題された彼女の paper は我々日本人に合衆国に於る民主化平等化の過程を、垣間見る機会を与えてくれた。同時に、日米の共通点、即ち「女の仕事は家事・育児」と言った固定観念があったことを知った。人文系の分野を専攻する傾向があるのは日本の女子学生に限らず、これは日米両国の女子学生の就職機会を狭めていることは否めない。この様に、教育はそれ自身が目的となるばかりでなく、他の目的一例えば、就職といったもの手段となるものである。

「教育と社会」分科会の裕子は、分科会に唯一の intertable discussion の機会を与えてくれた。“Sex Education”は、性別によって異なるダブルスタンダードであり、マスメディアによって行われているのが現状である、と彼女はいう。現実には、我々 16人（教育+男女の分科会のメンバー総勢）の中で親から性教育を施してもらったのは2-3人であった。又、日米で程度の差（日く米）はあったにせよ、学校で教わった人間も少なかった。その結果が増大する10代の未婚の母であり、中絶・墮胎である。又、日米で避妊方法に大きな差があることは、日本の中絶頻度の高さに関係があるだろう。（コンドーム vs ピル・ベッサリー）Kikoは“Abortion in Japan - Eugenic Protection Law”と表する paper を書いた。墮胎に関して、自民党の森山まゆみ氏と、生長の家という二つの相反する立場に分科会は遭遇した。論点は「生まない権利」を認めるか、認めないかであり、親の権利を主張する森山氏らと、胎児の権利を主張する生長の家では相入れるはずもなかった。結局、分科会

のメンバー8人は条件付き賛成で、優生保護法の「経済的理由」削除には反対であった。その条件というのは、教育を与え、託児所等の設備を完備すると共に、避妊法等の条件をより厳しくすること。

欲しくもない子供がいるのはまだ良いが、欲しい親が居ないのは非常に困る。岸本夫妻は、夫婦で弁護士をしており、特に離婚の法律的側面について話して下さった。“Divorced Children”という保美の paper は、離婚を経験した子供の心理的発達に関したもので、私などは普段余り考えたことのないトピックであった。合衆国では常識となっている養育権を持たない親の子供に会う権利 (visiting rights) が日本では未発達なこと、慰謝料、養育費、離婚の法制的条件等が話し合われた。日本に於る離婚の増加は、家制度の崩壊そして、女性の経済的自立と深い関わりを持つ。

Kazue の paper、“How Can We Establish a Better Relation between Both Sexes?”は、日本の女性解放運動の歴史の変遷と、日本社会の二つの特徴である、家制度と強い母と子のきずなについて言及している。自己実現を家制度に象徴される社会によって、極度に制限された女性-妻-母親は、その夢を子供に託し、教育ママとなる。同様の傾向は合衆国の中流階級にも見られるが、子供がある程度の年齢に達すると、母親は外に働きに出たり、PTA その他のボランティア活動に従事する様になる。この様に、女性の人生には多くの場合、外界によって規定される度合が非常に大きいのである。これは、社会（特に日本社会）が期待する理想像が、女性の理想像と矛盾しな

いからではないだろうか。現状では多くの改善すべき点が残されている。しかし、ひとたびどのような方向に進むかを考える時、そこには哲学が必要になってくる。つまり、どの様な育児が望ましいのか、家族形態、職場での男女関係、教育方法（家庭科教育）等の将来である。機会を均等に与えるだけでは不十分である。何故なら、それでは過去何世紀に

も渡って形成されてきた、この壮大な制度を変革する力には成り得ないからである。結果の平等を保障する affirmative action の様な形態の運動が必要となる。そして、我々個人のなすべきことは、現状に疑問を持ち、常により良い方向に向かって二人で、皆で努力していくことではあるまいか。

「資源・エネルギーと人間環境」

神戸大学4年 システム工学 大佐賀 広幸

I はじめに

エネルギーにまつわる問題は人類が知恵を持ったときから避けて通れないものとなった。特に経済が急発達したこの100年間では、最重要項目として扱われている。経済社会の背景は、工業化社会を基本としているためサービスやモノを作り出して売ることが重視される。そのため、生産・輸送・原材料としての資源・エネルギーの必要性が加速度的に高くなってきている。

これを大前提とし、過去のエネルギー問題は多方面から調べられ、討議されてきた。この6～7年はオイルショックの分析・世界資源戦略・エネルギー代替案といったトピックが多く、アイデアが語り尽された感があったため、今年第35回会議では、数々のエネルギー・資源への対策をとった後、私たちに何が残されたか、そしてどうしていくべきか、という環境面に焦点を絞って討議した。

この報告では、第2章で8人の参加者の発表論文の内容と討論をとりあげ、第3章では

その反省点を、そして第4章では（野外）研修会、及び他の分科会と交流し視野を広めるための合同分科会をとりあげて、議論をまとめてみる。

II 論文報告と各討議

本会議では問題を浮彫りにするため、一般的なトピックを提示し、特殊な例に入っていた。つまり、資源・エネルギーの使われ方をふりかえり、どのような使い方・再利用の仕方がよいのか、そして産業・政府・地域住民のつながりはどうあればよいのかを考えた。廃棄物問題をフィーチャーしたこの会議の流れは合理的であったし、読者の理解を深めるためにも、会議を再現しようと思う。

(1) 危険廃棄物の現状と将来

Niki Lilienthal

州の行政ロビイストとしてエネルギーの将来と市民生活のバランスを憂いながら再利用性を追求していく彼女、Niki を中心として



「資源・エネルギーと人間環境」の参加者 筆者は前列左より2人目

最初のテーブルを持った。アメリカ全土に広がる化学性廃棄物の脅威について評価し、特に Times Beach の例にみるように水質・土・空気の汚れをコントロールすることがいかに難しいか、を訴えた。しかしながら、核戦争に次ぐ脅威として立法・行政・司法上の長期計画と断行が必要である、という考えは以後の議論の基礎となった。

(2) 人々の倫理と行動 水俣病より

津田 純

「人間はもうダメかもしれない」という危機感を秘めた彼、Jun を囲んで、水俣病を例とし、資源政策をうちだしてきた企業・それを保護する行政・迎合する科学者と一般市民そのかげで切りすてられる被害者にスポットをあてた。今、手をとりあっていたものが、ある事件を境に「弱肉強食」の関係になる。という訴えは Niki の意見を継いで私たちに衝撃的に響いた。自然破壊とは「弱いものは食われる」のゆきすぎた形であり、市民の大

半を死なせかねない自殺行為であるとして米側の考えと一致した。そして、市民レベルから国レベルへの意識革命がなければならない。という合意が得られた。

(3) 石炭露天掘りについて

R. Steven White

海洋生物学を学ぶなかで資源の活かし方を第一に考えてきた彼、Steve は代替エネルギーの筆頭として進められている石炭について発表した。「魚貝は海を、動植物は陸を生活の場とする」彼の考えでは、今の石炭政策はまだまだペイが大きすぎると示した。アメリカ石炭鉱床はグレイトプレーンに近いため、酸性雨・resoil(土地がやせる)の影響を受けやすく、農産物供給バランスが崩れることを警告した。石炭は性質上石油に似た点が多い上、数多くのメリットをもつが、大きな技術的なカバーなく代替案としてとりあげるのは早計であるとわかった。レーガン政権下の民間研究費援助額がカットされている事

実は将来深刻な問題を起こしかねない、という危機をみな抱いたようであった。

(4) 加害者の論理と倫理 SMON 病

大佐賀 広 幸

コンピュータ・エンジニアとして科学は万能ではない、と考える私、Suga は SMON 病を調べた。スモンが人為であったのは、環境として一番守られねばならないのは健康であるにもかかわらず、それを侵したのは医師であり保健企業であったため、日本の医療体制が裏目に出た、と例証した。(医療)体制を法的に管理すること、(医療)情報を公開・モニタしながら患者(住民)との徹底的な相談(アセスメント)。この2つが必要不可欠であり、そのため技術(コンピュータ・バイオテクノロジー)は使用されるべきだ、という点で確認を得た。

(5) 農業問題とその将来

津 村 好 英

法を学び、人間の可能性を信じる彼、Hide は食糧資源・生活環境を圧迫している農業問題を分析した。ブーメラン効果により第一・第三世界ともに食糧汚染が進んでいると知れば知るほど、私たちの危機感が高まった。食糧を増産し、なおこの危機を避けるには、「ハードな」農業農業でなく、害虫を殺して土中バクテリアを助ける「ソフトな」農業を目標とすべきであり、まず禁止農業の南側第三世界への輸出を規制することが先決であろう、という点で合意を得た。

(6) 行政指導と通産省

藤 井 薫

テーブルを企画・リードするコーディネーター Kaoru は常にエナジェティックに、時にエモーション的に私たちに質問を投げかけた。彼女の報告を境に議論は現実化へのアプローチを目指した。行政の場で環境の犠牲をどれだけおさえられるのか。まず、米 EPA ・日本の環境庁を比べ、市民はどんなサービスを望んでいるのか、を明らかにした。この問題は以後、野外研修(環境庁訪問)等にもちこされた。

(7) 放射能廃棄物とそのジレンマ

Samuel S. Kim

自ら宝石商を営み、独自の哲学をもつ最もアメリカ人的な論客、Sam はエネルギーと環境は表裏一体である以上、トレード・オフ(何か利益を受ければその分何か損をする)を考える必要を強く論じた。現実的に考えることが第一であり、原発問題が州の法規制によりダメージが最小におさえられ、そのダメージよりも享受できる利益が大きいなら推進すべきだと提唱した。この考えをめぐり会議を通じて議論が交わされたといっても過言ではないだろう。これについては、まとめて述べることにする。

(8) 社会アセスメントの動向

産業・政策への市民参加について

Wendy L. Schultz

米側のコーディネーターを努め、ライフワークとして政治への市民参加を考えている彼女、Wendy はエネルギー・環境政策をどう現実の生活に反映させるか、という論点を示した。時が経って起きるダメージをその場で評価するのではなく、将来予測をとり入れた政

策・工場進出を規制するアセスメント法をうち立てなければならない。政治や産業の地方分権と地域社会化がなければ市民の幸福はない、真の社会計画は実現しない。以上2つの点を中心であった。互いの国の特殊性をこえて、そうあるべきだという一致を得た。

Ⅲ 討議についての反省点

会議の前半ではケーススタディを中心としたため同意を得ることはかなり簡単であったが、後半に入ってから現実には私たちに何ができるか、という具体論を中心としたため啓蒙的な意味にしか討議は発展しなかった。これには2つの反省点がある。第一に、切迫した問題として考えにくい、決定的な論議を提示できなかった。つまり、ケーススタディから1つの「考える」ベクトルが生まれなかった。第二に、完全に理想派と現実派に分かれたため「解決できない」状態をつくり出してしまった。つまり、どちらもよいのである。問題は重大だとわかるが、事実関係の議論しか深まらないのだ。

この原因は、みんなが当事者の立場に立ちすぎたため客観的な姿勢が失なわれてしまったことと事前の各参加者のつっこみが足りなかったことが主だろう。

具体的に言おう。事前から日本側はかなりポイントを絞った報告を行なったが、だからどうするというプランニングに欠けていたため、意識革命・長期的な社会計画という深さにしか言えなかったし、アメリカ側への事前の打診が不十分であったため、硬直化しやすくなっていた。また、アメリカ側では本会議1ヶ月前にコーディネーターが辞退したアクシデントがあってまともに欠けていたし、

自己主張を通すあまりに妥結点を求める客観的な姿勢を忘れがちであった。

Ⅳ 研修会及び総論

野外研修の目的は現場での意見を聞き、そこを見ることである。私たちはなるべく多くの研修会を持ちたいと考えたが、益・被害者会の解散などの問題で以下のものしかできなかった。(訪問順) ①東京湾ゴミ集積場(夢の島) ②通産省 ③環境庁 ④映画 Polluted Japan ⑤大阪空港訴訟団の原存者。

また合同分科会では、①文化と伝統「自然観の違い」 ②Bioethics「生命・生活の倫理」 ③科学技術と社会「A. Smithさん片桐充さん夫婦、植田教授を囲んで原発を考える」との交流を行なった。

私たちがイベントを持つ度に感じたのは個人の力の小ささと落とし穴だらけの現状である。規制は誰がどうやって決めるのか。企業誘致は、官民ゆ着は、そして地域社会化の進め方は、巨大技術とのつきあい方は？

もはや資源という言葉はコンピュータ用語として使われている。形のな^いものも資源である。(9月18日現在、藤沢薬品が塩野義製薬から新薬データを盗む事件発生)私たちはどうやってそれを管理・利用・再利用すればよいのか? 環境問題によってエネルギー政策の残したゴミは浮き彫りにされた。この会議ではそれを十分に討議できなかったが、会議の終わった今、私は1ヶ月間、いや準備期間を含めて3ヶ月間受けてきた刺激の強さに改めて驚いている。会議は教育の場なのだろう。会議はたった今から始まったのではないだろうか。

「ライフサイエンス (Bioethics)」

九州大学3年 医学 木村真美

I はじめに

近年著しい進歩を遂げてきた科学技術は、平均寿命を延ばし、不治の病といわれてきた病気を癒し、不妊の女性にも体外授精という福音を与えるなど、人類の幸福に大きく寄与してきた。しかしその一方で、墮胎や安楽死あるいは遺伝子操作などの問題がクローズアップされ、専門家だけでなく個人個人が「生命とは何なのか」「生きるとはどういうことなのか」という問題に対して、いま一度真剣に考え、自らに問うてみるべきときが来たようである。

Bioethics のテーブルには、これらの問題に深い関心をもつ8人が集まった。その専攻は哲学・看護学・文学・生物心理学・コンピュータ科学・化学・医学とさまざまであったので、いろいろな視点から生命倫理の問題にとり組むよい機会となった。メンバーと論文の内容は以下の通りである。

Keiko Nakamura 遺伝子操作

Patricia Jordan 先天性異常

Tim Jones 合衆国における医療システムとその問題点

Allen Miner 人工心臓とクラーク氏のケース・レポート

赤津 晴子 ホスピス

杉本 耕一 脳死と臓器移植

下川 優子 精神病患者の人権

木村 真美 妊娠中絶

II 討 論

8人の書いた論文の主題上の理由から、またより深い考察を期待して、私たちは〈誕生〉〈死〉〈精神病患者の人権〉〈医療問題〉という4つの問題点に絞って討論を行った。この際、それぞれの問題を他人ごととしてではなく自分自身のものとして考えよう、ということになった。ここでは〈誕生〉ディスカッションについてふれておきたい。

誕生にまつわるトピックとしては、先天性異常、妊娠中絶、遺伝子操作があった。問題となったのは、妊娠中に奇型の可能性がわかった場合どうするか、あるいは、今このときつまり未婚の学生として自分が妊娠した場合出産するか否か、といったことである。午前中の討論の終わりに、私たち8人は皆妊娠した。そしてランチタイムの間に、その子を産むかどうか決断するよう言い渡された。

午後の討論は、その決断を述べ合うことから始まった。今の状態で妊娠した場合どうするか、に対しては8人中5人が“産む”と答えた。2人は“中絶する”決心をし、1人はどうするかははっきりわからない、と答えた。この結果は恐らく今の世界情勢に逆行しているだろうし、実際にこのような状況におかれたときにこの答えどおりの選択をするとは限らない。しかしここに出た結果は、生命はやはり生命として尊いのだという考えの現れであるとはいえないだろうか。

“産む”とは答えなかった3人は、人間としての生命は出産と同時に始まると主張した。あとの5人は“いつから”という明確な線を引くことはむずかしいが、しかしそれでも胎児期のある時期からそれは始まると考えた。“どこに線を引くか”ということは大問題である。どの程度の先天性異常をもった子なら産み、それ以上だったら中絶するのか。いつ死の判定はなされるべきなのか。どんな人なら人工心臓を使え、どんな人なら使えないのか……生命倫理を考えてゆくうえで最も根本的でありかつ最後まではっきりした解答の得られない問題であろう。

結局“最後の決断は個人に委ねられるべきである”というのが一致した意見であった。他の問題も最終的にはここに落ちついた。それは確かに現時点ではひとつの解決であろう。しかし、今後ますます生命倫理にかかわる問題に直面する機会がふえることは十分予測されることであるから、いずれは何らかのコンセンサスが換求される時がくるに違いない。その時、何をもってコンセンサスとなすか。これは会議後私たちが考えてゆかねばならない課題となった。

III フィールド・トリップ

1) マシア神父との討論

上智大学の生命科学研究所所長マシア神父を研究室に訪ね、「脳死と臓器移植」の論文発表をまじえながら討論を行った。

「脳死と植物状態とはどう違うのか」という知識の確認に始まり、論文に沿って、脳死の判定や臓器移植の際の諸問題—医学のみならず経済や哲学などの見地から—について話し合った。マシア神父は、「生命の尊厳を守

る、という見地から為されるべきことは、生命を引き延ばすことではなく、無理に引き延ばそうという試みをしないことなのではないだろうか」と、徒らに延命をはかる傾向の現代医学に警鐘を鳴らしておられた。

「もしあなたの家族が脳死の状態に陥ったら」という問いに対するメンバーの意見は、アメリカ的、日本的という分類をすることはできず、生命倫理に関しては文化的差異よりはむしろ個人的差異の方が大きいのではないかと思った。

この討論のような、専門家に加わってからの論文発表は、学生としての不十分な知識を補ってもらう意味でも、またより深い議論をするためにも役立ったと好評であった。

2) 朝日新聞の記者との討論

東京・築地の朝日新聞本社を訪れ、科学部の3名の記者と討論を行った。ここでは今夏マスコミをにぎわした後天性免疫不全症候群(AIDS)も話題にのぼり、発祥の地アメリカに勝るとも劣らないセンセーションが日本でひき起こされたことに対して、報道機関の興味本位の扱い方、等についても話した。

たとえば安楽死や脳死のように、まだ社会通念の確立していない問題に対しては、人々の考えにマスコミが影響を及ぼす可能性は非常に高い。そこで私たちは、新聞記事からの“知識”が生命倫理の“常識”を変えてゆく可能性についても話し合った。

日米の生命観や、脳死への反応・関心の違いはどこからくるのか、との問いに、「アメリカはピストル事件が多く、脳死に陥る人が日本よりずっと多いので脳死に対してフランクにならざるを得ないのではないか」という答えが返ってきた。面白い見方だと思った。



「ライフサイエンス」の参加者 筆者は後列左端

3) 三菱化成生命科学研究所

東京の郊外にあるこの研究所では、いま最も注目されている遺伝子工学の研究が行われている。この人間・自然研究部長兼社会生命科学室長・中村桂子先生を囲んで討論した。

ここで最も印象深かったのは、遺伝子工学などの研究を臨床的に応用するための guide line についての説明だった。日本ではアメリカよりもずっと遅れて guide line が作られたが、内容はさほど異なっていない。それに対する違反がアメリカではしばしばあるが、日本ではまだ1件もないというのだ。科学技術の人間への応用が日本で欧米よりも遅れているのは、guide line のような具体的な規制によるのではなく、日本人の心理的な拒否によるものらしい。

4) 日本看護協会

以前日本大学附属病院で訪問看護プログラムに携っておられた季羽 文子(きば・しずこ)先生を、現在の勤務地、神宮前の日本看護協会に訪ね、日本における末期患者の看護

やホスピス・サービスについてのお話を伺い、死の告知や末期ケア、医療の目的などに関する質問に流暢な英語で答えていただいた。

アメリカでは殆んどの場合、末期癌などの患者には自分の余命があとどのくらいであるかが知らされる。一方日本においては末期患者への死の告知はケース・バイ・ケースである。日本人とアメリカ人の死生観の違いが如実に現れている例だと思うが、日本においてもアメリカにおいても、死の告知のなされた患者の看護にあたる人々は、患者の感情に敏感になり、彼らが静かに死を受容するための準備には援助を惜しまない姿勢が必要だという点で意見の一致をみた。

5) 訪問看護

日大板橋病院に勤務して実際に訪問看護にあたっておられる看護婦さんにお話を伺い、その後、訪問看護を見学させてもらった。

訪問看護のシステムとは、入院の必要はもうないが引き続き治療を受けねばならない慢性疾患の患者の家庭を定期的に訪問し、看護

にあたるというものである。この病院では年600～700人の患者の訪問を3人のスタッフでやっているが、社会保険の適用されない現在ですらこれだけの人数であるから、もし保険が使えるようになればさらに患者数が増えるだろう、という病院側の話だった。

私たちはこの日3グループに分かれ、脳硬塞の60才の男性、パーキンソン氏病の60才の男性、肺線維症の20才の男性の3人の患者さんを訪問した。筆者はパーキンソン氏病の患者さんの家を訪ねた。看護婦さんは、身体状況のチェック(問診、血圧・脈測定)運動機能回復のための体操の指導などを行っていた。このほかカウンセリングも必要に応じて行うそうである。

日大板橋病院の訪問看護は病院のサービスとして行われているため患者の負担は最少限度になっているが、このような慢性病患者や末期患者の療養をただ病院の善意に任すのではなく、社会がバックアップするようにならねばならないと思った。

6) 中川教授との総括討論

大阪大学医学部で生命倫理の研究をしておられる中川米造教授を囲み、Bioethicsの分科会の総括討論を行った。

それまでの討論で結局確固たる結論には至らなかった「人間の生命はいつ始まるのか」「先天性異常がわかった場合中絶はなされるべきか否か」といった問題に対し、中川教授は文化人類学的なアプローチを示してくださった。生や死に対する概念は、医学的概念ではなく、文化的概念であることを無視してはならないということばが印象的であった。

Ⅳ 終わりに

4月末の第1回全体合宿以来3か月にわたり準備して迎えた本会議であったが、あっという間に終わってしまった気がする。文化的ギャップや言葉のハンディキャップも次第に気にならなくなり議論を深めることができたことをうれしく思うが、一方確たる結論が殆んど得られなかったのもまた事実である。生と死をみつめること、人間の尊厳を守ること、今後歩んでゆく人生のさまざまな場面で直面し考えねばならないことである。そのときに、この会議で話し合い、学び合ったことが糧になってくれると確信する。

準備期間中、日本側は3名までが東京地区に在任しており、しばしば集まることができた。一人九州に住む筆者へは頻繁に通信が送られてきて非常に助かった。4人で事前に次のフィールド・トリップを行った。

- 1) 東大リハビリテーションセンター 上田敏先生との討論
- 2) 浜松聖隷ホスピスの見學と、所長・原義雄先生、チャレン・佃和男牧師との討論
- 3) 都立大学教授・唄孝一先生との討論

このように多くの方々の協力を得てBioethics分科会への準備を進めることができた。

最後に、いつもベストの状態でテーブルが持てるようにしてくれた2人のコーディネーターに心から感謝したい。そして、ベスト・フレンズとなることのできた8人が2003年8月のreunionで再会できるのを楽しみにしている。

「科学技術と社会」

東京大学2年 文Ⅲ 戸田 繁

現代が過去の時代と区別される最も大きな点は、科学技術の発展ぶり、そしてその、社会への影響力の大きさであろう。今やわれわれは、自分たちの種を幾度も全滅させるに足る核兵器体系を持つ。遺伝子工学を中心とするバイオ・テクノロジーは、核兵器にも匹敵する脅威と、人間の尊厳に対する危惧をわれわれに与え始めている。またコンピューター技術の急速な開発と普及は、管理社会化への恐れをわれわれに感じさせずにはおかない。

これらは、科学技術の発展の表舞台たる先進諸国はもとより、技術移転等の形でこれら科学技術の恩恵(?)をこうむっている発展途上国の人々にとっても切実な問題である。科学技術の影響は、今や、あらゆる社会的問題を論ずる際に、避けて通れぬものとなった。望ましい科学技術(即ち、望ましい社会の実現に最も大きく寄与する科学技術)のあり方とはどのようなものか? われわれは科学技術のあり方をそのような望ましいものに改めかつ維持するために、どのような制御を科学技術に対してほどこしていけばよいか? そして、科学者、市民、科学技術政策担当者それぞれどのような役割を担うべきか?

このような問題意識に根ざし、われわれ「科学技術と社会」分科会のメンバーは、様々な具体的テーマを取り上げ、活発な意見交換を行った。分科会には理系・文系の双方から学生が集まり、また各メンバーの意見も非

常に多様であったので、議論はしばし白熱し有意義なものとなった。以下は、われわれの論じた諸問題の要約である。

Ken Anderson は、社会の歴史的発展を原始時代→農業時代→文化時代→産業時代→商業時代→情報時代 という流れで捉え、現在の先進諸国は既に情報時代に入っていると見た。情報化社会の到来は政府の力を弱め、個人の独立と自治の傾向を強める。また社会の歴史的発展の度合いは国によって様々であり、発展途上国と先進国の差異も、このままでは増大するばかりである。このような条件の下、必要とされる事は、他国への、適当な形態での技術移転によってその国または地域の独立性を高めると同時に、密接な相互依存関係に基づいた全地球的社会の実現に向け努力する事である。

船橋里美は、原子力発電の諸問題を扱った。原子力発電は、現在のエネルギー危機を単に一時的に回避する手段にしか過ぎず、放射能漏れの危険、放射性廃棄物の危険性、機構の巨大化による管理社会化への恐れなど、多くの問題をはらんでいる。しかもエネルギー危機自体、原子力発電を高度成長後の有望な新産業の一つとして見る原発推進派によって、過度に強調されているくらいがある。われわれは、上のような諸問題を抱えた原子力をこれからのエネルギー源として追求するよりも、



「科学技術と社会」の参加者 筆者は前列右端

むしろ、地域に根ざした形での代替技術を求めていかねばならない。……このような船橋の意見に対し、エネルギー危機の存在の当否、他の代替技術の開発の実現可能性、といった観点から反対意見が述べられ、議論が交わされた。

Erin Kennedyは、科学技術に対する市民の恐怖感を取り上げ、それを批判的に分析した。原子力発電や遺伝子工学に対する人々の恐怖感は大きく、反原発運動は拡がりつつあり、また遺伝子工学の新研究施設の建設に市民団体が圧力をかけるといったことはよく見られる。しかしこれら市民の恐怖感の大きな部分は、実際の研究状況に対する無知・誤解から生じたものである。(例えば、人々が恐れているところの「雑用のみをする生物」といったものは現段階では空想物語に過ぎない。)このような誤った恐怖感を払拭し、人々に科学に対するより正しい認識を持たせるには、科学者の側も、自分たちの研究室で何が起こりつつあるのかを、明確に伝えなければ

ならない。……以上のようなErinの意見に対し、日本側代表からは、科学技術開発における政府や大企業の絶大な力を危惧する意見が聞かれた。そこから議論は、「政府・大企業・マスコミ等ほどの程度信用しうるか」といった方向に進み、概して日本側代表からより懐疑的な意見が出た。

Intertable活動としては、国際関係分科会との合同で「防衛フォーラム」が生まれ、われわれの分科会からはDavid Gallimoreと田中智之が問題提起を行なった。Davidは現在の米国の防衛体系および核防衛の状況を紹介した後、軍縮は世界的に行なうことが必要である事、まず核兵器の削減から始めるのが望ましい事、そして、軍縮問題における草の根レベルの運動の可能性について述べた。彼が紹介した、米ソ市民相互の間の、軍縮に関する対話の試み“Target Seattle”は非常に興味深いものであった。一方田中は、日米軍事同盟関係を取り上げ、「日米安全保障条約を維持している以上、日本は米国の国益

の為に動く尖兵たらざるを得ない」とし、安保条約の廃棄と日本独自の防衛体制の確立を提唱した。Davidのこの問題に対する意見は、「防衛協力と経済協力とは切り離せないものであるから、今後日米両国が友好的関係を維持しようとするならば、防衛面でも協力せざるをえない」というものであった。防衛フォーラムでは、学生どうしのディスカッションの他に、朝日新聞編集委員、田岡俊次氏をお迎えしての講演および質疑応答、そして、防衛庁庁舎内において、数名の防衛官僚の方々および米大使館のFujito大佐とのディスカッションをも行なった。また広島滞在中は、岩国米海兵隊基地を見学した。

Jonathan Poritz は、第5世代コンピューターをテーマとした。第5世代コンピューターは、従来のコンピューターの100～1000倍の演算速度と、人工知能のアイデアとを兼備した、画期的なものであるが、これには、第4世代までのほとんど全てのコンピュータの根幹たる von Neuman 構造の本質的欠点を克服しなければならぬため、その実現は極めて困難である。特に、産業界を秘密性や攻撃性が克配し、企業間または官民の協力体制が見られない米国では、1990年までに、このコンピューターが完成される可能性はまずないであろう。

Richard Sowalsky は、19世紀後期から20世紀前期にかけての社会の動きに注目し、そこに「リアリズムから抽象主義へ」という基本的な流れを見出した。それは、社会や人間に対する把握の仕方に関しては、マルクスおよびフロイトによって根本的な変革がなされたし、芸術の諸分野においても、印象派絵画、十二音楽、「意識の流れ」手法な

どが、この基本的な流れの刻印として見られる。この流れは科学にも見受けられる。即ち従来の経験主義的自然科学に代わるものとしての、量子力学である。

坂本光弘と戸田繁は、ともに、現代科学の諸問題と、それに替わるものとしてのAT（オルターナティブ・テクノロジー）およびシステムの思考を検討した。現代科学の諸問題として、坂本は、経験主義の破綻、巨大企業や政府による科学の独占、長期的視野の欠如・軍事技術との関わり、環境破壊、科学への人間の隷属などを挙げ、戸田は、原子力と地球のエントロピー排出機構との不適合や、巨大科学が助長する社会の分極化、人間疎外などを強調した。これらの問題を克服する手段として、戸田は自給自足・小規模社会を前提としたATを提唱したが、坂本はATの閉鎖性や実現の困難さを指摘し、代わって、諸要素の「関係」を重視するシステムの思考の重要性を強調した。ATについての議論は、望ましい社会の形態とはどのようなものか、といったかなり一般的なテーマをめぐる議論にまで発展した。また、戸田の、地球のエントロピー排出機構云々の論議については、エントロピー量の測定の非常な困難さを理由に、この論議自体を根拠のあやふやなものとして批判する意見もあった。

次に、ディスカッションの合い間に行なわれた野外研修について、ごく簡単に触れておこう。

1) 富士通ファナック工場

高度にオートメーション化された、産業用ロボット等の製造過程を見学させて頂いた。

2) 角田忠信、東京医科歯科大学教授

「日本語と英語の音声言語学的特性の違いが、脳の聴覚識別部位の違いの原因であり、そのことが、文化的差異をも生み出した」との仮説の下にユニークな研究を進めておられる角田教授を訪ね、研究のようすを見学させて頂いた。

3) 科学技術庁

ディスカッション形式で、科学技術政策についていろいろな話を伺った。エネルギー問題の基本政策としては、今世紀いっぱい石油に頼り、21世紀からは太陽熱や核融合をエネルギー源として利用する方針だとの事であった。原子力発電については、石油への過度の依存を抑え、エネルギー面での国家安全保障をはかるためにも、必要だとの事であった。また、人工衛星の軍事利用については、ないと法律で明言されているので起こり得ないとの事であった。しかし、人工衛星「さくら」が防衛庁による使用を認められたことはこれに矛盾するものと思われる。

4) 鉄道技術研究所

国鉄の技術開発の中心たるこの研究所を訪ね、新幹線の新技術やリニヤ・モーターカーの開発などについてお話を伺い、施設を見学させて頂いた。

5) 榎田韶、京都精華大学教員および Ms. Eileen Smith、中尾ハジメ氏

Ms. Smithと中尾氏はスリーマイル 事故を詳細に現地調査された方々であり、調査結果の要旨を伺った。榎田氏は大学教員をされるかたわら「農」の精神を基調とするユニークで多彩な活動をなさっている方で、原発や巨大科学技術についての批判的なお話を伺った。

最後にこの分科会の印象を少し述べると、メンバーも取り上げたテーマも非常に多彩に興味深かったのだが、余りにもテーマが多岐にわたり廻ぎて、消化不良を起こしてしまったことも事実である。とりわけ自然科学は一定期間のかなり制度的な教育・訓練を要するため、自分の専門外のテーマで深い議論をするのはなかなか困難である。われわれ日本側代表も、ディスカッションの前日に日本側のみの勉強会を何度か開かざるを得ないという状態であった。今度は、扱うテーマを或る程度しぼるか、もしくは早めに各メンバーの論文を完成して準備期間中の勉強会を充実させるのが得策かと思う。来年のTech.Tableの成功を期待する。

「情報化社会」

金沢大学4年 医学 高橋 泰

私は今年のJASCで、情報化社会のテーブルに参加し、非常にすばらしい経験をした。この場を借りて、情報化社会を、客観的立場からと、主観的立場から振り返ってみたい。

(1) 客観的立場

テーブルは、各自のペーパーと、フィールドトリップにより構成される。

(i) ペーパーについて

各メンバーの書いたペーパーは、以下の通りである。

- 西美佐子—People and mass media
- カレン ローリー—

Criticisms and Challenges

- 西郷 公子

A Few Problems on World
Communication Flow

- カーラ ジョーンズ

Computers: The future at what
price

- デビッド・コナー

Effects of the Transfer of
Communication

- 高橋 泰

Information and Communica-
tions

- 西田 尚弘

Office Automation and Human
Beings

- ロス・キング

Human Language in Japanese
- US Communications

- 関 知子

Information

Disclosure System and
Invasion of privacy

“情報化社会”は、非常に幅広い概念だ。よってペーパーの内容も多岐にわたる。マスコミが社会に及ぼす影響を考えたもの、世界レベルで情報の流れを論じたもの、コンピューターやニュー・メディアが、社会に及ぼす影響を考察したもの、いま流行のOAについて考えたもの、コミュニケーションの本質を考えたもの、情報公開制度とプライバシーを

論じたもの。このような種々の分野を理解する為、かなり多くの本を読む必要があった。

(ロ) フィールド・トリップについて

テーブルのメインは、フィールドトリップであると、私は考える。普段行けないような所へ行き、普段会えない人と話ができるのであるから、フィールド・トリップが面白くないはずがない。以下、情報化社会が訪ねた訪問先を記す。

7月30日

朝日新聞：外報部次長の内藤氏と会い、日本とアメリカの新聞の違いなどについて話し合う。その後、朝日新聞社を見学。

A P通信：海外からのニュースの窓口を見る。働いている人々の語学力は圧巻。

国際コミュニケーション年推進本部

国際コミュニケーション年の意義と、推進本部の活動などを聞く。

8月3日

N H K：報道局外信部の平野次郎アナウンサーと会談。その後、NHK内を見学

銀座電話局：ニュー・メディアの花形・キャプテン・システムについて話し合い、その後、キャプテン・システムを見学

通産省：日本の電子産業の未来像、特に第5世代コンピューターについて、行政サイドからの展望を話してもらった。

8月6日

広島テレビ：広島テレビは、永年、「核」



「情報化社会」の参加者 筆者は前列右端

に関する自主製作番組を作っている。最初に自主製作番組「碑（イシヅエ）」を見る。その後地方テレビ局の存在意義などについて話し合う。

8月13日

サンケイ新聞：大阪におけるサンケイ新聞の意義が、メイン・テーマになった。「大阪に対して、サンケイは、何ができるか」ということを熱弁する支社長の姿が印象的。

8月15日

電通：世界最大の広告社「電通」を訪問。コマーシャルについて多角的な議論がおこなわれた。

一学生としては、絶対行けないような所や会えない人に、“当たり前”のような感じで行ったり、会ったりできる。私はフィールドトリップを通して、“JASC”という看板

の大きさを痛感した。現場へ行き、人に会い、話をする。これに勝る学習法は、あるであろうか。

(2) 主観的立場

私は、情報化社会のテーブルに参加して本当によかったと思う。その理由は3つある。

第1の理由は、フィールド・トリップにおいて会うことができた人々が、皆、非常に面白いことだ。マスコミ関係の人の興味の対象は、人間だ。彼らは、今人々の関心はどのような方向に向かっているかを考え続け、新しい物を作り続ける。普通の人よりセンスが良く、クリエイティブな人が多くなる。しかも人間慣れしている。人間に限りない興味を持っている人は、例外なく面白いものだ。

いくらよい内容の話をして、相手が聞く耳を持たなければ、その話は、しなかったに等しい。逆に話の内容がゼロでも、相手を引きつけるものがあれば、相手は満足する。それ故、話術が大切なのであろう。その点、情報化社会テーブルのフィールド・トリップで

会う人々は皆、話術を心得ている。来年アメリカで行くフィールド・トリップも、アメリカのNHKであり、アメリカの電通に違いない。よって今年同様、来年も、情報化社会テーブルのメンバーは、非常に面白い人にめぐりあえるだろう。

私が情報化社会のテーブルに所属してよかったと思う第2番目の理由は、非常に幅広い知識が身につく、私なりに未来社会が見えてきた点だ。先にも述べたように、情報化社会を理解するには、多くのことを勉強しなければならない。コンピューターを中核とするニューメディア、ニューメディアがどのように社会を変えるか、マスコミが社会にどのような影響を与えるか、そして情報とは何かというような問題まで、勉強する必要がある。この為、私は30冊を超える本を読んだ。ペーパーを準備する時はかなりしんどい思いをしたが、JASCが終った現在、随分広い知識を獲得したと思う。そして自分なりに、未来社会が見えてきた。私は、テクノロジーのむこうに、非常に人間的な社会を実感した。そして人間のインテリジェンスが、今以上に要求される社会が来ると考えている。

情報化テーブルに参加してよかったと考える3番目の理由は、フィールド・トリップにおける訪問先のもてなしが、きわめてよかったことである。「皆様のNHK」という言葉に代表されるように、マスコミ関係者は我々

を歓迎してくれた。

今年の夏は、たいへん暑かった。35度を超える環境では、どんな良い話でも頭に入っていない。その点情報化社会のフィールド・トリップでは、冷房完備のところであり、しかもアイスコーヒーやコーラなどを出してくれた。このようなすばらしい環境に入れば、誰でも集中力がでてくる。当然ディスカッションも白熱してくる。「心頭を滅却すれば火もまた涼し」とのたまった偉い方もいるが、私のような凡人には、クーラーとアイスコーヒーが絶対に必要であった。

マスコミの性質から考えるに、来年アメリカへ行っても、情報化社会テーブルが一番よい環境で話を聞けるであろう。どのような環境で話をしたかということは、普通考えられている以上に、重要なエレメントである。

最後に

最終反省会において、各テーブルがどのような活動を行なったかを発表する機会があった。その場において、我がテーブルを代表して、美佐子が「Our table is ICHIBAN table.」と言った。私も全く同感である。第36回JASCにおいて、コンピューターの好きな人、未来社会がどうなるか知りたい人、面白い人間に出会いたい人、そして人間が大好きな人に、情報化社会テーブルへ参加することを勧めます。

「 国 際 関 係 」

早稲田大学4年 政経学部 藤川大策

I メンバー紹介

土川 元—テーブルコーディネーターであり、副実行委員長である彼の仕事に対する真剣さには、非常に感心した。特に、仕事の合間にも決してサーフィンを忘れぬ充実した生活ぶりには脱帽する。ペーパーでは、経済制裁をとりあげた。一橋大学法学部4年。彼は、私が、今回のJASCで得た友人の中でも、最も尊敬できるひとりであり、結果として同じ会社で将来、競い合えるようになったのは、誠に幸運であった。

岡 篤 —岡と言えばアルコールでしよう。河口湖から誰かれとかまわずビールをおごりまくり、夜は夜で人を徹夜に誘惑しまくる、というタフさには呆然。ペーパーでは、サウジアラビアを担当し、エネルギー問題に関する見識の深さに、私は愕然とした。慶応義塾大学経済学部3年。次期副実行委員長である。

住野豪生—あの体格に笑い声、JAPANNIGHTでのあきれた演技の方が有名になってしまったが、テーブルでは韓国問題を取りあげ、興味深い報告をしてくれた。米側は韓国に対する関心が薄く、彼の報告が、効果的であったことは疑いない。慶応義塾大学2年(最年少)。ESS独特の英語をあやつる彼も次期実行委員である。

Terrance Tehranian—米側の実行委員、テーブルコーディネーターとして、頑張ってくれた。彼には天才という言葉がふさわしい。

あの有無を言わさぬスマートな説得術には、まいった。ペルシヤ湾岸諸国に焦点を合わせた彼のペーパーは、専門知識も豊富で勉強になった。プリンストン大学を出て、ハワイ大学に学び、58年10月より、全米一の権威あるローズ奨学金を得てオックスフォード大学で勉強している。

Renee deNevers—私のカウンターパートとして彼女は申し分なかった。速慮なく議論することができたし、アメリカ的な軍事戦略に詳しい彼女の意見は、日米両国の安全保障に対する認識の相違を顕著に示していた。スタンフォード大学を出て、58年9月よりコロンビア大学の大学院で学んでいる。優しいTerryのかわりに次期実行委員をやる。

John Rogers—なんといっても彼の日本語の上達速度には恐れ入った。JASCの始まる1カ月前に来日した時からJASC終了までの2カ月で、彼の日本語は驚くほど進歩したのである。また河口湖往復を平然とやってのける水泳狂で、モスクワ五輪候補選手だったこともうなづける。ペーパーでは、日米繊維交渉を取り上げ、相方の交渉術にまで触れ、また経済制裁についても積極的に取り組んでいた。エール大学を卒業して、スタンフォード大学の大学院にいる。父上がパイロットだそうで、往復航空運賃はfreeだったとのことである。うらやましい。

Karen Regan—彼女は在日経験もあり、



「国際関係」の参加者 筆者は後列右端より3人目

日本語をかなり理解していた米側代表のひとりだった。まじめでよく気のつく彼女は、時おり気の抜けたミーティングをひきしめてくれた。彼女が強引に取り上げたフィリピン問題は、その後フィリピン情勢が急変したことを考えると、まさに先見の明ということができようか。TVで米軍基地のことが話題になっても、すぐピンとくるのは、彼女から得た情報によるところの大きな証拠である。デューク大学を出て、ミンガン大学の大学院で学んでいる。

藤川大策—自己紹介をするのは、非常に難しい。私は、防衛問題を扱った。これは、非常にHotな話題でもあり、テーブルメンバーの絶大な協力の結果、自分としては満足な討議ができた。早稲田大学政経学部政治学科に在籍しているが、来春より土川君と同じ会社で働く。

II 準備期間

ゴールデンウィークでの合宿で顔合わせを終え、各人のテーマを設定し、週一回のミー

ティングでお互いをたたき合う。ということが会議直前まで続いた。とにかく、勉強になった。経済学に疎い私は、住野・岡両君の経済学的視点からの追及にしばしばたじろいた。ミーティング場所は、事務所、土川邸を交互に使った。ミーティング中の口論は茶飯事で、土川君と私はしばしば一対一で猛然とぶつかった。自由な討論をテーブル内でできたことは、何よりも良いことであったし、男4人というメンバー構成も、夜を徹して議論しあえるという点で、幸いであった。テーブルの団結の強さは、この準備期間中に作りあげられたということができよう。

III フィールド・トリップ

会議が始まり、テーブル内でのミーティングと有識者の方を交えてのミーティングを行うフィールド・トリップの二方式で、テーブル日程を消化していった。後者のフィールドトリップは、日本側メンバーが準備期間中に決定したが、米側メンバーの意向をきいたのは言うまでもない。相手方の交渉には、我々

メンバーが直接あつた。その結果、次の方々と会議中、お会いする幸運に恵まれた。

7月29日 田岡俊次氏(朝日新聞編集委員)

7月30日 坪井竜夫氏(防衛庁庁官官房広報室長)

Col. Wayne Fujito(米国大使館陸軍武官、陸軍大佐)
新貝正勝氏(防衛庁経理局施設課)

太田述正氏(防衛庁防衛局運用第二課)

他5氏。

司会は、防衛庁広報課の今泉氏。

7月30日 大木浩氏(参議院議員)

鳩山邦夫氏(衆議院議員)

8月3日 松川道哉氏(日興リサーチセンター理事長、元大蔵財務官)

8月3日 池田勝也氏(外務省中近東アフリカ局中近東第一課首席事務官)

岸野博之氏(同第二課課長補佐)

8月3日 江尻宏一郎氏(三井物産副社長)

矢島一男氏(三井物産文書部長)

斎藤七朗氏(三井物産海外法務室)

8月4日 桜井浩氏(アジア経済研究所)

福島光丘氏(同研究所動向分析部研究主任)

8月13日 高坂正堯氏(京都大学教授)

これほど充実したフィールド・トリップが組めたのは日本側メンバーの努力もさることながら、JASC・OBの方々の協力があつたことをここで明記し、あらためて感謝の意を表したい。

N テーブル・ミーティング

会議中、最も多くの時間を費したのが、テーブル・ミーティングであった。ミーティングでは、会議前に交換したペーパーについて議論をすることが主となった。防衛問題では科学技術テーブルと合同で、防衛フォーラムを防衛庁において催すことになっていたので合同ミーティングが行われた。ここでは、日米の防衛負担と経済摩擦がリンケージしていることが争点となった。その結果、日本は、 $f(\text{power}) = f(\text{military}) + f(\text{economy})$ の式を採用のではなく、 $f(p) = f(m) \times f(e)$ の式を採用すべきだという合意に達した。すなわち、前者を採用すると、日本は経済に全力を注いで、防衛をゼロにして国力を増進していくであろうという懸念が米側にあり、日米関係を友好的・円滑的に進め、且つ、現状を考えるならば、後者を採用の方が建設的である、という結論に達したのである。もちろん、メンバーの中には、非武装中立論を唱える者もあり、前者を採用することをゆずらなかつた。また、近年の異常な軍事費の世界的増大については、米側がソ連の軍備拡張を追及したが、私個人としては、いたちごっこのような気がした。8月3日、防衛庁で行われた防衛フォーラムでは、合同ミーティングで出た問題点を防衛庁の方々及び米国の武官の方に問うてみたが、防衛庁の方々の官僚的な発言には、しばしば落胆させられた。と同時に

日本のおかれている立場もあらためて理解させられた。

経済制裁の討論では、その実効性に疑いを投げかける発言が相次いだ。政治的手段としての経済制裁が、今や有効性を持たない、との判断をするメンバーが多かった。

中東問題に関しては、米国が政治的・経済的に介入しているのに、同盟国である日本は中東に経済的必要のみを追及している、という米側メンバーの指摘が多かった。これに対し日本側は、対外原料依存率の高い日本の経済事情を説明するとともに、日本が中東情勢に常に重大な関心を払っていることを強調した。

東南アジア情勢については、米側がカーター大統領の人権外交のもろさを主張し、東南アジアでの軍事的優位を維持する必要性を強調した。日本側は、韓国やフィリピンが、不安定な国内情勢に直面している点を指摘し、米国の対アジア政策をバックアップはするも

の、火をつけるような結果は絶対に避けたい、と強調した。東南アジアの問題は、対中政策も含めて、今後のJASCでも突っ込んで勉強してほしい。

V 後 記

テーブルでの討論がいつも白熱していたとは言わないが、積極的な発言は、ミーティングに緊張感を与えた。広島で行った、日米模擬交渉は、相手国の立場を理解するのに非常に有効であった。ここでは、日本側が米国を、米側が日本をそれぞれ演じ、経済・防衛問題について協議する、という形がとられた。米側が予想以上に日本の立場を理解しているのに驚くとともに、嬉しかった。

最後に、国際関係テーブルに協力してくださった、桃井真（読売新聞）、江崎真澄（衆議院議員）の各氏、およびJASC・OB、関係者の皆様に、この場をかりて御礼申し上げます。

「 国 際 経 済 」

早稲田大学3年 法学部

一 倉 秀 子

この会議の分科会は二つの種類に分けられる、といった人がいる。つまり、topic-orientedな分科会—例えばマイノリティやエネルギーテーブル等—と、この国際経済テーブルや国際関係テーブルといったSubject-Orientedな分科会と、である。前者が話題性が強く、学際的色あいがあるのに対して、後者は、(良い意味でも)悪い意味でもアカデミックなテーブルといった印象がある。

ところで、我が国際経済テーブルでは、実際ふたをあけてみれば大変topic性にとんだテーブルであった。それは実際、国際経済テーブル、という「経済学」の語をほうふつさせるテーブルというよりはむしろ「世界経済」と呼ぶにふさわしい、21世紀世界のvisionを追求するテーブルであった。

テーブルの最初に、国際経済を経済的側面からのみ論ずることの限界が指摘されたし、国際関係テーブルとのjoint tableがないことが残念がられた。

今回の国際経済テーブルでは、討論する問題を先進諸国間における経済摩擦(特に日米間)と、南北問題、という二大経済問題にしばった。

経済摩擦問題は企業テーブルと共に、Trade Forumを設け、有識者をまじえて5回に渡って討論をおこなった。このForumについては別項を参照されたい。

ここでは、国際経済テーブルでの討論内容

を、紹介したいと思う。

経済摩擦と南北問題、この一見なにも関連のない問題が、最後には現存の国際経済体制の限界から生じてくる危機の一形態として、また、21世紀に向けての情報化社会等といった潮流の中でとらえるべき問題として、共通の意味をもっていることを発見したとき、私達は自分の根本的価値感から問い直すことを強いられた。

私達は究極的には一体なにをこの世界に求めているのか。よりよい社会とは一体なにをもっているのか。経済問題を解決することの意義(或いは目的)は何か。意義(目的)を知らなければ、「解決」はない。

Table DiscussionではまずLucyと八木からレポートがあった。これは、特に日本経済にマトを絞ったCase Studyを通じて、現在及び将来の先進諸国の国内経済の状態をさぐろうとするもので、経済理論的な要素が多く、経済テーブル第1回をかざるにふさわしいものである。

Lucyは日本の経済成長と産業構造の変遷の概略を把握するのに有効なひとつの手段として、プロダクト・サイクルの理論を提示した。この理論によって説明できる経済状態は実はかなり狭い範囲のものであり、例えば日本や東南アジアの中進国の発展はある程度この理論で説明できても、南北問題の現実はこの理論とは関係のないものだ、ということとは



「国際経済」の参加者
筆者は後列右端

忘れてはならない。

ともあれ、この理論は往年の日米経済摩擦問題の原因をみるときに重要なものとなったし、将来High technologyをめぐるの国際的競争が国内経済にどのような方向転換を強いるのかなどを予想させるものであった。

八木のレポートは日本経済の分析であり、大蔵省、通産省の見解等をおりまぜながら日本の財政・金融政策、米国の高金利の及ぼす影響、重工業にかわって第三次産業部門が急激に膨張してきているという現状を踏まえて大蔵省から提唱されたソフトノミックスの概念、についての詳細な検討であった。

なおこの八木のレポートに関連して、日銀と大蔵省へのフィールドトリップがあった。

フィールドトリップ先の詳しいことは、英文報告書を参照されたい。

次の大林はKarlと共に、経済摩擦問題をそれぞれの視点から批判したのだが、大林はHigh technology部門での日米両国企業による熾烈な技術革新競争が次の経済摩擦へつな

がることを恐れ、日米両国がお互いに短所を補い合って技術協力する方向へむかうべきだと提唱した。

対してKarlは貿易不均衡に対するGeneral Overviewについてレポートしたため、自分の発表時間をまたずに、Trade Forumにおいて彼自身あらかた意見を述べてしまい、お互いの意見交換もすんでしまった感があった。

長浜のレポートはA.C.T.の渡邊氏、伊藤氏を招いて、おふたりのレクチャーとQ&Aが終わった後、引き続き行なわれた。南への「経済協力」の種々な様式を4つに分類し国際機関を通じた援助、直接投資、ODA（政府間援助）、NGO（民間非営利団体）の援助—それぞれを批判した。国際機関を通じた援助はホスト・カントリーに対して拘束力がないためプログラム遂行が不徹底に終わるむきがあるし、また直接投資は、最も援助を必要とする国には行なわれない。ODAは二国間援助の形態が多く、両国政府にとって最も効果的援助と考えられているがはたして

そうか。NGOは小規模な範囲で着実な成果を上げている。自民族（或いは宗教）の価値尺度のおしつけでなく、真に相手国の自発的独自の発展をささえるものでなくてはならないということが言われる。長浜は国連機関を通じての援助の内容、量的な充実の必要性を強調した。（援助プロジェクトの事前事後チェック等）

Jimは東南アジアにおける日本の直接投資の状況の分析を行ない、日本側に有利な形ではあるが、日本と東南アジアの経済的相互依存関係は強まっていること、また経済大国としての日本は、東南アジアにおける平和と安定を守る責任があることをあげ、そしてその平和と安定はなによりも経済的繁栄に基礎をおいた、健全で安定した政治情勢にかかっており、日本は経済協力を通じて自らを含むアジアの平和と安全に貢献することができる、という。東南アジアにおける日本の経済的コミットメントの強まっている現状を、新大東亜共栄圏の到来と名付けた、（別に悪いコンノテーションがあるわけではない。）味わい深いレポート。

私のレポートはASEAN諸国における経済が後発中進国として発展する可能性をもっていること、現にいくつかの国はそのようになってきているが、矛盾の多い社会構造や、その上に成立している政治構造が、国内市場の開発や適当な技術移転をはばみ経済発展をおさえていること、また、軍事費や強権的政権の維持のために費される多大な金額がその国の経済に及ぼす悪影響は大きい、ということを書いた。二国間援助の形でなされるODAは戦略的目的をもっているが長期的にみて意味をなさない、教育を中心とする「人づく

り」が大切であるということも主張した。

MaryのレポートはNIEOに対するアメリカの対応の客観的な分析であった。NIEO（新国際経済秩序）の理念は米国の自由主義経済理念と相容れないものである、従って米国は絶対にNIEOの成立をゆるすことができない、というのである。しかし現存のIMF・GATT体制のままでは世界経済はひんぱんに危機にさらされ、崩壊することもまた明らかであり、戦争直後の政治的経済的事情の上に建てられたこれらの体制が、南の政治的独立と経済的な権利の主張、政治的多極化とそれに伴う米国の経済力の相対的低下など事情が大きく変わった以上、もう一度検討され直す必要がある、ということが議論された。

以上がひとりひとりのレポートの概要である。

Table Discussionでは、レポートの発表よりも、それをたたき台にした議論が中心となった。これは成功だったと思う。しかし一回ずつの討論が興味深いものであり、互いに密接に関連し合っているものであるにもかかわらず、全体としての総まとめ、つめの部分、言いかえれば世界経済の種々のアスペクトをもう一度統合していき、その全貌を新たに明確にしていく作業の部分がかかったように思われる。国際経済テーブル参加者各自に残された課題と言えよう。

尚、各人のレポートの表題とフィールド・トリップ先は以下の通りである。

各人のレポート（発表順）

八木 健 Softonomics-What Japanese Economic Policy Should Be
Lucille I.Ito Changing Factor Intensiveness:-

Japan 1945 ~ 1980

大林照史 The Trade Friction in High Technology Industry between Japan and The United States

長浜麻里 Economic Cooperation : The Reality and the Problems

Karl Fooks An Overview of Japanese - American Trade Imbalance

James D. Gollin Co-prosperity Revisited : Japanese Direct Investment in Indonesia and Singapore

一倉秀子 ASEAN - Its Achievements and Boundaries

Mary Ellen Countryman The United States Response to the New International Economic Order

Field Trip 先

- 三菱商事 { 投資総括室 主事 野宮 博氏
同 梶田泰史氏
- 日本銀行 { 貯蓄推進局次長 荒巻浩明氏
外国局資金課長 青木修三氏

- 大蔵省 財政金融研究室 主任研究官 小関 譲氏
大臣官房調査企画課 課長補佐 内藤純一氏

同 木村茂樹氏

- アジア・コミュニティ・トラスト (A.C.T.)
渡邊 武氏 前アジア開発銀行総裁 現日本国際交流センター A.C.T. 運営委員会委員長
伊藤道雄氏 日本国際交流センターシニアプログラム・オフィサー A.C.T. 運営委員会事務局長

- 岩国基地 (optional)

(Trade Forum 関係)

- 大来佐武郎氏 元外務大臣 現内外政策研究会会長
- 天谷 直弘氏 通商産業省顧問
- 京都セラミック 総務部広報責任者副参事 前田隆之氏
(尚、8/3 forumにお呼びした方の氏名は、Trade Forum 項参照)

Japan - U.S. Trade Forum

International Business
International Economics JOINT TABLE

| | | |
|-----------|-------|----------------|
| 一橋大学 4年 | 国際金融論 | 八木 健 (I.E.) |
| 聖心女子大学 4年 | 英語英文学 | 長 浜 麻 里 (I.E.) |
| 慶応大学 4年 | 労働経済学 | 松 井 義 司 (I.B.) |

I. 意義

35回を数える日米学生会議の歴史の中で今回、国際経済・企業問題の両テーブルが総力をあげ企画した、このJAPAN-U.S. TRADE FORUMは、数々の面でユニークかつ有意義なものであったといえる。

まずJOINT TABLEという企画そのものであるが、これまで、そういった名前で2-3のテーブルが合同して共通テーマについて討論する企画はあった。しかし今回我々のJOINT TABLEは、テーマの重大性綿密な準備及びそれに費やした両テ

ーブルメンバーの膨大なエネルギー、実際アメリカ人との本会議におけるかなりの討論時間、貴重な御時間をさいて我々の討論に参加して下さった政・財界の有識者の方々、といった点で、それは単なる JOINT TABLE の枠を越えた、まさに FORUM と呼ぶにふさわしい規模のものであったという事である。

他の我々テーブルメンバーから後述されるように、実質的に JAPAN-U. S..A TRADE FORUM という別のテーブルが存在した感すらあった。このような合同テーブル企画は、より多くの人数の日米学生が参加し、意見を交換できるといった利点があり、特に今回の日米貿易摩擦においては、Free Trade Market に対するお互いの価値感の違いをまずもって認識し、その上で討論の発展性を探るというスタイルとなった。

前述したように、本会議前、両テーブル日本側メンバーが東京で行なったかなりのミーティング、更には、JOINT TABLE へお越しいただく方々との交渉・打ち合わせは、今年会議が日本で行なわれたこともあり、我々日本側メンバーに、実社会とのダイナミックな接触、企画の面白さ、を教えてくれた。本会議直前、通産省から突然呼び出しがあり、御出席下さる細川氏の FORUM 当日における役割の綿密な打ち合わせを行なったことは、関係省庁との数多い交渉の中でも特に印象的なものだった。

以下、今回の FORUM の全体スケジュール、出席下さった方々の氏名を記した後、討論内容、General Impression を述べたい。又、同 FORUM に関しては、米国人学生との共同執筆である英文報告書を、是非参照していただきたい。

II . テーマ及び日程

討論テーマ：

日米貿易摩擦を大きく日本市場の閉鎖性（オレンジ、牛肉問題を含む）と産業政策に分け討論、主として日本の対外経済政策に重点を置いた。

日程：

- 7月26日 FORUM PART I ;
日本市場閉鎖性について（学生間討論）
河口湖
- 7月28日 FORUM PART II ;
産業政策について（学生間討論）
河口湖
- 7月29日 FORUM Field Trip
日米貿易摩擦の歴史的概観及びQ&A :
元外務大臣 大来佐武郎氏 東京
- 8月 1日 FORUM Field Trip
日米貿易摩擦の問題点及びQ&A :
通産省顧問 天谷直弘氏 東京
- 8月 3日 FORUM PART III ;
日本市場の閉鎖性 JETRO会議室（司会：Lucy Itoh & 八木健）東京
FORUM PART IV
産業政策 通産省産業研究所大会議室（司会：Brian Bray & 物部敬志）東京
- 8月 7日 FORUM PART V ;
CONCLUSION (学生間) 広島
- 8月11日 FORUM Field Trip
(optional)
最先端技術と日米経営比較及びQ&A :
京都セラミック 総務部広報責任者副参事 前田隆之氏
- 以上
- I . FORUM出席者**（但しField Tripは除く）（アイウエオ順）

PART III (於 JETRO) :

北島 信一氏：外務省北米局北米二課

首席事務官

泰野るり子氏：読売新聞 編集局経済部

船瀬 俊介氏：日本消費者連盟

山形富士也氏：日本貿易振興会 (JETRO)

国際交流部 国際広報課

課長

PART IV (於 通産省 産業研究所) :

小島 明氏：日本経済新聞 経済部 論説

委員

藤原勝博氏：経団連 国際経済部次長

細川 恒氏：通産省 産業政策局産業構造

課長

(八 木)

IV. 討 論 内 容

TRADE FORUMは、日本市場の閉鎖性と産業政策について話し合った。

7月26日、日本市場の閉鎖性について、NTB(非関税障壁)を中心に、討議が進められた。制度的な問題としては、税関の通過に時間がかかること、国内販売の認可基準が高すぎることなど、について米国の学生から批判があった。農産物については、我々は、オレンジと牛肉の輸入拡大については同意したが、米の輸入については同意できなかった。しかし、米国の学生からすれば、米国産業のシンボルである自動車産業に、日本があれだけなぐりこみをかけているのだから、日本も米ぐらい輸入してもいいではないか、という考えを持っていたようだ。

7月28日、日本の産業政策について、話し合った。日本は輸出ドライブをもたらすような産業政策を現在やっていないこと、政府の研究開発費に対する援助はさほど大きな

いこと、の2点については、日米の学生の間でコンセンサスがとれた。また、アメリカ人の中には、インダストリアル・ターゲティング・ポリシーの“ターゲット”という言葉は、日米の貿易不均衡に対する、感情的なリアクションから生まれている、と言う者もいた。又、産業政策がいかに国際ルール上フェアなものであっても、日本の強い経済力から考えると、日本の産業政策が、米国の経済に大きな影響をもたらしているという認識を欠くべきではない、と警告する者もいた。

8月3日、JETROで、4人の有識者を迎えて、日本市場の閉鎖性について討議が行なわれた。北島氏は、関税に関してはECの水準よりも低くなっているものの、農産物の数量割当てなどの改善などをしなければならぬ、が米国もユニタリー・タックスなどの制度を改めていくべきだと主張された。船瀬氏は、食料の自給率の低下の問題や、食生活の西欧化が日本人の健康を害するという理由から、農産物の輸入拡大には反対の立場を示された。

同日、産業研究所で、別の3氏を迎え、日本の産業政策について討論した。細川氏の意見は以下の様であった。米国全体が日本の産業政策を批判しているのではなく、批判しているのは、プロ・レッセフェルを唱える一部の議員であり、民主党の一部や組合は、むしろ産業政策推進論者である。また、“ターゲティング”と言われるような政策は現在行なわれていない。また、現在では、産業政策は、政府主導型ではなく、民間からボトム・アップされてきた政策である。又、藤原氏は、政府の役割は常に変わっており、現在では、政府主導型の産業発展の必要がなくなっていると述べられた。更に、日本の政府と民

間との関係が、米国の様に対立的でなく、むしろ協動的であることが、誤解の種になっている、という点を付加された。

尚、大来佐武郎氏、天谷直弘氏、京都セラミックでの討論、については英文報告書を参照されたい。

(松 井)

V. General Impression

最後に、全体を通して、このTRADE FORUMを振り返ってみたい。

合同分科会を企業問題と国際経済の二分科会で持つことは、参加者の選考以前に決定していた。また、テーマの「日米経済摩擦」についても、両分科会の領域であり、タイムリーな話題でもあったので、問題なく合意が得られた。しかし議論をどのような視点で進めるかについては、当初から意見がわかれ、最終的な方向性が定まったのは、六月に日経の堀川氏に何度かお話を伺った頃だった。その間に、東京のメンバーを中心に関係諸機関との接渉が行なわれ、会議開催のおよそ二週間前に、ゲストの顔ぶれが決まった。はじめはどのような方々に来ていただけるのか不安もあったが、蓋をあけてみると、第一線でこの問題を扱っておられる錚々たる顔ぶれとなった。

こうして開会式前には一応の準備を終え、本会議が始まった。TRADE FORUMは、会議の中頃の8月3日にゲストを交えての討論、その前後に計3回の学生間の話し合いを持った。準備討論は河口湖、本討論は東京、締めくくりは京都と、会議の進行に従って場所も移動したが、同様にメンバーのこの問題に対する意見にも変化が見られ興味深か

った。特にアメリカ側参加者の場合、日本に滞在する時間が長くなるに従って、日本の実情への理解も深まり、そうした実体験が大きく影響したように思える。

会議が終わった今、TRADE FORUMは、企業、経済両テーブルのメンバーにとって貴重な体験として残っている。「合同分科会」という試みは、分科会相互の枠を越えて視野を広めるのに大変効果的であり、お互いに刺激になった。が、今回はかなり力を入れたため、併害もなかったわけではない。つまり、言ってみれば分科会を二つ掛け持ちしているような状態だったから、準備期間中も本会議中も相当忙しかった。正規のディスカッションの時間外に、フィールド・トリップに行くことなどもあり、常に走り回っているような印象を他の分科会のメンバーにも与えていたようだ。もちろん、こうした忙しさや、費したエネルギーの大きさは、充実度を高めた要因でもあるのだが、今後、合同フォーラムを組む際の一つの課題だと思われる。

(長 浜)

今回のFORUMは、第35回会議において我々両テーブルメンバーにとり、極めて思い出深い、かつ有意義なものとなった。今回我々のこの企画を成功へ導いて下さった通産省産業政策局産業構造課の皆様、外務省 情報文化局参事官 苅田様、日本経済新聞社 経済部次長 堀川様、読売新聞外報部次長 飯沼様、現在米国ワシントンD. C. におられる日米文化センター専務理事 神田様、日本長期信用銀行 調査部様、国際教育振興会文化事業部主任 竹谷様、そしてなによりFORUMに御参加下さった10名の方々に、

FORUM コーディネーターとして、紙面を借り、心からの感謝の意を表わしたいと思います。貴重なお時間の中、本当に有難うございました。又、FORUMのまさに出発点においてその企画、討論内容に御助言下さった、現在米国プリンストン大学 大学院留学中の通産省 萩原様、御協力感謝しております。

最後に、テーブルメンバーとして準備期間中、特に活躍してくれた長浜さん、岡田君、御苦勞様。松井君、ミーティングのため何度も部屋を提供してくれ、有難う。

将来更に、日米学生会議において、より実りあるFORUMが生まれる事を期待して止みません。

(八 木)

以 上

「 企 業 問 題 」

同志社大学 3年 経済学
物 部 敦 志

A. はじめに

我々企業 table は、日米関係の中でも近年特に問題となっている日米経済摩擦を取り上げその現状分析と原因としての日米企業の経営比較・生産性比較、そしてその解決法としての産業協力を焦点を当て、全体を一つの流

れに結びつけながら、企業研修・討論を行なった。

以下は参加者と paper presentation の topic である。

(発表順)

George Duke

日米の市場



「企業問題」の参加者
筆者は前列左端

| | |
|---------------|--------------|
| 松井義司 | 日米生産性比較 |
| 岡田義人 | 日米経営比較 |
| Yoko Tsuchiya | 日本の経営 |
| Clark Browne | 日本の投資障壁 |
| 大島友秀 | 企業の意志決定過程 |
| James Massie | Robotics |
| 物部敦志 | 日本の米国への投資 |
| Brian Bray | 日米の発展途上国への投資 |

なければ、何らかの *retaliative measure* がとられることは確実であり、損をするのは日本であると強調した。

産業政策に関してはアメリカ側から日本の産業政策は不正である。なぜなら①日本政府は国際競争力の弱い企業を政府の補助によって不当に競争力を高めている。②日本は官民が一体として“Japan Corporation”という一つの企業となって諸外国の企業に打ち勝とうとしている、③これらは自由競争の倫理に違反するものである、と主張した。これに対し日本側は日本の産業政策—もしそういうものがあるとしても—は不当ではない。なぜなら①どこの国でも産業政策は存在する。②日本の政府補助は諸先進国と比べて高いものではない。実際、アメリカの企業への政府補助は日本のそれと比べてはるかに高い。③政府が強制力をもって重点産業を決めたり指導することはない、と反論した。

B. Field Trip

我々の分科会ではその性格上、Field Trip が重要な位置を示める。東京では国際経済 table と共に J E T R O、M I T I にて日米経済摩擦フォーラムを開催、特に日本の市場の閉鎖性、日本の産業政策中心に討論した。さらに在日米企業の American Express 社、三菱商事を訪問させていただいた。京都では、京都セラミックにて先端技術や、ユニークな経営についてお話を伺い、大阪では松下電器のテレビ工場を見学させていただいた。

C. 討 論

I. 日米経済摩擦について

我々はこの問題を国際経済 table との Inter-Table として取り上げ、市場の閉鎖性と産業政策について討論した。市場の閉鎖性については、日本の市場の閉鎖性を関税障壁、輸入数量割当制、基準認可制度、流通機構、通関手続に分けて examine した。詳しい討論の内容は別項の日米経済摩擦 Forum に書かれていますので省略しますが、全体として言えることはアメリカ側の日本の市場閉鎖性批判は情報不足や誤解が多かったが、アメリカ側は日本がもっと“Drastic Change”をし

II. 投 資

輸出の拡大が貿易摩擦を即座に引き起こす今日、輸出に替わるものとして注目されている直接投資について、日本の対米投資、米国の対日投資、日米の第三世界投資に分け、投資環境と投資のメリット・デメリットについて討論した。日本の対米投資に関しては、アメリカ側としては雇用の促進、国際収支上など、日本側としても企業イメージアップやプレゼンス効果など大きなメリットがあるが、現状では労働組合、法律（反トラスト法など）上、問題が多いという意見が出た。

III. 日米経営比較

近年の日米貿易摩擦の背後にある製造業における日米の生産性格差を作り出している要因を探るべく、我々はまず文化的側面にスポ

ットを当て、日米の経営比較を試みた。分析の結果、将来両国が世界経済で生きるためには日本は独創性を申し、米国は協調性を持たなければならないという結論を得た。

しかし、一般的な経営論は、日米両国の企業パフォーマンスの違いを文化的要因に求めすぎているきらいもあり、我々は労働協約や金融制度といった経営環境の側面からも、日米企業の比較をしてみた。その結果、米国のローテーションに対する硬直的な労働協約や株主を優遇するグラス・シーガル・アクトなどが米国企業の成長をはばんでいるのではないかという意見がでた。

又、経営比較の一つとして日米企業の意志決定過程を分析した。その結果、日本企業の根まわし—コンセンサスによる意志決定は一見、協動的に見えるが、多くの意見を押しつぶしており、米企業の top-down 方式も一般労働者の意見が全くくみ入れられないという

欠点をもっているという結論を得た。

D. 終わりに

我々がこの会議で痛感したことは、日米両学生がいかにお互いの国のことを知らないかということ以上に、自分の国のことを知らないかということだと思う。なおのこと、日米関係は、一ヶ月の共同生活、討論で結論が出るほど易しいものではなく、経済問題にしてもそれだけで解決できるわけがなく、そこに政治、宗教、国民感情等様々なものが組み合わさっており、この会議は解決へのほんの第一歩にしかならないんだということを深く認識した。しかし、ここにこの会議の重要性があり、第二歩以降は、我々参加者のこれからの社会への貢献にもかかっていると思う。最後になりましたが、この会議の成功のために、貴重な時間を割き、協力して頂いた方々に心より感謝の意を表したいと思います。

平和と安全保障シンポジウム（ 1 , 4 , 5 , 6 ）

広島修道大学3年 社会学
三宅隆史

平和と安全保障シンポジウム (Peace & Security Symposium) は、「相互理解—平和な社会に向けて」という総合テーマを具体的に考えていく場でした。また、今回の JASC では唯一のシンポジウムであり、重要な位置を占めていたといえるでしょう。

私たちは、「平和」を単に「核」や軍事化の視点からのみとらえるのではなく、「平和」を阻害しているさまざまな要因、すなわち、

飢え、貧困、人権の抑圧、差別、イデオロギーや社会体制の違いなどを考えることによって、「平和」を多角的にとらえ、討論するよう努力しました。

シンポジウム 1

まず、富士山の麓、美しい河口湖で、ヒロシマの惨状を伝えるフィルム「にんげんをかえせ」を観た後、岡田義人君によるスピーチ、

そして日米防衛負担の問題、憲法改正の問題について議論しました。また、お互いの平和観、平和とは何かについて意見を交換しました。あるアメリカ側参加者は、平和とは「危険や恐怖なしに暮らせる状態」と言い、ある日本側参加者は、「差別や人権の抑圧のない状態」と言いました。また、「飢えのない状態」と考える参加者もいました。というのは、ある第三世界の代表者が、「北の国々では、核凍結のための運動が盛んだが、このような平和運動は、飢えと貧困に苦しむ南の国々にとっては、ナンセンスである。」と言ったように、全地球的視野にたって平和を考えるならば、資源、エネルギー、食糧が平等に分配されることによって、飢えの問題が解決されなければ、真の「平和」とはいえないからです。もちろん、平和とは戦争のない状態という消極的な平和観を持っている人もいました。ともあれ、平和と安全保障シンポジウムの最初に、お互いの平和観をぶつけあったのは、有意義なことでした。

シンポジウム 4

8月6日、38回目のあの日、あの時を迎える広島に、私達はいました。私は広島の間人なのですが、あんなに暑い日は滅多にないと思います。平和記念式典に出席し、犠牲者の冥福を祈りました。そして映画「ピカドン」と「予言」を観ました。恐ろしいフィルムでした。今日、東西の核超大国には、世界の総人口の数十倍以上の人間を殺りくするに足る核兵器が貯蔵され、いつでも使用できる態勢が整っているといわれています。しかも両陣営は、イデオロギーや社会体制の対立のために、猜疑心、危機意識を増幅させ、核兵器の

増産と新しい兵器の開発と配備の Arms race（軍拡競争）を続けているのです。核戦争の脅威は現実のものであり、時間はあまり残されていないと感じました。そして、一瞬の悲劇のために26万人の人が亡くなられ、今も多くの人々が苦しんでいるという事実、つまり、核戦争が何をもたらすのかを、私たちは決して忘れてはならない、と思いました。広島大学の芝田教授が「反核文化」について講演されました。芝田教授らが主催された「原爆犠牲者にささげる音楽の夕べ」に行った参加者は、深い感銘を受けたようです。

ところでこんなことがありました。とにかく8月6日は暑い日でしたので、午後の分科会が終わったあと、あるアメリカ側女性参加者がプールで泳いでいたところ、子供たちに「A-bomb、A-bomb」と言われたそうです。このことは彼女にとってショックでした。アメリカ人にとって、あの日に広島にいることは、気持ちのいいことではないでしょう。では、私達があの日に広島を訪ずれたことはどんな意味があったのでしょうか。平和公園にある慰霊碑には、「あやまちは二度とくり返しませんから。」と刻まれています。しかし、人類は、38年前の出来事を忘れたかのように、いやまるで知らないかのように、核戦争の準備をしています。広島、長崎は、単に日本人や在日朝鮮人の惨禍ではなく、生命を持つものすべての悲劇なのです。だから、私達は、「あやまち」とは何であったのか、何が「あやまち」の原因なのかを徹底的に追求しなければなりません。被爆者で小説家の原氏喜氏は書きました。「人類は戦争と戦争の谷間にみじめな生を営むのであろうか。

原子爆弾の殺人光線もそれが直接彼の皮膚を灼かなければ、その意味が感覚できないのであろうか。」(1948)

シンポジウム 5

38年前の出来事をもっとよく知るために、8月7日私たちは、原爆資料館を訪ずれました。その後、6つのグループに分かれてフィールド・トリップに出かけました。フィールド・トリップは以下の6つでした。(1)原爆養護ホーム・志水所長に原爆症についての話をうかがい、ホームで生活していっしょに被爆者の方々から、被爆体験をうかがいました。

(2)津田アヤ子さん(3)福岡とみゑさん・お二人とも被爆者で、我が子を原爆で失われました。お二人の御子息の遺品は原爆資料館に展示してあります。(4)近藤藤子さん・父親が平和運動家の谷本牧師で、生後すぐ被爆されました。(5)三滝寺の佐藤住職・宗教の立場から平和運動をしておられます。(6)Hunger Project

被爆者の方々にお会いし、被爆体験をお聞きしたのは、大変有意義だったようです。被爆者の人たちの気持ちを私たちは、本当に理解できたとは言えないでしょう。しかし、フィルムや展示物からは感じることでできないヒバクシャの「痛み」を私たちは少しは理解できたのではないのでしょうか。6月の終りに、福岡さんのお宅に、フィールド・トリップのことをお願いにうかがったとき、わが子を一日中探されたことを涙を流しながら話されたこと、津田さんが、「もし息子が生きていたら、あなたのような孫がおるんじょうけどねえ。」と寂しそうにおっしゃったこと、を私は忘れることができません。

Hunger Projectとは平和を阻害している重要な要因である「飢え」をストップする

ためのProjectです。Scott Scharer君が飢えとは何か、だれがどこで飢えているのか、何が飢えをもたらしているのか等々について報告しました。一日に全世界で約5万人の人口が飢死しているという事実は、ショッキングでした。なぜなら、原爆による広島犠牲者は約26万人ですから、5日間で、原爆犠牲者と同じ数の人口が飢死していることになるからです。「核」の問題以上に、「飢え」の問題は、第三世界において深刻なものです。平和＝non戦争ではないと痛感しました。

シンポジウム 6

8月8日、最後のシンポジウムが開かれました。まず、Field Tripの報告、そしてKaren Reganさん、吉田典子さん、Niki Lilienthalさんによるスピーチ、そして最後に、平和のために自分は何ができるか、について討論しました。私はこの討論には参加できなかったのですが、平和運動をしているアメリカ側参加者と話していたとき、私が、「今日の核の量、飢え、人権の抑圧、差別などの構造的な社会的不正義を考えると、現状をよくするために、個人やグループでがんばっていても仕方がないのではないかと、無力感に襲われて、どうしていいかわからなくなるんだ。」と言ったところ、彼女は、「私達は一回しか生きることはできない。だから現状をよくするために何かをしなければ、私は後悔するだろう。しかし、平和のために、よりよい社会にするためにコミットすれば、私は少なくとも後悔しなくて済むし、幸せだと感ずることができる。また、たとえ小さくても社会をよくしていくことは可能だと思う。」と言いました。私はこの言葉に勇気づけられ

ました。

最後に、このシンポジウムのために講演をしてくださった方々、お話を聞かせていただいた被爆者の方々に感謝します。そして、お

世話になった前原爆資料館館長の高橋昭博氏の言葉でこの報告を終えたいと思います。

「平和の原点は、人間の痛みがわかる心を持つことです。」

ISAとの合同シンポジウム

広島大学3年 教科教育学科

森井 哲也

ISAという団体は、昔、JASCとひとつの団体であり、後者が日米という二国間の会議に限っているのに対し、アジアの各国との交流を目的に、枝分れした団体であると聞いている。その目的とするところは類似しているが目の向いている方向が違う。

こうした異種の団体が東京で合同し、シンポとパーティーの時間を一日だけ持った。

それというのも、平和を考える際に、第三世界と呼ばれる国の多いアジアからの視点や主張が必要であると考えられたからであろう。

とにかく、我々は、いきなり合同し、お互いの団体の紹介の後、アジアの開発に関する映画を観、聞き、小グループによる討論の場が与えられた。

しかし、合同シンポは本当に合同だったのか。両団体の多くのメンバーは、頭ではその意義を理解しようとしながらも、その唐突な出会いと、他団体であるという意識のために互いの交流は、ぎこちなかった。

こうした感想は、「何故、彼らと会って討論しなくてはならないのか。」とか「各団体のメンバーがパーティーで固まっていたね。」といった声にも裏づけられると思われる。

そして、国際人にあこがれている人が多い

のにもかかわらず、容易には溶け合わない「仲間集団意識」がみられたことは、交流の難しさを示しており興味深いものであった。

又、日本人参加者として個人的には、ホッとしたというのも事実であった。まったくの異文化であるとは言えないまでも、その姿形や言語の違いの大きなアメリカ人と異なり、日本的な顔や、英語を外国語として話すといった共通点には親近感がわいた。

それは、そのまま、アジア人としての日本人という意識にもつながっていく。

この合同シンポが、日本の世界における位置を考えさせる機会となりえたのは、会議全体をつうじて一番多くの国籍を持つ人々の間を日本人参加者が右往左往(?)したからであろう。アメリカ人参加者はいざ知らず、日本人にとっては、欧米一辺倒といった価値的指向の図式を自ら問うことになったのではないだろうか。

「果して、自分の眼には、韓国や香港やインドネシアの人が、アメリカ人と同じ大きさで映っているだろうか。」

「果して、自分の心には、アジアから学ぶことに対する情熱が、先進国(?)アメリカへのそれと同程度にあるだろうか。」

日本人参加者の多くは、国際会議の様相を呈した、合同シンポのその日、少なからず、優越・劣等の二つの意識の不協和音に悩まされたと思う。そして、その中から現代の日本

の世界的位置や役割に思い及んだであろう。私自身、当日のシンポの内容よりも、こうしたことが深い印象として頭の中に強く残っているので書いてみた。



四谷公会堂での
合同シンポジウム

男女フォーラム — 7月29日 —

早稲田大学4年 政経学部
藤川大策

その前夜、朝4時まで話をしていたので、頭はもうろうとし、体もだるかった。河口湖から東京へのバスでは、ひたすら眠る。駒場エミナースに到着したのは12時、あまりの暑さに閉口した。Keiと筑駒の校庭で弁当を食べていても食欲なし。彼女がめちゃくちゃ可愛かったという理由もあるだろうが、酷暑と保守派日本人を代表するのだという緊張感のせいだろう。リベラルなアメリカ人及び日本人女性からの攻撃はさげられそうもない。一応、

想定問題集も作った。たぶん、誰もびびって助けてはくれまい。

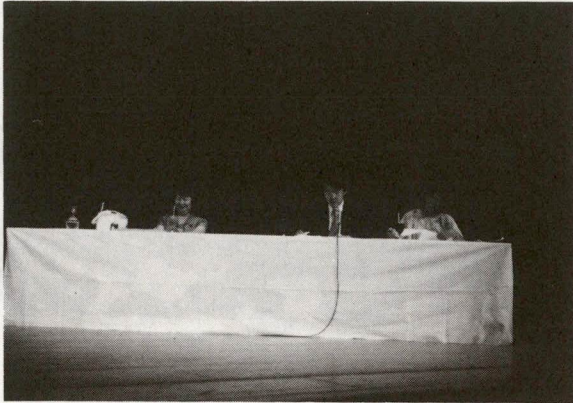
ホールにはいったのは1時。司会の八木とKeiと打ち合わせ。米国側リベラル派代表のYokoは既に勝負あったというような大きな笑顔で、じろりと私を見る。私と共同戦線を張る予定のClarkは平然とした表情。日本側リベラル派代表の坂本女史は、ニコニコ笑って気持ちわるい。ああ、俺は孤立無援だ、と思っているうちに、フォーラムは始まった。

八木のいつもの英語、今日は特に耳障りである。

砂田、中西両女史のスピーチは、非常に興味深かった。砂田女史の徹底した日本保守派批判、中西女史の労働経済学的視野から見た現状分析、いずれも素人の私には強烈な印象

を与えた。機会があれば、個人的にお話を伺いたい。

さて、小休止のあと、いよいよ、日米各2名ずつの代表によるプレゼンテーションが始まった。私は、トップバッターである。かけたくないメガネをかけ、原稿を読み上げた。



左端 中西女史
中央 筆者
右端 日本側 Liberal 派代表 坂本佳鶴恵

読んでいるうちに、準備期間中の思い出がちらちらと頭の中に浮かんだ。毎週一回のフォーラムミーティング、T医大K教授とビールを飲みながらの2時間にわたる議論、八木の早口、松井さんの徹底した女性主婦論、そしてキャノン人事部とのインタビューなど…。今日のこの3時間のために、皆、実によく働いた。勉強した。私自身も、このフォーラムのために買った本8冊。プリントの枚数、教

知れず。
私のプレゼンテーションは、次の三点を柱としていた。平均的な身体構造において男女の差は存在する、ホルモンの差異が男女の行動に大きく影響する、そして企業原理から考

えて結婚後に退職する日本人女性に職場を開放するのはかなり難しい、以上である。このプレゼンテーションは、かなり impact を与えたようであった。もともと、反論を喚起するために作られたようなものであるから、当然とは言えようが、笑い声が多々あがったのには、我ながら閉口した。私は決して漫談家ではない。

笑い声は多かったが、拍手の少なかった私のプレゼンテーションが終わり、坂本女史、Clark Yoko の順で日米両国代表の主張はひと通り終わった。Yoko は、さすがに米国側リベラル派代表だけあって、拍手も大きく、私は非常に不快であった。そして、いよいよ

質疑応答が始まった。私は、さつと想定問題集に目を通し、メモをとる体制を作った。質問が、保守のかたまりのような私に集中したのは言うまでもない。私は個人的には、リベラルな面をかなり理解している。しかし、このフォーラムでは、保守に徹するよう決めていたので、標的になることは始めから覚悟していた。従って、別段女性軍の突き上げには、なんともなかったのだが、時おり、「このわからず屋。」と怒鳴りたくなる場面もあった。また、共同戦線を張っていたClarkも少々頼りがいがなく、終盤では戦線離脱ととれる発言が目立った。私の緊張緩和手段は、司会の女性の笑顔をチラチラと見ることであったが、思わず「女の役割はまさしくこれである。男に笑顔を与えることだ。」などと、口に出したらサンダルが飛んできそうなことを、思いついたりした。

フォーラムは、日本側保守批判、すなわち私への攻撃のみで幕を閉じた。私自身は、フォーラムが盛りあがっただけで充分満足であったし、陰で尽力してくれた仲間に、少しでも報いることができたのではないか、と思った。しかしながら、フォーラムが終わった直後、皆の私に対する目付きは一種異様であった。声もかけたくない、といった表情で、私は思わず逃げ出したくなった。その後すぐにテーブルのフィールドトリップがあったのは、嬉しかった。

それから数日間、私は完全に保守のレッテルを貼られ、米国側女性代表団の集中砲火を幾度も浴びた。時には、サンダルが飛んできた。平手打ちもくらったかな。今だにJAS

Cの友人から送られてくる手紙には、このフォーラムでの私の意見をからかったものが多くある。苦笑する限りである。そう言えば、男性サイドの反応についてあまり触れなかったが、乱痴気友達であったDukeが、フォーラム直後、私にこう言った。「どいつもこいつも腰抜け野郎だ。女の気嫌をとりたばっかりに、リベラルのふりしやがって…。おまえ勇敢だった。」彼は、たしかにフォーラム中、私を救う発言をしてくれた。その後、DukeはJASC終了後もしばらく東京に滞在した。私の大事なデートの前日に、Duke、サーファーの元、アル中の岡の3名が私を酒に誘い、酔いつぶしたのは、彼らにとって良い思い出となったことだろう。もちろん、私には悪夢だったが…。

あいにくフォーラムの良い写真がなかったので、男女フォーラム・コミティーのメンバーを全部写真付で紹介できないのは残念である。可愛い渡辺さん、京都でダウンした下川さん、難しい日本語で我々を悩ませた一倉さん、夜遅く家まで送ってくれたやさしい八木、フォーラムミーティングにすてきな応接室を提供してくれた松井さん、早くから日本に来て我々に協力してくれたYoko、私の電話に感激していた坂本さん、男女テーブルのメンバーとしてフォーラムに全面協力してくれた萩原と嶋田さん、日米同盟を堅持するはずだったClark、JASC全体を通して最も感謝しなくてはならない愛しいKei—みんな本当に御苦労様でした。皆さん、いい御主人、奥様になってください。私は、最も馬鹿げた、そして最も楽しい人生を日ざしますので…。

宗 教 フ ォ ー ラ ム

聖心女子大学 4年 英語英文学

長 浜 麻 里

八月十二日、会議も終わりに近づいた京都で、宗教フォーラムが行なわれた。#宗教#をテーマにしたフォーラムを持つのは、今回がはじめてということで、反省すべき点多々あるが、京都という宗教的な伝統をもつ町で、参加者ひとりひとりが宗教について考える機会を持てたことは、貴重な経験であったと思う。

当日のフォーラムは、つぎのような次第で行なわれた。

日時：八月十二日

第一部：合同討論（全体）

場所：河原町カトリック教会

時間：十時～十二時（十二時から同教会で昼食）

ゲスト：東門陽二郎氏

（河原町カトリック教会神父）

Leslie川村氏

（Univ. of Calgary 教授）

内容

I・Q&Aセッション

II・オープン・ディスカッション

第二部：グループ・ツアー

A-河原町カトリック教会

（指導：東門陽二郎神父）

B-石清水八幡宮

（沢井隆男氏-石清水八幡宮

権禰宣）

C-神慈秀明会

（岡田吉弘氏-同会青年部）

D-禅文化研究所

（法岳光徳氏-花園大学）

E-西本願寺

（西脇正文氏-伝導院部長）

第一部は、まずゲストの紹介から始まった。東門氏は、会場をお借りした河原町教会の神父様で、ローマのウルバノ大学で教会法の学位を取得後、バチカン放送日本語部門担当などを経て、現在は上記教会の司祭の他、キリスト教協議会の副議長も務めている。川村氏は、カナダのサスカチュワン大学で東アジアに関する研究で学位を取り、現在はカルガリー大学の宗教学の教授である。

紹介のあとは、すぐにQ&Aセッションに入った。質問の内容は、ゲストの方々のアカデミックさに合わせたのか、教義に関する専門的な質問が多かったように思う。東門氏はキリスト教、特にカトリックの立場から、川村氏は、宗教全般、特に東アジアの宗教に明るい専門家の立場から質問に答えてくださった。

十分間の休憩のあとは、二人のゲストに、学生側からAndyと私がパネリストとして加わってオープン・ディスカッションになった。休憩前のQ&Aセッションと違う点は、質問とそれに対する答えでできた問題点を放置

せず、その問題に対する意見を複数のパネリストや会場の学生からも求めるという点だった。このディスカッションでは、はじめ「科学技術の進歩は人類に幸福をもたらすだろうか。」「宗教はこうした問題に対してどのような態度を取るべきか。」という質問について意見が交換されたが、後半は主に「宗教」と「社会」との関わりに焦点があてられ、宗教団体の政治力、資金獲得の方法などに関する質問や意見が交わされた。そしてこのディスカッションが終わりに近づく頃には、「個人個人の、宗教との関わり方」について、会場の学生から、「人はみな自分の中に、それが既成の宗教であるか、その人独自のものであるかは別として、何かその人の「宗教」と言えるものを持っているのではないか。」などの意見が出された。こうした意見に対して、まだ学生側からもパネリストの中からも多くの手が上がっていたが、残念ながら時間切れとなってしまった。

第二部は、河原町教会での昼食のあと、五つのグループに分かれて行なわれた。このグループ編成は、大阪の参加者が連絡を取り説明者の用意をしてくれた五つの宗教団体についてあらかじめ全員の希望を取り、できるだけその希望にそうようになされたものである。目的地と説明者の名前は前記の通りで、Aはキリスト教のカトリック、Bは神道、Cは新興宗教、Dは仏教の禅宗、Eは仏教の浄土真宗とバラエティに富み、日本の宗教の諸相が見られるように配慮されていた。

それぞれのグループのメンバーに感想を聞くと、どこもその宗派の特徴を聞き、建物や文化財などを見せてもらったようで、それなりの感觸は得られたようだ。しかし、あえて

ようだと言ったのは、ほとんど説明が日本語だったため、学生が通訳を務めたが、こと話題が宗教という日本語でも理解するのが難しいものだけに、アメリカ側参加者がどれだけ理解できたかについては疑問が残るのである。次回、「宗教」あるいは、抽象的なテーマでフォーラムを組んだり、フィールド・トリップを組んだりする場合には、この点に特に注意した方がよいと思う。

最後に個人的な感想を少しつけ加える。何はともあれ関西の参加者の協力に感謝したい。フォーラムが京都で行なわれたので、会場の選定から人選びまで、具体的な交渉はすべて関西まかせだった。しかも関西は人数が少ないので、フォーラムのスタッフだけでなく、メンバー全員が奔走してくれた。グループ・ツアーも、率先して先導してくれて、本当に助かった。

一方、冒頭にも書いたように、反省点も多々あったことも忘れてはなるまい。それは主に準備の段階での、米、日-関東、関西の三極に分かれたスタッフ間の意志疎通の問題である。「宗教」というテーマ自体が抽象的で、根本的には個人的な問題であるとも言えるものだけに、三極のうちの一極で話し合われた内容を他の二極に、客観的に正確に伝えることは大変に難しい。今回の場合は、アメリカ側スタッフは、「宗教フォーラムを是非実現したい。」という熱意と、当日の司会をするという意味表示、関東は会議の内容の検討、関西は実際の準備という暗黙の了解が事前にはあったように思われたが、そうした分担が実際にはうまく機能していたとは言えなかった。その原因は、一つには準備段階での情報交換の不備、そして今一つは、会議期間中の

伝達、話し合いの不足ではなかっただろうか。その点では、残念さが残る。

結論としては、私個人としては、「宗教」をフォーラムの題材として選ぶことは無理ではないと思う。ただその場合には、フォーラムの進め方によくよく注意しないと、興味をはじめから持っていない人が実質的に参加できない危険性が高い。他のどの企画にも言え

ることだが、その企画を通じて何を得たいのかを明確にし、それにそって、一貫性を持って準備、運営を進めることが必要だと思う。特に、宗教のようにつかみどころのないものがテーマだと、それに携わる人一人一人が絶えず自分の宗教に対する態度を認識していないと、方向性を失う恐れがあるように思う。

広島でのホームステイ

東京外国語大学

2年 ボルトガル・ブラジル語

吉田典子

八月八日午後五時。広島駅に着く。広島のは八月は直射日光が強い。六日に行なわれた平和式典に参加するために組まれた広島プログラムもこれが最後。いよいよホームステイの時が来たのだ。日米の代表がふたりひと組となって一軒の家に二日間お世話になった。日米どちらの学生にとっても、JASCを通じて地域の方々との交流のできるチャンスであった。

私の相手はLucy Ito。日系三世の彼女は日本語ペラペラ。これで二日間、日本語でいけるゾ！と内心ほっとする。お世話になるお宅は桑原さん御一家。駅には会社に勤めていらっしゃる純子さんが、「Welcome Lucy Ito・吉田典子さん」と書いたプラカードを持って待ってくださっていた。私たちのためにカードを作ってくださった純子さんのお心遣いに、これからのホームステイがきっとすばらしいものになるような気がして、思わずLucyと顔を見合わせてほほえむ。

駅から車で十五分。街から少しはずれて畑

の多い、静かな所に桑原さんのお宅があった。

「あら、ふたりともいらっしゃいね。」顔中にはほほえみを浮かべて、純子さんのお母様が出迎えてくださった。JASCもほぼ半分。これまでずっとホテル住いでスケジュールをこなして来た私たちにとって、家庭の香りがとってもなつかしかった。

「いやあ、遠慮しないでこっち来んしゃい。好きなもの取ってどんどん食べんしゃいね。」

夕飯にはスキヤキ、焼トリ、煮しめにお刺身、ほっかほっかご飯！親戚の方が全員集まってくださり、大きなお膳を囲んで大宴会が始まった。スキヤキのおかずで冷たいビールがとってもおいしい！

「ふたりとも飲みんしゃい。」勧められるビールと皆さんの暖かさに、Lucyも私もすっかりくつろいでしまった。ふと気がつくとLucyはまたビールおかわり！会食しながら、Lucyの故郷Californiaの話、広島カープの話、私の出身地埼玉の話！なんと私は気

づいた時にはすでに遅い(?)、「埼玉さん」と呼ばれ、会話に入れていただいていたのだ。

「Norikoの埼玉は田舎なの？」と尋ねるLucyに、日本人は出身地を誇りに思うものであるから、出身地が人のあだ名となることもある…と日本文化を説明する。

お風呂いただいて二階に上ると、きれいなおふとんとかわいい枕を用意してくださっていた。女の子らしい花模様がついていて、何かほっとする気がした。

「寝る前にもう一杯やりましょうよ。」お風呂上りの冷たい一本。(実は二本だった。)純子さんが持って来てくださった。じわーとしみる味！フワフワのシーツの上に三人ゴロンと寝ころんで本音のお話。ビールも手伝ってくれて本当に楽しかった。

「何かのきっかけで、会うはずのなかった三人がこうして話せるって不思議ね」と純子さん。広がる人の輪ってすばらしい。その夜は旅の疲れと冷たいビールと、そしてこの満足感と安心感とで、ぐっすり寝込んでしまった。でも、電気を消してから十分ぐら以後で、純子さんがクーラーを止めにそーとつま先で歩いているやさしい足音に気づいたけれど…。

翌朝。その日は純子さんのお兄様がお友だちと二人で、私たちをボートで宮島へ連れて行ってくださり、一日中瀬戸内海で遊んだ。厳島神社をお参りして、鹿をなでてから他の島へ。ビュンビュンとしぶきをあげて走るボートは軽快で気持ちがいい。つかまっていなはいとほり出されそうなスピード感！思いっきり夏！瀬戸の風景がどンドン後ろへとんで行く。ちょうど宮島の後ろにある小島に着く。桑原さんのお友だちのお店に座って待ってい

ると、何とタイの活き造り！サクッサクッと包丁で切られた厚い肉。新鮮で透明な肉の上に、うっすらとあこや貝色の油がかかっている。魚の目は生きている！

「乾杯！」四人でビールをついで豪華な真昼の海の宴会。珍しいのはタコのお刺身！生きたタコを取ってきて、皮をむいて切ったものとか！LucyのCaliforniaの海の話もまじって長い昼食を楽しんだ。

再びボートへ。お腹いっぱい食べた後は少し運動を！Lucyと私の水上スキー初挑戦！救命具をつけて、海へとび込んで、綱を握りしめ、水中でかまえて…Go！グォーン！ものすごいスピードでボートがひびく。立ちあがれるか？手をピンと張れ！わーっ足が開きすぎ！形が崩れるっ。ダメッ。バシャー。手を離してしまう。残念！でも救命具があるから、ボートの行ってしまった静かな海に安全に浮いていられる。実はLucyは三度目にはちゃんと六百メートル走った。私は…イヤなことは忘れよう…というわけで、日米水上スキー会議は米側勝利であった。午後は砂漠のきれいな小島へ。広島方面を見やると分厚い入道雲。雲が行ってしまっで日がかけるまで、涼しい瀬戸で貝ひろい。白雲母と赤い貝と砂の混ざった石は、今、磨かれて私のペンダントになっている。夜、快い疲れを感じて広島へもどる。市内のお店で、おすし、あわび、茶ソバ、牛刺、日本料理をお腹いっぱいごちそうになる。広島のみ、忘れられない。九時頃お宅にもどる。

ホームステイ最後の朝。お母様と純子さんが駅まで送ってくださった。

「袖ふり合うも他生の縁、てね。あんたらふたりともまた来んしゃいよ。」そうって

くださったお母様。ムギワラ帽子が見えなくなるまで、おなごりおしくて目で追いかけた。桑原さんご一家の暖かさ。私も旅の人を慰

めることのできる豊かな人間になりたい。心から感謝いたします。有難うございました。

スモールトリップ

関西学院大学4年 英文学

石本みや子

今回の会議はアメリカ人と日本人が組になり小旅行をするという企画を初めておこなった。この小旅行は広島でのホームステイ企画の後におこなわれたものであり、個人単位での交流が深まり、非常に良い企画だったように思う。

ここでは、私のスモールトリップの思い出について語ってみたい。

広島駅から姫路駅への新幹線の中でアメリカ側の参加者が冗談で「このまま東京へ行くか」などと言っている。無理もない。たった1泊2日の旅だ。皆疲れている。広島は暑かった！

姫路駅から山陰行の列車に乗る。混んでいて座席もない。皆疲れているのに、可哀そうだと思う。日本側の参加者には狭い列車の通路で眠る者もいる。もうちょっと待ってくれば、列車もすいてくる…そうすれば、のどかな日本の田舎でのんびりできるのだが。

今回、私のグループはもうひとつ別のグループと、ジョイントで行くことになったのが行き先を決めたのは私である。山陰は城崎郡、私の生れ故郷のとなり町で山陰海岸に面する竹野町へ行くことにした。おぼの経営する民宿があるので、私のわがままがある程度

聞いてもらえそうだったし、少し行けば海があり、泳ぐこともできる。のどかな、観光地ではあるが、緑の水田に囲まれた静かなところで、夕食には定評ある山海の珍味で舌鼓をうてるのだ。

それにしても皆疲れている。1泊2日といっても少し急ぐ旅である。「明日は京都まで行かねばならない」などと考えながらも列車は竹野駅についた。

おぼの民宿で一息ついてからバスに乗って海に出る。

「わあ！海がきれいねえ!!」いつも見慣れていたはずの日本海の青さに驚いた。しばらく泳いで、ボートに乗って岩島の方まで行く。透き通って光の輪をゆらめかせる神秘的な海の底…そう、これが日本海なのだ。今更ながらに感動していた。排水やあきかんなどで汚れてしまった海、対流が少ないためににごった水色の海は、私にとって日本の海ではない。夏は青く、冬は荒れ狂ってしぶきを投げかける灰色の海、それが私の海のイメージだ。そしてそれは、山陰という地方によく似合う。じっと耐えることを知っている働き者たち、マンションや団地住まいの、隣りの人とさえも口を開いたことのないような都会の

人々は、私にとって、日本人のいいところを無くしつつあるように思えてしまう。私がスモールトリップにここを選んだのは、あくまで、日本らしいところを見てほしい—それも田舎と言っても建物はかなり現代的な日本スタイルの家屋の家々のあるところ、日本も変わっていているということがわかるところを—という気持ちが大きかったからである。そして、日本人を…素朴で干涉好きだけれどあったかい日本人を見てほしかった。

アメリカ側の参加者をつれて行ったことで、近所の人「あんたんとこは一体何事ですぞえな。」と驚いた。まだそんな風に民宿に外国人が泊まるのが非常に珍しいところだ。日本の大部分の町や村は、まだそんな風なのだ。

夕食は、皆の期待を大幅に超えた御馳走だった。次々に運ばれてくる食べ物に皆驚いていた。竹野浜でとれる魚やカニ、海草、それにおぼの畑でとれる野菜の煮ものや自家製のつけものなどなど、満足の行く夕食だった。私にしてみればそんなに驚くものでもないのだが、他の観光地の旅館やホテルは大しておいしくもなく量も多くはない食事を納得いかぬ値段で食べさせてくれるからだろう。日本人の心使いも地に落ちていくのだろうか。

これら山海の珍味こそ日本人を理解するのにまた必須であると思う。海岸に住む日本人の多くはこれらを食べ暮してきた。魚が日本人の食生活並びに文化に大きく貢献してきたことは否みようがないが、何でも旺盛にトライしてきた日本人の食べ物への好奇心と知恵には驚かされる。その結晶が今の食卓の上の数々の料理なのだ、などと考えながら納得して食べているのは「文化と芸術」のテーブルで日本の食と文化の関係を追う私である

からだろうか。一方皆は目を輝かせながら日本の味を満喫しているのだった。

夕食のあと皿洗いをしているとディスコミュージックが流れ聞えてくる。何だ？ と思って大部屋をのぞくと、何と、JASCの面々が踊っているのであった!! この民宿をディスコにしたのは彼らが初めてだろうなどと思いつつ皿洗いに専念しているとアメリカ側の参加者の男の子が皿洗いを手伝ってくれた。お客さんに皿を洗ってもらうなど、これもこの民宿開業以来かつてないことである。こうして日米文化の違いを肌で感じながら私はJASCのメンバーがこの田舎町で見せてくれたバイタリティを面白がっていた。これぞJASCの成果であった。!?

次の日は城崎の温泉に行ったり水族館に行ったりした後、京都行きの列車に乗った。

こうして1泊2日のスモールトリップは無事終わったが、これに関しては考えるべきところがたくさんあるだろう。私は、私達のグループのメンバーは良い思い出として小旅行を楽しんでくれたと思っているが、他のグループに関しては不満の声もあった様だ。疲れているのに色々な場所をまわらなければならなかったので十分楽しめなかったこと、また自分のよく知らない土地に行ったので勝手がわからなかったことなどである。場所選定についてはもっと実行委員会の方から注意があってもよかったと思うし、時間的な余裕もほしかった。広島から京都まででは日本的な感覚から言うと、小旅行でもないと思う。汽車を使うなら尚更、時間の都合もあるし乗車時間の長さも結構あるからだ。

一泊2日でも私のグループの人達は皆、楽しもうとしてくれたし、それが一番心配だっ

第 3 部

エ ッ セ イ 集

Japanese Language Circle

嶋 田 晶 子

会議が始まって間もなく、河口湖で、突然臨時の全体ミーティングが招集された。アメリカ側と日本側は、別々に会合し、両国間に存在すると思われるコミュニケーション・ギャップについて、対応策を話し合った。アメリカ人は、アメリカ内で、日本人は、日本人内で、グループを作ってしまった、どうも Integrated していない。互いに相手のグループに入りにくい。というのが、提起された問題で、主な理由の一つに、日本側の語学力不足、アメリカ側のそれに対する認識不足が挙げられた。そして、食事時その他の informalな時間に、互いにもっと意識的、積極的に話すよう努力することという原点に立ちもどったような解決案が出された。

会議が始まったその日に、我々はひとつのサインを教えられた。手で送るサインで「もっとゆっくり話して下さい」ということを意味する。討議や講義の際に、早い英語についていけなかった場合、いちいち声に出さなくても、この伝統的なサインを送ればよいとのことであった。その時は、さりと簡単に納得した人が多かったろうが、河口湖のミーティングで、他国語で、一カ月を過ごす日本人にとって、そういう小さな心がけが、互

いのコミュニケーションをスムーズにするということが、新たに思い知らされ、その点、有意義であったと思う。異文化間のコミュニケーションは、言葉だけによって成り立つものではない。例えば、日本側に積極性が欠けていたということも言えるかもしれない。(ちなみに、全体研修や討議の時、“サイン”を率先して送ってくるのは、困っているはずの日本人よりもアメリカの方が、ずっと多かつた。)しかし、自国語と同じレベルで自分の意志を表現できないということが、ただその意識だけでも、コミュニケーション・コンプレックスにつながってしまうことは、よくあることで、英語をしゃべる時と日本語をしゃべる時では、人格が違つるように思われたりするものは、その為であろう。しかし、アメリカ人として、習いたての日本語で話そうとする時は、同じ心境なのである。たまたまそういう機会が少ないだけで。

Japanese Language Circle は、文化交流プログラムの一貫として設けられた。日本で一カ月を過ごすアメリカ人に、少しでも日本語を知ってもらおう。あるいは、日本語を既に学んできたアメリカ人には、それを使う機会を作つてあげたい。という目的とともに、もう一つ隠れた大きな目的は、他国語で、日常生活を送ることになる日本人が、アメリカ人に日本語を教えることによって、双方、言葉の重みを知り、互いの苦勞を知り、又、フラス

トレーションを解消?! することであつた。その為数人の先生が教授するというパターンではなく、なるべく多くの方に参加していただいて、1対1で教えようということになった。準備としては、教える際に参考となるよう、テキストを1冊、作った。日本に来たいという意志をもつて来た以上、アメリカ人参加者は、多かれ少なかれ、日本文化や日本語に興味をもつていたり、勉強したりしているが、その程度に差がある為、ごく基本的な語句から beginners 用と advanced の会話と、一冊の本に、なるべく幅広く盛り込むように努力した。実際、当日は、日本語の新聞を読みたいとか、敬語の会話の練習をしたいとかいう、かなり高度な希望を出す生徒もいて、先生方には、臨機応変に、対処してもらつたが、基本的には、会話中心ということで開いた。習字をとり入れたのは、brush writingが、外国人にとっては、かなり魅力があると聞いていたからであり、人気があつたからである。

当日は、日本人もアメリカ人も、ずいぶんたくさん集まってくれた。(約80人)日本語を学んできた年数に応じて、グループにわかれて、テキストを使つても、使わなくても相手の希望に応じて教えてあげて下さいという、すぐに和気あいあいとした雰囲気になり、それぞれ楽しみながら、教えたり教えられたりしているようであつた。日本語を教えるだけでなく、アメリカのスラングを教えてもらつたり、言葉からお互いの文化習慣や personalな話にまで発展したり、互いにあまりよく知らず、共通点があるかないかも、わからない者同志が、“日本語”という共通の話題を媒介として、コミュニケ

ーションを発展させていったところに、サークルの意義が、あつたと思う。言葉は通じなくても、ちよつとしたきつかけで、心が通じ合つて、コミュニケーションがうまくいくことがあるものである。

会議全体を通して、思いやりをもって英語をゆつくりしゃべってくれたり、言葉の意味を率先して説明してくれたアメリカ人参加者や、Japanese Language Circleに集まつて、日本語を教えてくれた日本人参加者に、謝意を述べたい。又、末筆ではあるが、AECながら、日本に滞在していた為、会議の多方面にわたつて、両国の橋わたしをして下さり、Japanese Language Circleにもたずさわってくれた、Yoko Yoshikawaに深い感謝を表わしたい。

「思い込んだら……」

津村好英

JASCが終つて、ほぼ3週間が過ぎた。最近よく「学生会議どうやつた?」と友達から聞かれる。でも、ことばでこの一ヶ月に経験したさまざまなこと一出会い、刺激、発見、別れ etc.-を簡素明瞭に述べることは、とてもむずかしい。自分の内には、以前にはなかつた何かが存在していることは確かだが。

僕は、日本から一度も出たことはないし、外国人と接する機会も全くなかつた。大学に入つて、初めて英語の外国人教師と話をした程度だつた。アメリカを例にとってみても、入ってくる情報はテレビ、本、雑誌、新聞などによるものに限られている。それは、生の情報ではなく、言わばマスコミというフィル

ターを通したものであつた。だから、J A S C に参加した一つの目的は、同世代のアメリカ人と生活することにより、彼らは日本人の学生と比較しどこが違うのか、又どこが似ているのかを知ることにあつた。しかし、このような目的設定の仕方自身に少々問題があることに気がついた。

広島でアメリカ人と一語にホームステイをした。その学生は日本に留学したこともあり、日本語もかなり話すことができた。宮島でのパーベキューパーティに参加して、一日思う存分楽しんだ。浜辺でビールを飲みながら雑談をした。アルコールが入つたせいとか、ホームステイで一緒だつたアメリカ人は、思つていたことを率直に話してくれた。homestay familyの方は皆いい人ばかりで、不満はないのだが、一つ気にかつたことがあつた、と彼は言った。彼によると、毎回食事のとき、彼以外の人の前には、はしが置いてあり、彼の前には決まってフォークが置いてあつた。

僕は全然そのことに気がつかなくつた。(食べることに集中していたせいだろうか?) 大した問題ではないように思われるかもしれないが、彼が真剣な顔をして訴えるのを聞いていると、単に、はしかフォークの問題だと言つて済ませられない気がしてきた。ホストファミリーの方は気を使つてフォークを出したのであつて別に深い意味はないと説明したが、彼の勢いに圧倒されて、言いたいことが英語で表現できずに、非常にもどかしい思いをした。彼は次のようにまくし立てた。「日本人はアメリカ人というのは、はしを使えないものだとか決めてかかつている。すべてがその調子である。ことばをとつてみても、アメリカ人というよりも外国人—は日本語を話すこ

とができないと思ひ込みをしている。その裏には、日本や日本人はユニークである、他の国と違うんだというある種の優越感がある。通りを歩いていても何か変わった生物であるかのように好奇の目で見られる。」

要するに、彼の主張は、外国人をよそ者、あるいはお客様扱いにするのではなく、一人の人間として自然に接してくれということではないだろう。

日本人が気を使つてしたことが却つてアメリカ人、特に日本のことをよく知っている、あるいはもつと知りたいと思う学生に不信感や不満を与えるとは、何と皮肉なことだろうか。こういうちよつとした行き違ひが、大きな誤解に発展していくのではないだろうか。

実は、僕自身も多かれ、少なかれアメリカ人はこうであろうと思ひ込みをしていた。アメリカ人は率直で、議論好きで、又夜通しディスコで踊つていても次の朝、ケロッとして起きてくるぐらいタフであるというイメージを抱いていた。事実は必ずしもそうではなかつた。皆それぞれユニークな個性を持つている。当たり前なことだと言われればそれまでだが、僕にとつては新しい発見であつた。

人に対してだけでなく、アメリカという社会全体についての「一般化」に関しても同様のことが言える。「アメリカ社会は～である」とか「アメリカ人はこの問題に対してこのように思つているのか」ということを、あるアメリカ人の発言から設定してしまうことは危険である。同じ分科会のアメリカ人が忠告してくれた。「一人のアメリカ人の言つたことを『アメリカ人』全体を代表して (represent) いるものと思わないように。」アメリカを理解する鍵はその多様性にあると

悟つた。

JASCを通して、単にある事を知っているということと、その知識を経験によつて確かめて自らの行動に反映させることは全く違つたと痛感した。京都の禅文化研究所で座禅を組んだとき次のように言われた。「砂糖の甘さは言葉では表わせない。したがつて人に伝えることもできない。いくら本を読んでみても、わからない。自分の舌でなめてみて初めてその味がわかるのである。」

あるお話

船橋里美

これは割と最近の童話なので、もちろんお話は例のように「むかしむかし…」で始まるわけではありません。この主人公の女の子はもう大学生なのですが、みんなから怠慢の代名詞のように思われている子でした。でもその子はそんなことを少しも気にする風でもなく、「尊敬する人は？」と聞かれれば、めんどくさそうに「ものぐさ太郎」と答えて真昼間であろうが、一日のうちで世の中の人が重要だと思つている時間帯でもおかまいなく寝て暮らしていました。ですからその子の友達もそこまで徹底して怠慢になれるその子のことを尊敬すらしてしまいました。

さて、その子は残暑のまだまだきびしい9月の初めだというのに、学生寮の部屋のベッドの上でやはりいつもと同じようにゴロゴロと寝ころがっていました。ああ向けに寝ころがっている顔の上には、これまた夏の暑さと水不足のためにへたりきつたわけのわからない観葉植物がダラリとたれ下がっていました。

生気のない葉が顔の表面に触れているというのに相変わらずその子はそれをどけるでもなく、ビクリとしません。そこへ友達がやつて来ました。そして何もしようとしないその子のためにアイスコーヒーでも入れてあげようとしていたのですが、むだなことと知りながらもその友達は、その子に「その葉ぐらい顔の上から取つたら？」と言いました。するといつもならめんどくさくつてその手の忠告には聞く耳を持たないのに、めずらしく何か答えました。「今、ちょっと考え事している」と言うのです。友達はまさにこれぞ青天の霹靂だと思いました。いつたいその子は何を考えているのでしょうか。その子は、この夏に、なんとかドッコイショと腰を上げて旅行に1ヶ月ほど出かけたのでした。そうです。その子はどうやらその旅行の事を思い出して何か考え事をしていたようです。その子は「その旅行で何を得たか？」と学校の先生に、もつともらしく聞かれても、えらそうな顔で「はい、〇〇ということ学びました」なんてとても論理的には述べられないでしょうし、第一めんどくさいので、相変わらず「さあね…」と答えるだけかもしれません。それでも心の中でトロトロとではあります。何か感じていました。その子は、「もし…」と心の中でそつとつぶやきました。「もし旅行へ行つていなかつたら、毎日やつぱりゴロゴロとベッドの上でいたんだろうなあ…」などと、別にたいした意味もなさそうなことを考えていました。でも、この「もし」ということを考えてみることはほどおもしろくて、わけのわからないことはないのかもしれない。「偶然」という言葉でこの「もし」をかたづけてしまふにしてもやはり不思議なこと

です。もし、彼女がその旅行に参加していなかつたら、こんな風に少くともいろいろなことについて考えることはなかつたでしょうから。

その子の旅行は90人ほどの団体旅行だったのですが、その90人以外にもいろいろな人達と出会いました。彼らは、彼女にとっていくらベッドの上でゴロリと寝返りをうつても会える機会のない人達でした。それが何かの偶然で一つの場所と一定の時間帯とを一緒に過ごすことになつたのです。そこではみんなお互いを理解しようと努力しました。

えんえんと続く日常生活でなら、みんな例えば、自分と同じような人達を選んで生活せざるをえなくなることが多いのですが、このような旅行で、偶然に集まつた人々と一定の空間をある時間だけ分かち合うということは、なまけものの子にとつてもやはり意味のあることでした。今までベッドの上の天井しかじつくり見たことのなかつたその子のことで、世の中の、ちゃんと朝になればベッドから起き出して動き出す人々と話をするのもおもしろかつたのです。未知のものは、時として、がっかりさせるものだったり、イライラさせるものであつたり、当てがはずれるようなものであつたりしますが、それでもその間にはたくさん本当に興味深いおもしろいことも断続的に起こるものです。その子はそういう風にして起こる断続的な変化を楽しんでいました。その子は思いました。「ベッドの外の世界って複雑そうだなあ」と。

世の中には、言葉や音の洪水とか、量やスピードの競い合いがあり、たとえ、どんなに

ぶつそうなものでも持つていないよりは、持つている方が安心という(一種の所有欲なのかもしれませんが)考えもあるんだということも感じました。そうして、そういったものに一生懸命に抵抗しようとしている人達のいることも感じました。

「ふうん…」とその子は、つぶやきました。そうして、ベッドから起き上がると、いつでも安息のできるお気に入りの枕をかかえて、部屋を出て行きました。そして、芝生の上にもたもや、寝ころがりました。どうやら、例のベッドの上の天井よりははずっと広い空を見ているようでした。

Vice Report On JASC

土 川 元

第一章 日米学生会議

日米学生会議、思えばとても重々しいタイトルである。そこに外務省、文部省の後援、OBに宮沢喜一氏などとあれば一般の人が想像するのは次代の政権の中枢部を担う連中が朝から晩まで、数年かけた論理を用いて、議論を戦わせている風景である。実質がまったく異なるものであるのは事実であるが…。

私は何もそのような姿が望ましいと思つてゐるわけではない。そんな会議など若手の官僚連中同志がやればよいことである。しかし社会的なサポートを受けているということは、それぞれが社会的利益を念頭において、社会の期待にしっかりと答えていかなければならないことに他ならない。これが、本稿の中心講義題である。

第二章 その社会的意義

戦前、日米学生会議が創始された頃、その社会的意義（すなわち日本のためになること）は明らかだった。両国の政府間の話し合いは対決色を帯び、相手を理解するなどという空気は非常に希薄であつたに違いない。その時代において学生に何が出来るか、何か出来るのではないかという問題意識が生まれる。

立場を超えた率直な話し合いを通じて両国間の円滑な関係維持に少しでも寄与すべく日米学生会議が生まれたのである。戦後、第25回において会議の大改革が漸行された時も基本的な問題意識はそこにあつた。この時は、学生がその目的を達成するためには社会的バックアップ、すなわち資金の援助が必要であり、社会も見事にそれに応えてくれた。

以後、日米学生会議は10年の歴史をきざみ、第36回会議50周年記念を目前にひかえて現在がある。さて、その社会的意義はどうなつたであろう。一言で言つてそれは低下し続けていると言わざるをえない。

その理由は、まず第一に日米関係である。日米経済摩擦、防衛問題などがやたらとスポットを浴びているが、歴史的に見れば、日米関係は良好であり、技術的論点を残すのみとなつている。そのせいか、会議においても最近では世界的な問題を多く取り上げるようになってきており、それらの問題は所詮日米の枠の中では解決し切れない問題ばかりである。

第二には両国間の交流の質・量、両面における増大、高度化とコミュニケーションチャンネルの構造化である。両国間の相互依存関係の深化に伴い、両国間の交流は留学生など様々なレベルにおいて様々な方法によりところみられ、その絶対数は数えきれない程多

くの人々が何らかの形でアメリカを体験している。また、両国間に問題がおこつた場合のコミュニケーションチャンネルは整然と整備されており、学生レベルの交流がインパクトを与えたくとも与えられない状態にある。

このような時代において日米学生会議自体、その存在意義を模索し、技術的な改革を数多くこころみてきたものの、改革案が技術的であつたゆえ、実質的にはささいな変化しかおこつておらず、その社会的意義は毎年低下していると言わざるをえない。

日米学生会議の特徴をあえてあげれば3点ある。ひとつには、それが伝統ある会議であること。第二には、それが学生による学生のための会議であること。第三には、それがかなり高いレベルの学生を集めていたことである。

しかし、第一点はさておき、第二点に関しては会議が財団法人の一事業であるという事実の前にはかけ声でしかなく、第三点に関しては社会的意義の低下とともに、低落傾向にあると言えるし、事実応募者は毎年減少傾向にある。

このような環境の変化に対応しきれなかつた日米学生会議の現実を見るに、その社会的価値がはたしてあるのだろうかという疑問がおこつて来てもおかしくないはずである。私自身何もJASCにまつたく価値がないと言つているわけではない。現在のJASCがその伝統的姿勢と賛助体制に比して明らかに見劣りするものであると言うことである。

伝統的姿勢とは何かと言へば、それは日本のために学生には何が出来るかという問題意識のことである。日米学生会議の本質は学生という立場において、その特殊性を用いて、

社会的に意義あるプロジェクトを自らのイニシエティブにより実現していく気概であり、これをもとに日米学生会議が生まれたのであり、社会的価値が減少傾向にあるものをそのままの形で維持していくことがそれではない。また参加者はそれぞれ自らの行動あるいは自らが行うとしているプログラムが、社会的にどのような価値を持つかを常に念頭に置き、自らの楽しさの追求を考えるべきではない。

賛助体制に関しては社会的意義の低下とそれに拍車をかける形での高度成長の終焉によって徐々に弱体化している。社会的意義が低下したものに1600万円もの投資をすること自体おかしなわけではあるが、我々の戦前OBが第一線にいる現在においてはなんとか体制は維持されている。しかし、彼等が第一線にいるのもあと数年であり、それは日米学生会議の財政面からの破局へとつながる。

第三章 展 望

以上、主として外部環境との関係において日米学生会議について論じてみたわけであるが、これからのJASCにたずさわる人々に言えることは、積極的に冒険をしろということである。基本的には恐いものや、既得権益などは存在しないはずである。私自身冒険をしなかつたことを非常に後悔している。冒険をして意外な効果を生む土壌はあるし、頑張っていたきたい。これこそ社会から期待されていることである。

もう一つは謙虚な姿勢である。学生に権限は一切与えられていない。この姿勢こそ学生の本旨である。

いずれにしろ、50周年をむかえようとしている現在、先輩の方々には人間として素晴らしい方々が非常に多い。また、それらの先

輩の方々が語る会議の思い出と、それが自分の人生にどれだけのインパクトを与えたかという一種の物語は会議の重要性を喚起する。

これから社会に出ていく私も一人のOBとして素晴らしい人間になるよう努力したいと思う。これからの日米学生会議の繁栄と、興味深い後輩達が数多く出現することを願って筆を置きたい。

おじちゃん物語

杉 本 耕 一

今は、万事がうまく運んで、満足感に浸り切っている。この夏休みの体験は、私にしてみれば伸るか反るかの大バクチであつた。

JASCの閉会後10日目に、卒業合否判定の対象となる全科目に互る第一回目の総合試験があつたからだ。結果は、よくも10日間の勉強で、と思つた程のできで、卒業への第一関門突破の確信を強く抱いているこの頃である。正直言つて、あれ程点が取れると思つていなかったから、尚更嬉しい。

結果オーライだが、苦しい話は四月初旬に逆上る。以前の参加者で親しい友人に、強く参加を勧められていた。が、最早私も専門の仕上げをしなければならぬ学年、また特に私の大学には、驚異的勉強大好き少年少女が多数集まつていて、第一学期の院外実習から戻る七月からは勉強会なるものを気の合う連中同志作つて、一日数時間から多いところで8時間一緒に勉強する、死の(快樂の?)夏休みが始まるのが毎年の恒例であつた。かく言う私も、勉強大好き少年の一人で、グループのイニシエティブをとつてやろうと心に決

していた。勉強会以外にも、個人で勉強するのであるから、この期間専門の勉強から離脱することは危険極まりないことであつた。

確かに、低学年の頃は、英語に対しても米国に対しても、人一倍関心が強かつたのだが、学年が進み病院実習等で忙しくなるにつれ、また、米国の医療の実情、つまり外国人医師を締め出そうとしている現状、そして、日本の医療水準も決して劣るものではないことを知るにつれて、若い頃の夢も何時しか消えてしまつていた。自分の気持ちの中では、JASCに参加するわけにはいかないと思つていた。それでも、折角誘つてくれているのだし、受けるだけ受けてみるかというつもりで受験した。つまり、本人は合格するはずはないという自信と、合格してもらつては困るという贅沢な気持ちを持つていた。よく冗談で言つたが、受からないと思つたから受験したのだ。実際、第一次試験の英語のhearingも、第二次の面接も、的を得ず要領の悪いものだつた。が、遂に受かつてしまつたのだ。このことを水戸国立病院の手術室で、看護婦さんを通して耳打ちされ、「さあ困つた！」確認の電話を当方から担当者に入れたが、こちらはどうも煮え切らない。「落としてくれるんじゃないか？これですつきり、JASCは縁がなかつたと思つて、夏休みは籠りつ切りで暗く（本人は喜々として）勉強に専念しようと思つていたのに。」一人唖く。

五月初旬の全体合宿以来暫くの間、悩んでいた。日本中でこんなに大きなプレッシャーを抱えているのは自分一人だ、と思つてはやり切れなくなつたこともあつた。大袈裟に聞こえるかもしれないが、我大学我学部最終学年は、猫も杓子も目の色をかえて勉強する

ので、秋から勉強と安閑としてられない外から見ると実に異様な雰囲気があるからだ。教授の先生方には、（他人事だと思つて？）

「筑波を代表して頑張つて来なさい」と言われるし、同級生達からは、「流石、よくやるね」とこの大事な時期にとでも言わんばかりに、冷やかされるし、一方、時間的空間的制約がある為、JASCの友達と頻繁に会えて、会議の組織化に積極的に参画できるわけでもないし。

ある時、JASCに対する目標を立てた。

①自分のtableだけは、積極的に参画し、成功させる。②インフォーマルな時間、場所で積極的に活躍し、友人を増やす。③せめて、自分の専門分野で皆の役に立つ。自分の出来る範囲をまず認識し、守備範囲を決めた。それから、専門の勉強もそれ程疎かにすることなくpre JASCを過ごせたとする。この為、全体研修等がかなり、皆のお世話にならなければならなかつたことに対して、心より感謝します。

果たしてJASCでは？①に関しては、各々の担当者が、Bioethicsに関する興味深いcontroversial problemsを提起し、総じて綿密にオーガナイズされインテグレートされたプログラムであつたと自負する。また、メンバー一人一人が、討論中非常に聞き上手、話し上手であつた（私は唯一の例外であつたが）ことは、成功感を高めるものであつた。②に関しては、これぞ本会議に参加した価値があつたと言えるものだ。日本代表者側の最年長ということもあり、会議が始まつて間もなくから「おじちゃん、おじちゃん」と可愛がられた。女の子から言われるのだから悪い気はしない。米国の女の子から早口の

英語でまくし立てられると、「オジチャン、ワカラナイ！」と言つて、ゆつくり説明し直してもらつたりもした。また、こちらが英語がうまくないのをいいことに、nonverbal talksも楽しませてもらった。心を通じれば、言葉なんて要らないもの。discoでも、partyでも、festivalでも、そして、dateでも。みんな、夜のイベントだけど、その中で意気投合した友達と、最後までよく付き合っていた。結局mutual understandingの極限は、nonverbal communicationに到達するんだと思うな、実際。そして、③に関しては、みなさんよく怪我したり、病氣したりしましたね。勿論、大怪我とか、病院に担ぎ込まれたとかいうのがなくてよかつた。どうでしたか？これだけは、一生懸命やつたつもりですが。

終わつてみて、①～③の目標が自分なりに到達でき、大成功したという実感が得られ、参加して本当によかつたと思う。最初の全体合宿以来、pre JASC, JASC, post JASCと我ながらよく堪えたし。丸4ヶ月間、これまでに経験したことのない程、濃縮した日々を送れた。私に会議を勧めてくれた友人、参加を許してくれた人、そして90人の仲間達、私の我儘と自由奔放を許してくれてどうも有難とう。とても楽しかつた。post JASCの10日間の缶詰勉強の末、卒業試験をどうにか乗り越えた今だから、改めて言えるのだろう。また、すぐに始まる9月中旬から来年2月まで、そして国家試験のある4月と、延々と続く試験の嵐を乗り切らなくては、全国の医学部最終学年生の中で、最も密度の濃い1年を送れることに感謝して。

また、会える日を。 昭和58年9月

◁America Night▷

最上裕子

“Let's enjoy America Night!”

の声と共に、バババッとロックの音楽が鳴り響く。これ以上伸び切ることができないと思わせる程豪快に、10人が舞台の上を踊りまくる。「ああ、アメリカやなあ」と、ロックぐらい、Discoぐらい知っているのに、改めてつぶやいてしまった。それにしても薄汚れたジーンズ、Tシャツ、バンドナをまといつて踊る姿は（やつぱり、ひがみなんだけれど）カッコイイ。時々ステップを間違える某delegateも失敗なんか恐くない！！と言わんばかりで、Americaはエネルギーに満ちた国、という印象を与えるのだ。

一度もアメリカへ行つたことのない私にはアメリカのPubの一風景、そしてフラタニティーという、一種の運命共同体のようなクラブの入会シーンはとても興味深かつた。もちろん、ジョークいっぱい（半分ほどしかわからなかつたが）の上、誇張した気味もあつたであろうが、入会条件が大部屋の清掃とか、一般大衆の前でズボンを脱いで歌う等、かなりどぎついのも本当らしい。しかし、一度入会すると、非常な仲間意識が生まれ、家をさえ共有して共にenjoyするという。何か日本の体育会のクラブを思わせ、アメリカ人も個人主義とかいうけれどやつぱり団結を求めているのかしら、と感じた。もつとも、後で聞くとフラタニティーに属する学生は少なく、ほとんどの学生は寮のpartyで十分楽しんでいるとのこと。根つからのparty好きが

交際範囲を広め、お見合いの必要なか最初からなくしているでしょうね。

インディアンの血を引くバトリシアたちによるインディアンの踊りに参加して、しばし酋長の娘になり、ハワイアンの踊りで常夏の気分を味わう。アメリカからはるばる持ってきたという、エレキギターやサクソフーン・アコースティックギター、そして即席のドラムによるSwingの演奏。本当にアメリカにいるような気持ちになつてしまつた。

その他、Japanese Language Circleのお返しかどうか、American Slungの教室あり、ひょうきんな相撲あり、また日本のTea Ceremony（アメリカ人Karlのお手前には日本人一同ほれほれ。と同時に茶道を知らない自分が情けなくなる）とアメリカのcoffee makingの比較、などのユーモアたっぷりの小劇をおなかをかかえて笑い、楽しんだ。よくもこれだけ一人一人が特技を持ち、たつた2、3日の練習でこのすばらしい3時間を作り上げたものだ、改めてアメリカ人の創造力の豊かさに感心した。

その後、浜辺でのパーティ。食べものも典型的なアメリカン。皆さつきの小劇の話をつかひに、開会第6日の夜、さらに交流を深めていった。

< Japan Night >

一生懸命準備し、練習していた関西側の小劇。予想していなかつたところで爆笑が起つたり、予定の笑いが全くなかつたり…。特に、これをつかひにみんなのアイドルとなつたタケオの全く意味のない裸の飛行(?)が、アドリブにもかかわらずバカうけ!調子にのつて(もらつて)パンツ1枚にまでなつ

たが、これがJAPAN NIGHTをくれたムードにするのに役立つた。

東京側のメンバーによる空手、日本舞踊、剣道の実演。ほとんどのアメリカ人にとって本当に日本の武道、舞踊を見るのは初めてだつたようだ。空手の、木に狙いを定める姿を緊張して見守る。パーン!という快い木の割れる音と共に“イエー!!”という歓声と拍手の興奮。フラッシュが光る。剣道、日本舞踊もプロ顔負けの実演で、その真剣さの後にユーモアを加えたりしてアメリカ人を楽しませた。その他、多くの日本文化を紹介するスキットがいくつかあつたが、後でアメリカ人に質問を受けたのが日本の嫁いびりをテーマとしたものである。アメリカではやはり、夫と妻の母親の仲が日本の嫁姑の仲に相当するらしく、これをきつかひに日米の親類関係について話がはずんだのだ。

スキットの中には、日本人の文の子が後で意味を聞いて赤面するような内容のものもあつたのだが、とにかくあつという間に過ぎた3時間であつた。最後に、“踊る阿呆”と、それこそ全員があほうになつて阿波踊り。暑さなんか忘れて踊りまくっているみんなの“あほ”な顔を見ていると(もちろん私もその1人なのだが)妙に嬉しくなり、「ああ、人類はみんな兄弟だ!」と思つたのだ。

America Night, Japan Nightは両方共本当に成功したと思う。またプログラムの最初に組み込んだことも、Mutual Understandingに大いに役立つた。その後で名前を覚える時も、America Nightで〇〇やつた人、という具合に強い印象を持てたために、ずい分楽になつたのだ。

この二晩のことは今でも私の脳裏に鮮かによみがえる。おそらく私は一生、この時頃に焼きついたフィルムを、取り出しては再現し、ながめ、追憶にふけることだろう。

日米学生会議を考えよう とする人のために

西 田 尚 弘

昨年春第34回日米学生会議に応募しようと考えた私は、とにかく会議のことをよく理解するために32回と33回の和文報告書を送ってもらった。2冊の報告書には充実した会議の様子が生き生きと描かれていたが、その中でも32回報告書にその会議の副実行委員長であった関口和一氏（一橋大学卒、日経新聞記者）が書かれた同名のエッセイに強く心が打たれた。それは、これから応募しようとする人々に実に日米学生会議を総括的に、しかも厳しい目から批評したものであった。事実、私をはじめこのエッセイに感化され応募を決心した学生も多い。

この関口氏のエッセイが、今後の会議に応募をする人々に読まれることが少なくなっていくのは非常に残念なことである。そこで、34回、35回の会議の経験に基づいて、古くなった部分に新陳代謝をさせ、ここに改訂編を書いていきたい。

1. 歴 史

日米学生会議の歴史を紐解くとき、その流れが大きく4つの部分に分けられることを知る。それは、戦前の①第1～7回、戦後の②第8～15回、③第16～24回、④第25～35回の4つである。第2次大戦をはさん

だ世界情勢の変化と共に日米関係は紆余曲折を経、日米学生会議の歴史もその各々の時代の要請を受け、その姿を変容してきた。しかし、その半世紀の歴史を通して常に日米学生会議を支えてきたものは、若い学生のエネルギーな行動力であり、日米学生会議の根本理念と言われる「学生の、学生による、学生のための会議」という会議の姿は、時代の波を潜り抜けた今も変わらぬものを呈しているようである。

i. 第1～第7回（1934～1940）創設期

日米学生会議の創設はあまりにも有名な話になり、最近では神話化の方向にあるようだが、実際、当時の学生の行動としては大それたものであったようだ。「1934年（昭和9年）に、日米学生会議を開催しようなどということは、奇想天外な発想であったといつてよい。それはあたかも、イスラエルの学生とエジプトの学生が、今から20年前に話し合おうと言い出したのに等しい。」（故松本享氏、第7回参加）

会議は当時青山学院の学生であった中山公威氏の発案によるものであり、「日米の友好関係なしには太平洋の平和はあり得ず、太平洋の平和なしには世界の平和もあり得ぬ」という信念のもとに、1931年の満州事変以後悪化しつつあった米国の対日感情、日米両国間の関係を好転させることを目的とした。すなわち、両国の学生が自由な立場で卒直に意見を交換し、相互理解を深めることが、両国の友好関係に寄与するために、学生として可能な最良の方法だと考えたのである。

計画の要は、米国から50名の学生を招き、東京で会議を開いた後、満州の視察旅行

に向かうというもので、各大学の有志学生は会議の主催団体たる日本英語学生協会（国際学生協会：ISAの前身）を組織し、基金の募集を行うかたわら、中山氏、板橋並治氏（現国際教育振興会理事長）を含む、青山・明治・早稲田・慶応4大学の代表4名を、学生招請の目的で米国に派遣した。1934年春のことである。「日米学生親善使節団」と名付けられた一行は、約2ヶ月間米国各地を訪問した後、70数名の米国人学生、20数名の教授陣を引き連れ日本に戻ってきた。板橋氏は当時を振り返り、「横浜を出航して日本列島が見えなくなった頃、急に心細くなり、『若し50名連れて帰らなかつたら、腹切りものだ』と話した程である」と述べている。

日本人学生を支え約200名の日米の学生によつて第1回会議は、1934年夏、青山学院大学で開かれた。会議、満州視察旅行を通じ、日本人学生の創意、精神、努力、また会議の意義を深く理解した米国人学生は、日本側の努力に報いようと、第2回会議を翌年夏ポートランド市のリード・カレッジで行うことを約束し第1回会議の幕は閉じた。以来、会議は日米両国において交互に開かれ、日米関係のいよいよ悪化する1940年（昭和15年）夏の第7回会議まで続けられたのである。

戦前の言論断在其中でも、会議は完全な言論の自由の下に、学生同志が率直に意見を闘わせ得る環境を保つことに努め、日本軍部が着々と日米戦争への準備を進めていた第7回

の津田塾大学における会議においてすら政府当局の介入を拒否した。「会議場へは連日のように陸軍の私服の憲兵が訪ねてくるようになった。当時としては、紳士的な態度であったが『会議場へ入れてくれ』と強く要求され、責任者である私はその対応に手こずった。われわれはしかし、絶対こうした『他人』を会場に入れるわけにはいかなかった。『この会議は学生同志が率直に話し合う性質のもの。その中に学生以外の人が入ることは、たとえ司直といえども認められない』と私の答えはいつも決まっていた。正直いつ一介の学生がこうした人々を相手にしてその要求を拒否するのは、当時としては相当の覚悟であった。」（山室勇臣氏、第7回実行委員長、前三菱銀行副頭取、現ダイヤモンドリース会長）正に、「学生の、学生による、学生のための会議」という方針は貫き通されたのである。

このように戦前の第1～7回の会議は、大戦が刻々と近づく中で、日米関係の改善、世界平和を真剣に見い出そうとする学生によつて行われたわけであり、日米学生会議の根本的理念が構築された時期であつたと言える。また、彼ら戦前OBが戦後の米国関係を基盤にした日本の発展の中で、現在に至るまで、行政、政界の各界での日米関係への貢献は計り知れないものがある。

ii. 第8～15回（1947～1954）再建期

日米学生会議の底に流れる、平和の希求、日本の発展を願う気持ちは、戦後の廃墟の中でも屈することはなく、その脈動はまた力強く甦つてきた。板橋並治氏、松岡洋子氏（第1回参加、評論家）らの呼びかけて、当時新

たにESSの連合会を作ろうとしていた住野喜正氏（「英文毎日」元主筆）らが中心に、第8回、戦後初めての日米学生会議の準備に取り掛ったのである。

住野氏らは、高松宮様の前で日米学生会議の意義を力強く訴え、学生会議名誉総裁就任の返答を即座にとりつけた。そして、宮様のお墨付きの紹介状を片手に、各企業に援助の要請に走り、GHQの教育委員長に面会して米国側と連絡をとり会議開催の許可を手にした。

こうして戦後の日米学生会議は、GHQの占領下のもとで、1947年（昭和22年）、明治大学に於いて第8回会議が開かれた。ここにおいても、国際社会に再起する日本の将来、新たな日米関係を真剣に見つめる学生の態度が新しい日米学生会議を支える大きな力になっていた。残念ながら米国人学生を本国から招喚することが難しかったため、占領軍の一員として終戦直後日本にやってくる学生あがりの若い兵隊や、戦前、戦中を通して日本で暮らしていた学生など、日本にいる米国人学生を対象に、会議はその後7年間日本において続けられた。そして米国側の希望から、第15回は1954年の夏、コーネル大学で開かれた。しかし、15名しか参加できなかったため、日本英語学生協会は、その名を日本国際学生協会（ISA）と改め、日米学生会議を発展的に解消して、以後日本で毎年夏、国際学生会議を開くことにした。こうして日米学生会議は再び中断やむなきに至ったのである。

iii. 第16～24回（1964～1972） 成長期

1963年、日米学生会議の創設30周年を期し、戦前の形で会議を復活しようという声が会議創設者の間に起こった。日本代表の経費負担軽減のため、米国側OBに協力を求めると、ポートランド市の有力者になっていたルー・デイ、ウィルヘルム氏らの応答があり、第16回会議が、1964年夏10年ぶりに、77名の日本代表を迎え、ウィルヘルム氏の母校、そして第2回会議開催のゆかりのリードカレッジで実現されることになった。こうして戦前の形である日米交互の会場による日米学生会議が再び発足したのである。

この時期は、戦前の参加者が活躍を始めたころであり、米国においてはOBが会議の経済的援助を恒常的に行ってくれるようになり、また日本側においても板橋氏を理事長とする財団法人国際教育振興会が、学生に対し、経済的援助、事務所の提供、また学生の要請に応じた助言という形で、バック・アップしてくれるようになった。戦前や終戦直後のような緊張感はなかつたにせよ、高度成長期を通して日本が世界の中で大きな地位を占めてゆく中で、また日米学生会議の存在も次第に社会に注目されるようになり、国際交流、民間外交の大きな一翼を担って日米学生会議は着々と成長してきたのである。この変化は、第25回においての大改革へとつながっていた。

iv. 第25～35回（1973～1983） 成熟期

1972年、高度成長期も終わり日本も見事に先進国に仲間入りし、戦争の傷痕もほとん

ど消え、外交においても安定的な時代を迎えると、日米学生会議もまた新しい転換期にさしかかった。つまり、国際交流が様々な分野で言及され、かつ実行に移され、平和という状態が国民の目に恒常的に映るようになったとき、日米学生会議はその存在価値を問われるに至つたのである。

第25回日米学生会議実行委員会は、自ら内部に外からの学生を招いてまで、その疑問に対し、日米学生会議の存在を揺ぎないものにしようとしたのである。具体的には、①会議期間を一ヶ月に延長し、会議の内容をいっそう充実させる。②質の向上したプログラムをマスコミを通して応報し、潜在的参加者を増やし、一方で実行委員自ら加わる厳選な選考を応募者に課し、会議の主体たる参加者の質の向上を計る。③同様に応募者を増やすために、基金の援助増大を通して参加者の自己負担を軽減し、同時にプログラムも充実させる。など画期的な大改革を学生の手で実行した。特に基金については、彼らは、当時国際教育振興会で会議の責任者となつていた伊部正信氏と共に、各企業、様々な団体、個人のところへ基金援助の要請に足を運んだのである。そのとき、日本の将来を考える学生の真剣な問題意識に動かされたのが、山室氏や、宮沢喜一氏（第6、7回参加者、前内閣官房長官）などの第一線で働く会議のOBであり、また関係者以外でも日本万国博覧会記念協会などは多額の援助を引き受けてくれることになつたのである。一方、米国においても同様の試みがみられ、特に第26回実行委員長のフリッキー氏によつて、国際教育交換協議会（CIEE）、ジャパン・ソサエティ、各企業、ライシャワー元駐日大使の支持を得るなど、

日米学生会議の基盤は、日米双方において強固なものに変わつてきたのである。

その中で、学生は先進国としての日本を認識し、今までの単なる日米関係に限られることなく、日米が世界のリーダーとして、世界平和・繁栄にどのように貢献できるかというところまで視点を広げるようになった。また同時に学生達は、会議における自分自身の姿勢を見極めるため、絶えず、日米学生会議発足の原点“student run”に立ち帰り、時勢に合わせて毎回の会議にユニークな趣向を打ち出そうとしている。つまり、総合テーマを頂点に、シンポジウム、フォーラム、分科会というピラミッド構造の中で、その内容に柔軟性を持たせ、新しい企画を多く取り込んできたのだ。その他、研修視察を増やして会議中心の会議から現場における共通体験の会議に性質を改めてみたり、多くの講演者を招いて議論に現実性を持たせたり、また日本側においては独自の報告書を発行して日米学生会議の存在を広く一般に知らしめたり、多くの試みが行われている。

また数年前、横山宗一氏（第3回参加、東京銀行相談役）を会長に、山室氏、苫米地俊博氏（第6回参加、三菱重工副会長）他4名の有志OBが発起人となつて、「国際教育振興会賛助会」が設立された。同様に米国においても、G・L・シュミット氏（元米国内務省）らのOBによつて、ジャパン・ソサエティに変わるJASC, Inc. が設立され、経済的な基盤は日米双方においてより一層強固なものになつてきたと言える。

このように第25～35回の日米学生会議は、組織的、内容的にも充実のときにあり、また会議の応募者も300名を越える年もで

るなど、日米学生会議は正に成熟のときであつたと言えよう。

V. 今後の会議の課題

成熟期の10年間に、日本は2度のオイル・ショックを切り抜け、経済力を基盤にさらに国際社会において大きな地位を占めるに至つた。一方、日米学生会議の組織形態は、10年間基本的には変化することなく、特にこの1、2年においては、社会のニーズに追いついていない部分もあるのではないかと、という疑問も投げかけられている。事実、5年前位を頂点に応募者も少しづつではあるが減少してきているという社会の反応にも、謙虚に目を向けなければならないだろう。

ここで、今後の会議に参加する学生に考えてほしいことは、まず第一に、日本が世界のリーダーとして大きな期待をされるようになった現在、日米学生会議は今までのように参加者を日米に限って、他の世界の国々に門戸を解放しなくて良いかどうかである。第二に現在の国際教育振興会、J A S C, I n c. 主催という形態の会議運営において、学生が主催団体の好意に甘えるようになってきた面ができてきている。今後、日米学生会議の原点である“Student run”を固守するために、学生はどのような自覚を持つて会議に望むべきか、である。最後に、現在の会議は日本側だけでも1500万円を越える各界からの賛助に支えられている。参加者はどのような形で、会議を通して、若しくは会議後にこの賛助を社会へ還元していくか、である。

このように世界の新しい歴史の展開の中で、日米学生会議も再び新しい飛躍を要請されているときなのかもしれない。

2. 意義

i. なぜ、今日米なのか

戦前の日米学生会議の発足を振り返ると、そこには学生でも明確に認識しえる学生会議への社会からの要請があつた。そして彼らは世界の平和、日米関係の改善のために捨て身で会議に臨んでいった。確かに彼らの努力は報いられることなく、両国は戦争に突入していったが、現在の日米関係、そして世界における両国の役割を見れば、彼らの努力は50年たった今、見事に花を咲かせていると言えよう。しかしそれを裏返すと、目的が達成された現在、なぜ日米学生会議が存在しなければならないかという疑問が投げかけられる。すなわち、政府、民間すべての分野で対米協調が当然になり、またそれを基盤に他の世界と交流している現在、明らかに戦前の会議の緊迫した学生会議の意義は失われたと言える。もちろん、今回の会議でも日米貿易摩擦などについては、有識者も加えて活発な討論が展開されたが、大半の討論は日米のみには限らない世界共通の問題や、国内問題についてであつた。従つて実行委員をはじめとする今後の会議の参加者は、日米学生会議の必要性、目的について十分な時間をかけて考えなければならないだろう。特に、その時に私達参加者は、一回の会議に3500万円に近い費用をかけ、またその約半分が社会からの賛助に支えられていることを明確に自覚しなければならない。この社会の期待に答え、この資金を将来にわたつて社会に還元していくことは、今後の日米学生会議の社会的存在のための条件と言える。これらの費用面のことも認識しながら、参加者一人一人が会議の意義を熟考し、それらを持ち寄り真剣に会議を造つてい

けば、おそらく日米学生会議は、その時代の要請に合った変容をとげ、社会におけるその存在価値を確固たるものとするであろう。

ii. "Student run"

日米学生会議のもう一つの大きな意義と考えられるのは、学生が主体になつて会議を企画、運営している点である。単にアメリカへ行つたり、アメリカの学生と交流を持つだけならば、観光会社が用意しているツアーやホーム・ステイに参加すればよい。または、各大学の交換留学プログラムに参加する方法もある。では、これらと"Student run"の日米学生会議とは本質的に何が異なるのだろうか。それは、参加学生の一人一人の姿勢の中に見つけられねばならない。"Student run"とは参加者が誰一人として受身ではなく、積極的に会議を造りあげていくことを意味する。こう書くことと楽しそうに聞かえるが、そこには、当然、意義あるものを、限られた予算の中で計画し、実行しなければならぬ責任が存在している。単に楽しいだけならば、学生が主催する観光旅行とかわらないのであり、会議の存在価値を自分達の手で証明していかなければならないのである。そこには、多くの地道な努力と、緻密な計画が必要とされている。たとえば、第35回の実行委員会が会議のために郵送した郵便物は優に1万を越している。従つて、新しく会議に参加しようとするんだが、自分が会議から何を得られるかだけでなく、自分が会議のために何ができるかを考えない限り、真の"Student run"は達成されないのである。しかし、自分達で造りあげてきた会議が幕を閉じるときの感動は、やはり経験した者にしかわからないものであり、ここに、日米学生会議が多く参加

者にとつて、学生時代最高の思い出として心に刻まれる理由がある。

iii. 教育機関として

戦前の日米学生会議のOBの社会への貢献を見ると、そこには明らかに日米学生会議の教育機関としての軌跡を確かめることができる。彼らは、会議において平和を希求しようとしたが、その夢はかなわなかつた。しかし、戦前の会議は教育機関として、戦後の日本に多くの真のエリートを送り込んだと言える。彼らはどのようにして真のエリートと成りえたのであろうか。それは、彼らが会議において自らの命までをかけ、私益を忘れ、自分達がどれだけ社会に貢献できるかを真剣に見つめた人々だからである。会議を通じて培われたこの姿勢は、彼らが社会に出た後も忘れられることなく、日本の再興への一つの大きな原動力になつたと言つても過言ではない。

ところで、現在の日米学生会議を反省してみると、はたして社会に真に貢献する人材を育成する教育機関となつているだろうか。確かに第25回の大改革は、それ以降の日米学生会議に多くの才能に恵まれた人々を引き込むことになつた。それゆえに"日米学生会議のエリート集団化"ということも言われるようになった。それは単にエリートになる可能性の高い人間が多くいるということだけで、会議が日本を支えるような真のエリートを育成しているかどうかとは別問題である。事実、選考試験の難関を突破してきた参加者は、一夏の豊富な体験を得られる機会を、試験に合格したことへの当然の報酬として受けとめがちで、社会からより大きな期待をかけられ、それに答える責任を負つたことを忘れがちで

はないだろうか。それどころか、難関を突破した人間同志だけが顔を合わせるため、“自分達はエリート集団なのだ”という、変な気負いさえ感じられる。これでは真の国際教育機関とは言えないであろう。現状は、集まった人間のエリートとしての可能性に満足し、会議において、自分達こそ将来の社会を支えるリーダーになるために、絶え間ない向上を要請されている。という意識が余りないのではないか。

日米学生会議が国際教育の場として、話題性の高い機関になるためには、参加者が会議において直接社会に貢献しようと努力すると同時に、会議で得た経験をもとに、将来にわたって、それを個人ベースでも社会に還元していく姿勢を忘れてはならない。特に現在のように趣向の異なる分科会が会議の中心になり、参加者がそれぞれの得意とする分野を持つとき、社会への貢献はより様々な分野へと可能性を広げたとと言える。“教育”とは、社会が将来の社会の発展のためになすものとも言える。その意味では、日米学生会議も教育機関としての役割を、もう一度熟考してもよいのではないだろうか。

3. 日米学生会議アラカルト

i. 日米学生会議の魅力

日米学生会議がその幕を落とそうとするとき、どの参加者も一ヶ月の夢のような世界から、またもとの現実の世界に戻ることに気がつき溜息をつく。では、なぜ一ヶ月の会議は彼らにとつて現実を離れた世界になるのだろうか。90人による一ヶ月間の合宿という形態をとる会議の異様な環境は、多くの参加者を学校やクラブの活動では体験できないよ

うな様々な人間関係の中へ巻き込んでいく。日米の2国から、全く趣向の異なった分科会に興味を持つて学生が集まるため、思想、宗教、人種などすべての面でまったく異なる人間が会議では出会う。そこには、今まで触れたことのないような様々な価値観が渦巻き、参加者は常に、今まで持っていた自己の価値観を押し流されそうになる。そしてそのたびに自己を確認し、新しい identification が確立されていく。通常多くの参加者には、自分の他の参加者への output はほとんど意識されず、外から自分への input ばかりが目につく。よつて、まわりの人間に圧倒され、少し自分に対して劣等感を持ちながらも、そこで奮起し、自己の向上に全力を傾ける。この姿勢が、会議の他の参加者に対して大きな output になっているのだが、本人は自分の向上に夢中で気がつかないことが多い。このように、お互いが切磋琢磨されて、会議は現実を離れ、夢の世界に映るほど急速に盛り上がり充実したものになっていく。

同時に、このような価値観のぶつけ合いの中で生まれる友情は深い。全く価値観の違う人間同志だからこそ、素晴らしい相互啓発の連続なのである。だから、会議と、そして友との別れに直面し、現実の生活が見えてきたとき、誰もが溜息をつくのである。

ii. 日米学生会議と恋愛

日米学生会議を通して結ばれたカップルは意外に多い。特に日本側は数えればきりがなが、戦前では横山宗一夫妻などが有名である。アメリカ側にも、JASC, Inc. 会長のシュミット夫妻、フリッキー26回委員長夫妻などがおられる。これは、日米学生会議

が、最も活生度の高い年齢の参加者を対象としていることと、特に知的刺激を求め合つて集まつた人達が多く、価値観をぶつけ合つて生まれた愛情は深く心に浸透していくからであろう。会議中に、たとえ短期的であっても、お互いを啓発し合っているカップルは国内派、国際派を合わせると毎回2ケタを切ることはまずない。特に日本人同志のカップルの場合は、会議後もお互いに啓発を続け、ゴールインするケースが多い。ここに、会議が“日米お見合会議”と呼ばれる所以があろう。

実際、私自身二回の会議を通して多くの事を、日米学生会議の女性から学んだ。彼女らは、決して女性としての愛嬌を忘れることなく、同時に強い個性を持って自己主張していく、才能に恵まれた進歩的な女性である。従つて、一緒に何時間話をしていても、話すほど人間としての魅力を感じさせる女性がほとんどである。また最近では、34回の米側委員長は女性であり、今回初めて35回において日本側でも女性の委員長が誕生した。彼女らは、リーダーシップにおいても、素晴らしいものを見せてくれた。

iii. 日本の会議とアメリカの会議

残念なことには、どちらの国においても、相手国で開催される会議の方が人気が高い。これは、安い費用で海外に行けるという付随的魅力があるからだ、応募する人は、もう一度両国における会議の違いを考えてもらいたい。日本人の立場で述べると、アメリカにおける会議は、実際に相手の国を目で見るという点で、よりアメリカという国を知り、より啓発される。また、米国の政界、財界のトップ、そして一般市民とも直接話ができるので、

努力によつては、微力ながらも日本の代表として意見を交換し、外交の一翼を担うこともできる。しかしプログラムはほとんどアメリカ側で準備されるため、どうしてもお客様のになることが多く、また気持も観光の方に向いてしまうことが多い。一方、日本の会議は、一見おもしろ味がないように見えるが、そこには、“創造”という素晴らしい魅力がある。自分達で汗を流して計画した会議が実現していくときの喜びは計り知れない。このように日米の会議では、主催国側としてアメリカ側を迎え、自分達の手造りの会議を行うことができる。このように、日・米の会議には、それぞれの特色があり、どちらも異なつた魅力を持っているが、日米学生会議を本当を知るためには、実行委員になつて両方とも参加することが最高の方法である。

iv. 日米学生会議と実行委員

実行委員とは前の会議の選挙で選ばれ、一年間次の会議のために準備をする人である。決して一般参加者より能力的に優れているわけでも、人間的に偉いわけでもない。しかし、やはり参加者から尊敬され、リーダーとして認められている。これは一年間、単純な事務処理から、社会的責任のある仕事に至るまで、よく犠牲的にやつてきたことへの自然な結果である。仕事の内容は決して楽しいものばかりでなく、大半はうんざりするような細かい事務処理である。しかし、一年たつと、そんな忙しい毎日が、彼らにとつての生きがいであり、生活そのものになっている。特に、自分達の創つた会議が幕を閉じるとき、充実感と虚脱感は同時に頂点に達し、彼らは生きる指針を失い、生活のあまりの急変に当惑す

る。その意味では大変不幸である。しかし、
 本当の日米学生会議を経験するためには、是非
 実行委員をやってみるべきである。実行委員
 を経験して初めて“Student run”の
 難かしさと意義を理解できるからである。

最後に、故松本享氏が寄稿して下さった言
 葉をもつて終りにしたい。

“The individuals who started the
 Japan - America Student Confer-

ence Lead the idea that ordinary
 people could write history . They
 were not powerful enough - they
 were not old enough at the time,
 but their idea was right .

There are enough of you in Ja-
 pan today who , if you really ecide
 to work together , can change
 the course of history for Japan.”

第35回日米学生会議：主催、後援、賛助団体

主 催 財団法人 国際教育振興会

後 援 外 務 省
 文 部 省

日本万国博覧会記念協会

国際教育交換協議会 (C I E E)

日米文化センター

特別賛助 財団法人 三菱銀行国際財団

賛助団体・賛助者

| | | |
|-----------------|---------------|-------------|
| 味 の 素 | 小 西 六 写 真 工 業 | 第 一 勸 業 銀 行 |
| 石 橋 財 団 | 三 共 | 大 丸 |
| 伊 藤 萬 | サ ン ト リ ー | 大 和 銀 行 |
| 江 副 育 英 会 | 三 洋 証 券 | 大 和 証 券 |
| エ ッ ソ 石 油 | 三 洋 電 機 | 高 島 屋 |
| 花 王 石 鹼 | 三 和 銀 行 | 武 田 薬 品 工 業 |
| 鹿 島 平 和 研 究 所 | 塩 野 義 製 薬 | 電 通 |
| 川 崎 製 鉄 | 新 日 本 製 鉄 | 東 京 銀 行 |
| 関 西 電 力 | 住 友 金 属 工 業 | 東 京 芝 浦 電 気 |
| キ ッ コ ー マ ン | 住 友 銀 行 | 東 京 電 力 |
| 九 州 電 力 | 住 友 信 託 銀 行 | 東 洋 工 業 |
| 神 戸 国 際 交 流 協 会 | ソ ニ ー | ト ヨ タ 自 動 車 |
| 神 戸 製 鋼 所 | 大 成 建 設 | 名 古 屋 鉄 道 |

| | | |
|------------|--------|----------|
| 日興証券 | 日立製作所 | 三菱商事 |
| 日産自動車 | 富士銀行 | 三菱信託銀行 |
| 日清食品 | 藤沢薬品工業 | 三菱自動車工業 |
| 日本アイ・ビー・エム | フマキラー | 三菱重工業 |
| 日本医師会 | 本田技研工業 | 宮澤喜一 |
| 日本光学工業 | 松下電器産業 | モービル石油 |
| 日本興業銀行 | 丸井 | 持田製薬 |
| 日本コカ・コーラ | 丸紅 | モルガン銀行 |
| 日本債券信用銀行 | 三井銀行 | 山一証券 |
| 日本信販 | 三井信託銀行 | 山崎ナビスコ |
| 日本電気 | 三井不動産 | 雪印乳業 |
| 日本郵船 | 三井物産 | 吉田工業 |
| 野村証券 | 三越 | 吉田国際教育基金 |
| 阪急百貨店 | 三菱銀行 | |

(2月1日現在 五十音順)

日米学生会議は、「学生の、学生による、学生のための会議」をモットーとして、学生の手により自主的に運営されてきましたが、もとより学生の手だけで成功してきたわけではありません。学生の間のみでなく、社会的にも会議の存在意義が認められてきたこと、そしてこの学生会議に賛同して下さり、経済的援助を与えて下さった多くの団体・個人の存在が、今日の学生会議を成り立たせています。すなわち主催の国際教育振興会をはじめ、各後援団体・賛助団体・賛助者です。より多くの学生に、より軽い負担で会議に参加するチャンスを、学生会議の主旨に賛同して与えて下さった事に対し、上記各位にこの場を借りて深く感謝致します。

第36回日米学生会議のお知らせ

第36回日米学生会議は、1984年夏の約1ヶ月間、日米各40名の学生が参加して、米国東海岸で開催されます。創設50周年を迎えるこの会議では、総合テーマとして、第35回会議のそれと同じ、「Promoting Peace through Mutual Understanding」が使われますが、日本語訳は、「地球時代の条件—相互理解」というものです。

いつ、どこで、何が起るかわからない国際環境の渦中で、そして、環境汚染・核軍拡等の地球的問題群を眼前にして、今や人類破滅ということは単なるSFとは考えられなくなってきました。同時に、それと表裏をなすものとして、幸か不幸か、「地球人」としてのアイデンティティーが、単なる絵空事としてはすまされぬ現実性を帯びてきています。

今や、相互理解のための相互理解でなく、異文化の共存と連帯のために、相互理解は必須のものといえます。「地球時代の条件—相互理解」には、そうした含みがあります。

会議の中心は、分科会討論であり、今回は以下の10分科会を設置する予定です。

(仮称)

比較文化、コミュニケーション、現代社

会と人間形成、企業問題、国際経済、国際関係、法と倫理、男と女、少数派問題、科学技術と社会

会議参加者は、各自上記のいずれかの分科会に属し、自主的に各々の議題を決定し、討論と野外研修に参加します。

また、複数のテーブルが合併して行うフォーラム、参加学生全員が様々な視点から討論し合うシンポジウムも催されます。さらに、文化交流の一端として、ホームステイも行われます。

創意と問題意識、そして熱意にあふれた方々の参加を、心からお待ちしております。

第36回実行委員会委員長

山地 弘起

第36回会議の実施要領は、1984年2月に発行の予定です。参加御希望の方、会議に関する御質問のある方は、下記まで御連絡下さい。

〒160 東京都新宿区四谷1-21

財団法人 国際教育振興会内

日米学生会議事務局

電話 (03) 359-9621(代)

第 3 6 回 日 米 学 生 会 議 の 成 果

第 3 5 回 日 米 学 生 会 議

— 報 告 ・ エ ッ セ イ 集 —

1 9 8 4 年 2 月 1 0 日 発 行

編 集 者 第 3 6 回 日 米 学 生 会 議 実 行 委 員 会

発 行 〒 1 6 0 東 京 都 新 宿 区 四 谷 1 - 2 1

財 団 法 人 国 際 教 育 振 興 会 内

日 米 学 生 会 議 事 務 局

TEL 0 3 - 3 5 9 - 9 6 2 1 (代)

印 刷 協 実 業 公 報 社